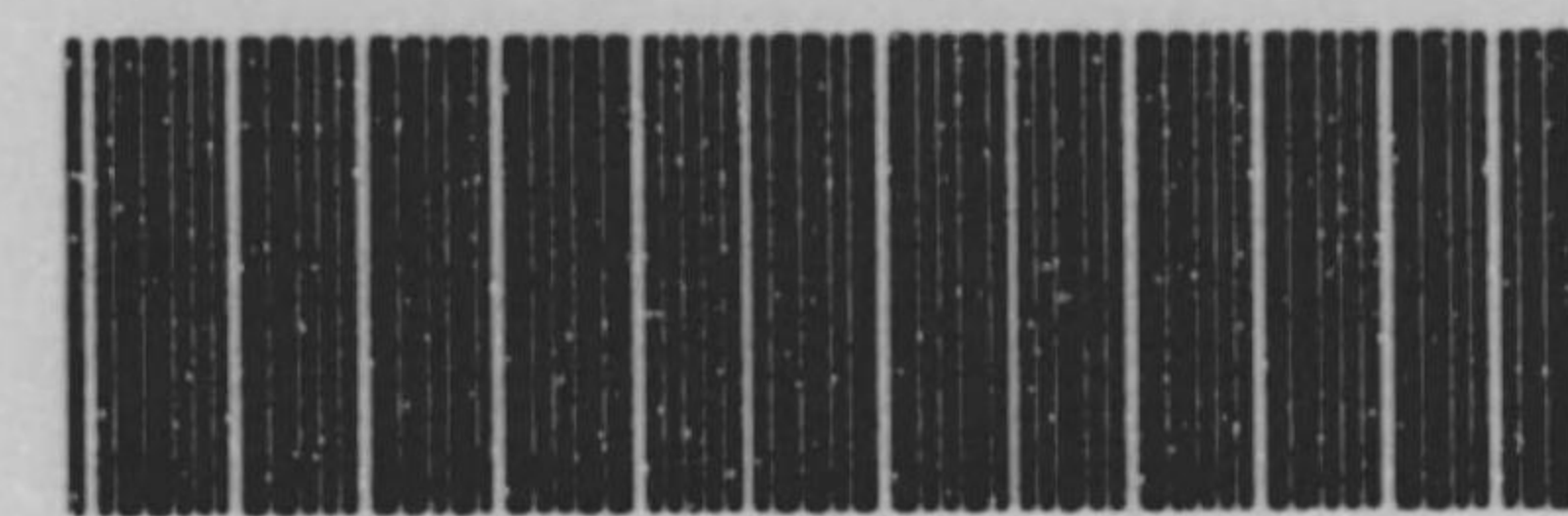


2



* 0053761000 *

0053761-000

382.22-0848s

支那習俗

太田陸郎・著

三国書房

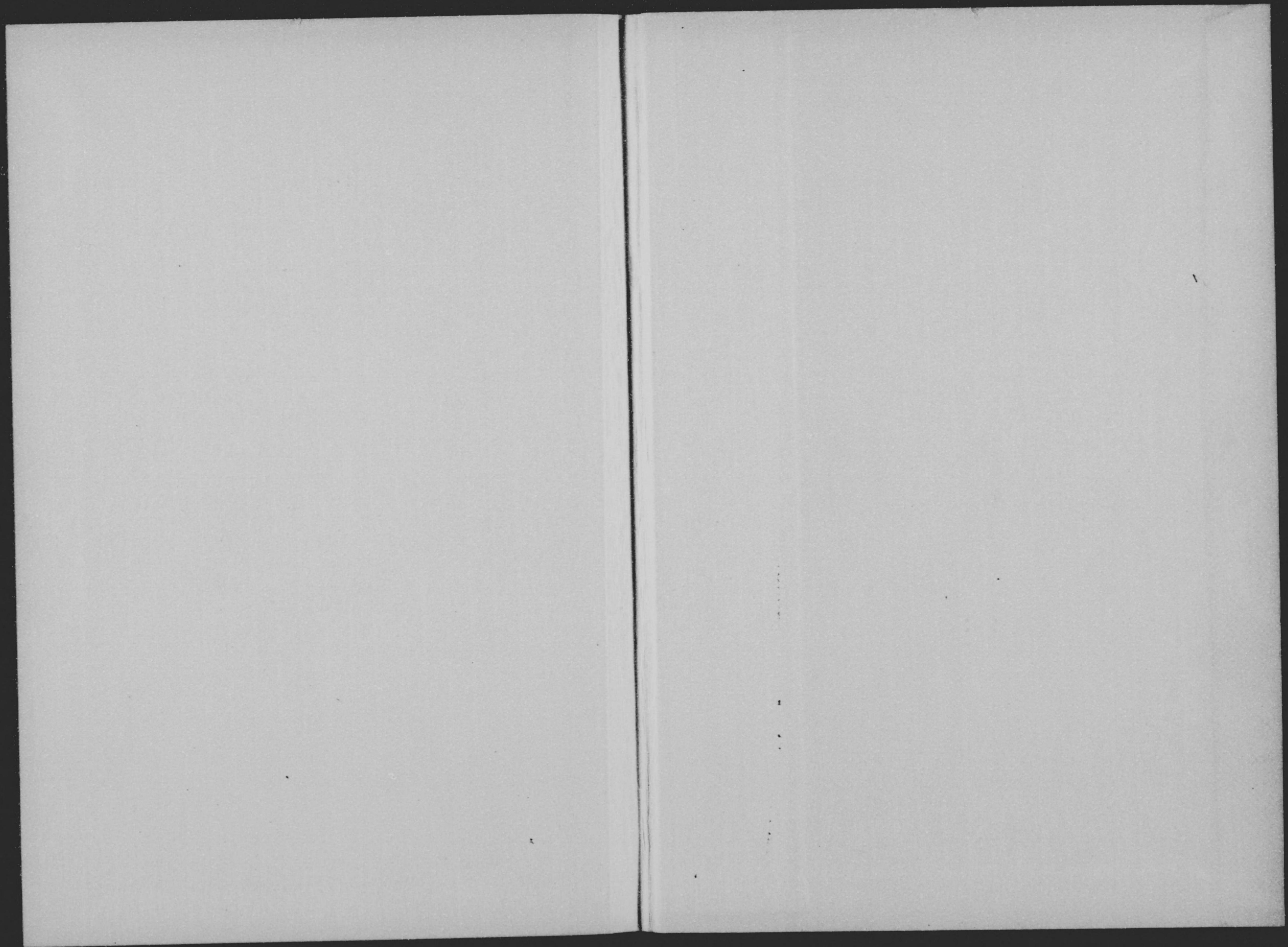
1943

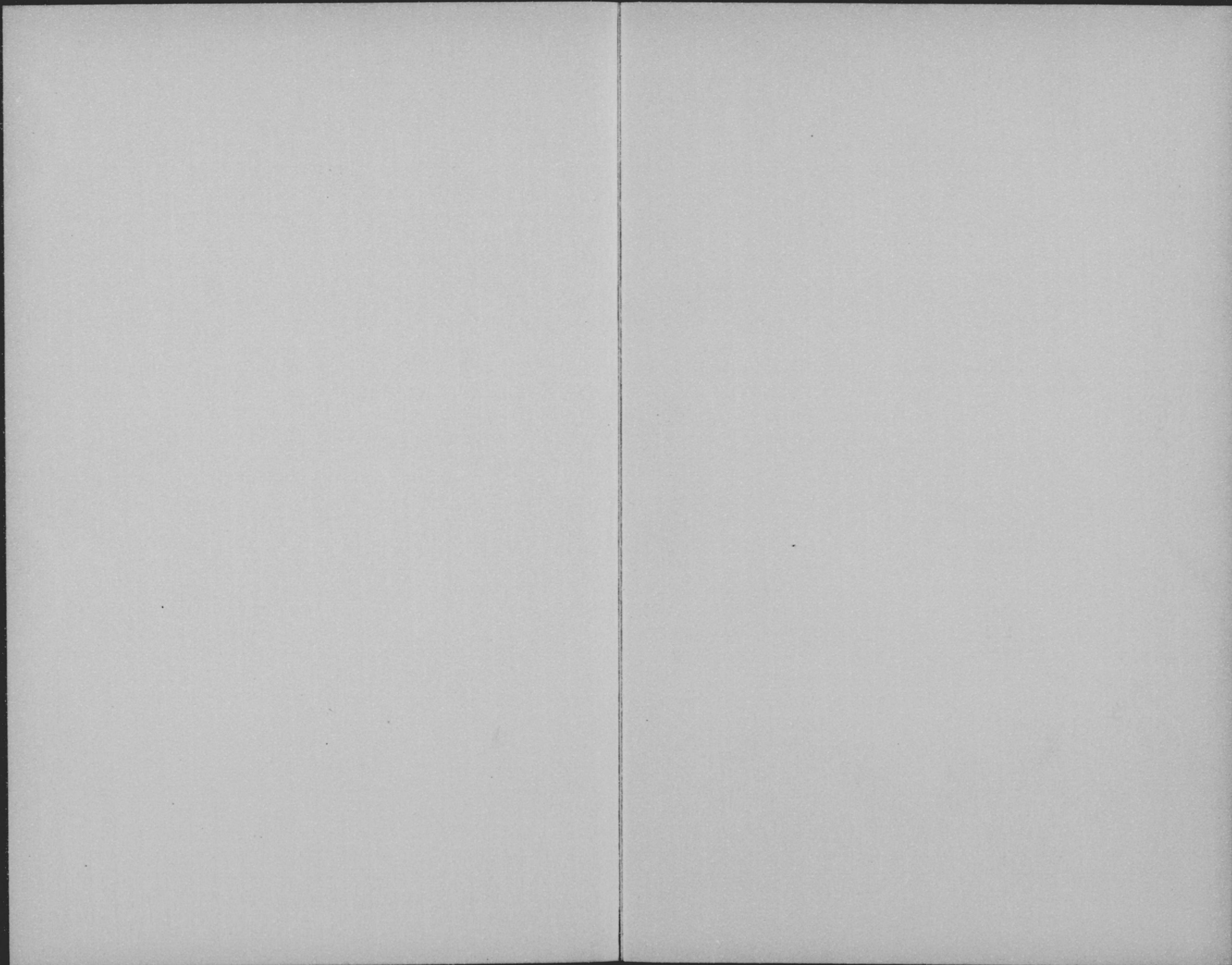
AIA

382.22

0848s

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年3月付で文化庁長官の裁定を受け使用するも





4-4k-14

太田陸郎著

支那習俗

三國書房版

382.220848A

序

この類の書物はもう大分出て居て、珍らしくも無いやうに思ふ人の爲に、敢て二三の特長を述べて置くことは舊友の義務である。

此著が細心なる實地の觀察に基づき、しかも色とりどりの都府の風流には目を假さず、大むねくすみ切つた片田舎の、貧しい生産者たちの毎日の營みを、倦まず軽んぜず堅からも横からも、見て取り寫して残さうとしたことに、先づ我々は一つの價値を認めて居る。大抵の旅人は、急いで斯ういふ方面は通り過ぎるのがきまりで、たま／＼瞥見の切れ／＼の印象が、背後に潜むものを推測せしむるに止まつて居る。土地に年久しい文章の家があつたとしても、よほどの因縁が無い限り、注意を此様な生活には傾けようとはしなかつたらう。それが何等の綜合を要せず、其まに或地或年代の現實の事相として、永く後世に傳はるやうになつたといふことは、獨り日本語の領域だけの收穫では無いと思ふ。他日若干の固有名詞が、憚る所無く示されるやうになれば、無論この記事の興味は又具體化するだらうが、さうで無くとも長江中流の、水から遠くない古風な邑里に於て、全く我々の知らなかつた、斯んな一つの人生といふものがあつたのである。それ

序

一



382.22
0848J

31341

を兵馬の暇ある毎に、いつも學究のやうなつゝましい態度を以て、ちつと見つめて居ようとした一人の武人が有つたのである。

搜しても他には似たものが無からうと思ふ一事は、此書が日本の民俗學の學徒によつて、専心に書き綴られたといふ點であらう。我々の同志は幾人か御國の爲に働いて居るが、或者は各處に轉戦し、又は繁劇な公務に煩はされて、土地の住民と接觸する折が少ないらしい。ところがこの本の著者のみは、珍らしいほどに永い間、或限られたる土地の守備に任じ、少しづつは土語を學び又何人かの顔なじみをこしらへて居る。手眞似まじりのほゝゑましい對談が、眼に浮ぶやうな場面も色々有る。太田君は出征の前夜まで、忙がしい本務の隙を利用して、日本の文化史を明かにする研究を續けて居た。十數年の勞作が積り積つて、近畿地方の傳承は明かになつたものが多く、愈々その知識の整頓に着手しようといふ、ちやうど油の乗りきつた箭先に、一應は之を中斷しなければならぬ境涯に置かれたのである。未練といふ程では無くても、普通の人ならば、ちよつとまごついてもよい所なのに、船の中で十分に腹をきめられたものか、上陸最初の日からもう協目もふらず、中華國人の生活を觀察し始めて居る。さうして次々と行くさきくの見聞を、故國の知友に通信したのみならず、更に持つて還ればすぐに一卷の書を成すまでに、五年有半の成

績が纏めてあつたといふ話である。自分等の想像では、日本に戻れば又すぐに、日本の仕事に取掛れるやうに、身を軽くしようとして居たのかとも取れる。それがこの記念すべき外國の經驗を、どんな風に役立たせるであらうかは、今まではまだ試みる機會が無かつたのである。愚かしい繰言ではあるけれども、どうして又還つて來ずにしまつたのかと、際限も無く歎息せられる。

民間傳承の會の同志の中でも、太田君が古書を愛して、珍らしい多くの事實を知つて居ること、その天然の觀察に於て、人に優れた鋭い感覺をもつて居ることゝはよく知られて居た。その二つの長處は本書の行文のうちにも顯はれて居るが、さういふ中でも私に取つて、殊に思ひ出の深いのは樹木についての逸話である。故南方熊楠先生の最後の手簡といふものゝ中に、太田君が中支の丘陵地帯をあるいて居て、峠の路にはコノデガシハの樹を見ることが多いのは、古書の記述に合ふから人が之を裁ゑて、指標としたのではないかと通信したのを、軍陣の間に於てよくも氣がついたものと、賞讃せられた一節があつた。或は江南に何故か今は梅花が少ないと報じたのも、春に先だつて常々心にかけて居たのがゆかしいとも謂つて居られる。私はちやうどその梅の盛りな頃に、或日太田君と二人で相模の國府附近を逍遙したことがある。この邊は一帯に農民が梅樹を愛して、家の戸の口から又は村の小道から、眺められるやうな垣根には必ず栽ゑて居る。

それを太田君が先づ興味をもつて、斯んな小さな屋敷にも梅が咲いて居る光景は、上方の方には少ないと頻りに感心した。或はこの花が特に好きだつたのかも知れないが、もう是からは此人を憶ひ出さずに、梅咲く村々を散歩することは出来まいと思つて居る。それから今一つ、中支滯陣の二年目の秋に、たしか武昌大學の竝木の實だと謂つて、二十粒ばかりのケンボナシの種子を、郵便に封して送つて来てくれたことがあつた。それを早速植木鉢に蒔いておくと、翌春は芽をくんで何本か育つた。信州から移植した一本の大木の外に、今私の庭に在る若木は皆太田君の種で、それがもう自分の丈よりも高くなつて居る。遺兒が成長して父の跡を歩む日が來たならば、必ず一たびはこの小園に訪れ來り、東亞空前の大戦役のさなかに、心あつて中國の土から移して來たものが、どれだけ大きな立派なものになつて居るかを見ることであらう。その兒もこの小さな著述も、共に太田君の豫期した如く、末遠い人間文化の進路に於て、木高き一つの目標とならんとを、私は切に望んで居る。

昭和十八年九月

柳田國男識

目次

進軍中に見た支那習俗……………七

揚子江の魚と漁法……………四〇

中支奥地の鵜飼……………五

城壁遺存の陶磁瓦片……………五二

揚子江と倭寇……………八二

中支の印花布……………八八

中支奥地の舊曆歳末……………九二

字藏と陶磁片工藝……………九六

金鈴盒子……………一〇三

金陵棲霞山佛教美術と六朝遺物……………一〇六

戦地よりの趣味通信……………一一六

陣中随想……………一二九

圖 蜂 戲……………二七

陣 中 花 信……………三三

支 那 の 口 碑……………三五

中 支 賞 花 習 俗……………四一

中 支 こ ども 習 俗……………四三

娘々 祭 參 拜 記……………四五

横 槩 餘 稿……………一六

叩 頭 壺 七 夕 手 ば な 一 言 堂 家 と 塀 薪・炭・鹽 薪 桂・米 珠

偽 物 布 印 花 布 備 姓 支 那 料 理……………一八

煙 塵 漠 漠……………一八

酒 日 の 丸 樂 書 面 子 看 熱 鬧 鬧 矛 盾 乞 食 蓮 根 祖 師 茶

麻 雀 洋 大 根 粽 子 德 子 供 の 言 葉 逃 足 歌 謠 事 大 主 義

官 賄 賂 かけ 値 足 言 行 不 一 致 女 尊 男 卑 曹 さ ん 着 物……………二〇

鄭 衛 餘 音……………二〇

支 那 古 民 謡 湖 北 童 謡 河 北 童 謡 武 昌 紡 紗 歌……………二一

進軍中に見た支那習俗

緒言

支那土民の生活を見るにつけ吾等はしみじみと皇國に生れた幸福を思はないではゐられない。不衛生、飽くなき徴集、實にみじめな生活である、進軍のゆきづりを見る農民生活、彼等こそは實に蔣政權のために踊らされてゐる人形であつて皇軍の進む所、彼等の幸福が進むわけに外ならない。硝煙彈雨裡にあつて郷地に通信すべき多くのことがありながらも、つい筆をとるのも延々になるのが戦場の常である。然し過去半歳に互つて進軍中に見た中支奥地の習俗を前後もなくとりまとめて書いて置きたいと思ふ。戦場にあつて、もし學究的な心が動くものありとすれば、それは實に不忠なる將兵のそしりを受けるであらう。たゞ待機の一刻には武器被服の手入、家郷への通信、楊柳の蔭を假眠の適地とし、クリークのほとりで釣をたれる、その時はのび／＼として心にゆとりが出来、色々な事象が眼にうつる。かくてこの次の行動への準備が出来、英氣を養ひ

進軍中に見た支那習俗



を知つて頂けば結構である。

支那に來て特に感ずることは、日本の諸事情を、各方面の角度から研究した文書の多くを認めることである。吾人もより以上支那の内容について、充分に研究する必要を痛

うるのである。「視死如歸」の言葉は其間も變る事は勿論ないが、文字通り忙中の閑であり、視野は四圍に及ぶだけである。以下は武漢攻略戦に參じて進撃した一兵たる、自分の觸目した中支奥地方面のゆきづり、否より以下の觸目した機會の隨筆にすぎない。然し軍機に關する事項は當然省略の止むなきに至るし、又記録を行はないため要領を得ない點も亦許され度い、たゞ從軍將兵の目に如何に支那の土俗が映じたか



感ずる次第である。萬々一本稿が支那を知る上に役だつ寸言ともなれば著者の光榮であり、喜びである。

都鄙の文化の差

揚子江の重要都市で、外國國旗のはためいてゐる地域では、よほど現代文化に浴してゐる感があるが、一步農山村に入ると、雲泥の相違を見出すことである。衣食住凡てに於て然りである、九江附近では街路樹にプラタナスがあり、しかも日本では巨木と云ふ程大きな物が路傍に存在する。おそらく、内地では小石川の植物園以外では見かけない程度であつて、古くこゝに移植されたことを知ることが出来る。當然九江即ち、古都「潯陽」には外國文化がそれ程深く植ゑつけられてゐる。ことに廬山の避暑地と不可分にあるだけバタクさい感があるが、一步郊外に出てみると全く農村で、村民の多くは藁のなかに寝てゐて、何等の影響も生活上には受けてゐない。否むしろ受け得ない彼等であらう。九江から上流にのぼるにつれて、古都瑞昌の如きも地圖上では大都市であるが、全くの田舎町で手工業から一步やゝ進んだ織布工場の存在する程度である。今回の事變の激戦地として知られてゐる武穴も、同様工業上の都市として知られてゐるが、全

く田舎町程度のひくい文化地域にすぎない。此地から離れて一里もゆくとそれこそみじめな農村である。この武穴瑞昌の線から上流、漢口迄は山又山の山地で、山ふところに所々數軒の農家が点在し、山の斜面を耕作して生活してゐる者が多く、山畑等も見受けられる。日本の様に水位差のない支那では、山地にも落差を利用する發電装置がないため、主要土地にしか火力發電所がなく、照明に不十分な、原始的な棉實油を常用する地域が、武漢三鎮に迫る地域迄續いてゐる。漢口に來てはじめて「よがあげた」感をもつのである。ことに建築物の偉大なものには驚くが、外國資本の致すところ、都鄙文化差の結果は、全く都市のみをあかるくする結果を來してゐる。

差異を最も具體的に語るものは、都市を一步離れると洋種のかゝつた犬のゐない點、植物ではまづ武漢の地で、コスモスを見かけた程度で、クローバーと共に奥地ではまづ見かけない舶來植物があることである。農村民に巻煙草をやると「不要」で手を出さない彼等である。都市で見かけないわらぢを、田舎でみかける事の多いことは、内地の「おはぐる」と同様な結果を示してゐる。

農村雜感

中支も奥地に來ると全く大陸的な感じがなくなることである、耕地も階段式に次第になつてゆく、平面的な地域がありとすれば揚子江岸に接した所で、よしが生ひ茂つてゐる。一度増水期になると一面湖水に變ずる地點で、沃野と見るのは誤りで、幾千年來手をつけてない所を見ると、農耕には適しないのらしい。これに反して山間は隅々まで耕作されて二三十坪の小畑のあることは何處でも同じである。昔ばなしの自分の田が一枚知れないので捜し求めると、自分が敷いてゐる「ミノ」の下にあつたといふ日本の山奥の耕作地と變りない。そして所々に村落がある、自衛を主體にして集合した窓の少い家が点在する。南京附近迄の廣々とした、求め捜しても眼界に山のない地域と異つてゐる。水田には私の見た頃にはすでに稻穂が色づいてゐた、稻は挿苗である所が多い。其間に紅蓮が靜に咲いて、水牛が水だまりに首だけ出してゐる、楊柳と水牛、南畫にはよき畫題であり、行人にはよき詩趣かも知れないが、吾等にはあれが牛であつて呉れたらと思ふ以外、さして問題にならない、水牛の肉の強さには毎度困らされてゐるから。でも朝まだき水邊に咲いてゐる紅蓮は何となくすがすがしい感じを與へる。瑞昌近くではクリークに鬼蓮のとげ／＼しいのを澤山見受けた。畑には多くの棉、煙草が耕作され、山畑には甘藷を多く見かけた、赤い種類で案外甘く、砂糖代用にこれを味つけに利用する方策もあり、飯用にもなり、

如何に皇軍を助けたか知れない。都市近くの畑には菜を見かける、大根、葱はよほど高級品に属するらしい、稀にしか見受けない。落花生、胡麻、最も美味で珍品は里芋である、南瓜に至つては形は大きい、全くお話にならないまづさである、茄子、胡瓜、垣根のいんげん豆はやはり軒近くの畑の作物であり、武穴附近では内地のやまのいもに似た「山薬」と呼ばれる「いも」を珍味とした、だが不思議に感ずることは畑のすみ、庭のほとりに花一つ植えてないのが農家の一般であつて、おそらく見かけないものであつた。それと同様に果樹も庭先には絶無である、たゞ紅いものは「トウガラシ」の實だけであることはさみしい感じがした。武漢地方ではじめて菊を見かけた時、その花を食つてしまひたい程、だきしめたい程なつかしかつた。でも何の香もしないことを、次に知るとともにさみしかつた。其他人蔘キャベツは高等蔬菜に属する事勿論、牛蒡は何處にも見かけなかつた、満洲には野生のものがあるとのことを聞いてゐたが、遂に発見しなかつた。葱の少いのに反してわけぎの多いのには驚く。

耕作方法は畝をもたない平面に全面的な時きつけであつて、一丈程度の間になが作られてゐる。人糞の使用は奥地にくる程多くなつてゆく、豚、牛の糞、しきわら等が土と交配してつみかさねてあり、土肥として使用されることは内地と同様である。

奇異に感ずることは草花の栽培されないこと、共に果樹のないことである、たゞ田家鎮（要塞として知られた）附近の山ふところでは柿を見かけたが、全部澁柿で極度に澁いものであつて種のないものである、一二信濃柿（チ、がき）を見かけた程度で、果樹らしいものを見かけなかつた。形は富有或はみしらすの形のもの、うしろ種の様のものであつた。たまた庭園になつめあみずがある。農具は凡て内地と同様と考へて可然かと思ふ。より原始的な物が多い。たゞ竹籠



竹籠使用の揚子江岸の筏

に至つては浅い皿形の直径丈餘にも及ぶものがある、棉の實をとり入れたり、日本の筵の代用のものらしく、其他の採種は、何も出来ないで地上に作業されてゐることが多い。竹の製作品に至つては内地のものよりすぐれたものを見かける。殊に驚くことは、竹を細く割つて筏に使用されてゐる太繩は上海に下つても尙賣價ありと云ふだけに、驚くべき製作品だと考へられた。内地にも竹繩ありと聞いてゐるが、自分には未見である、如何なる種類が農具にあるかを左の表に依つて知られたい。

犁(耕地)、鐵鋤(鋤草)、耙(耙地)、鐵籠(耘土)、木枚(脱麥粒)、木蜀(除皮)、耨(中耕)、排枚(遷移收穫物)、石滾(豆麥等脱粒)、脚頭(玉蜀黍等刈取)

おそらく以上のうち、石滾を除くの外は内地で使用されてゐるものであり、假になしとするも類似品を求め得よう。石をころ／＼と馬或は牛にひかして脱粒する風景は、内地では一寸見得ない光景であらう。其他、とうみの如きも全く同様である、嘗てバックの「大地」の映畫を見て不思議に思つた農具を、再び不思議と思ひつゝ眺めたことであつた。史的考察からは當然だとされるであらうが、現實には理論を離れた感がする。

はきものに關しては、農民の多くは手製の木綿布のものであるが、労働者はわらぢをはいてゐる。たゞ内地のものと異つてゐるのは、チ、の長い點である、漢口に於てもやはり苦力群にわらぢ賣の子供が來てゐる。このわらぢも日本に類品を求めるならば、東京帝室博物館の展觀佛像地藏像だつたか、奈良期(?)の國寶の尊像のものと同様であることを思ひ出す、それは當然わらぢの東漸を語る重要な資料などと、語る相手もない戰場で何回となく考へてみる問題である。

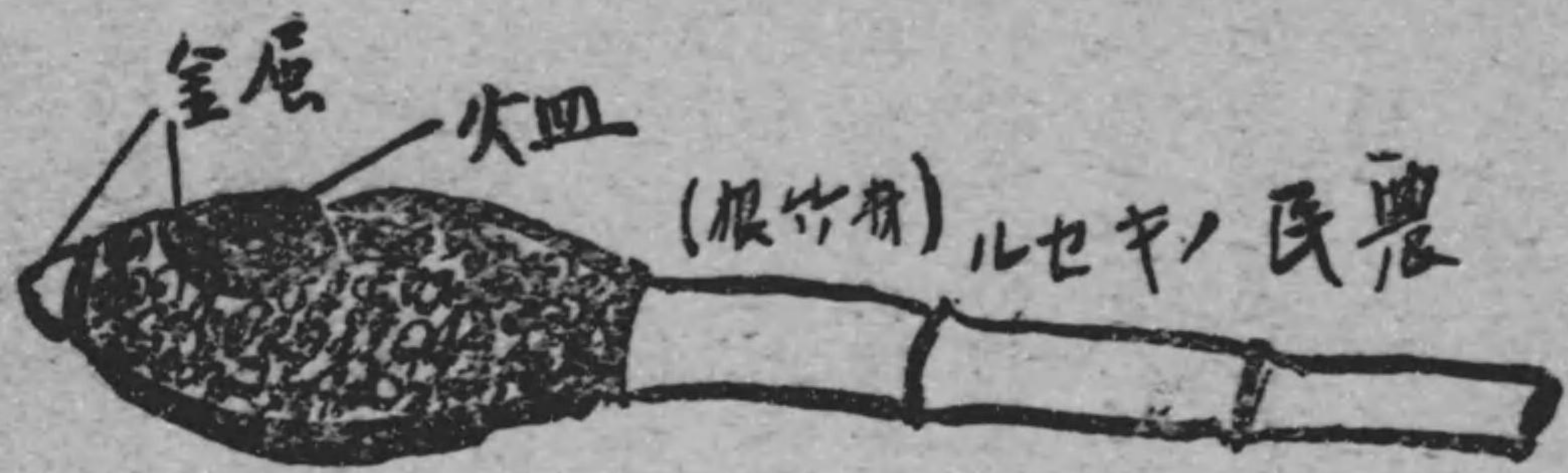
戰場で見る農民は、全般的なもの見得ないから、局部的な觀察に終ることは勿論であるが、粗衣をまよふ農民の多いことである。おそらくつぎのあたらない着衣のものは珍しい事實で、

つぎはぎまみれのものを着てゐる。一般に奥地ではミシン縫のものに會ふことが少く、やゝ高級なものも手縫である、然もこくめいな小縫で可驚上手がある、こゝろみに老女につきを依頼してみると、中々すばらしい技術を有つてゐることが知られる、何處の家庭でも寸角の小ぎれも丁寧に保存されてゐる、昔、といつても今から三四十年前、自分の子供の頃、田舎で背あての衣類をきてゐた頃が思ひ出される、つぎが上からあてられることは、日本では過去のことにしてゐるが、こゝでは今尚行はれてゐる事である。棉を栽培して絲についで、織りあげる工程がみられる、麻も自分でうむのである、麻といつてもからむらしい、所々からむし(まを)の栽培を見かけた。又藍房があつて藍がめを見かけた、草藍が耕作されて手織木綿でせめられてゐる。要するに日本より半世紀或は一世紀おくれであることである。興味深く感じたことは紺木綿のおきがたの布である。自分が子供の頃(播州)、農家の子女が田植時に、晴れ着として用ひたおき形のおこしと、同種類の物の存在するには面くらつた、だが此話も誰も年輩者のゐない戰場で話題とする相手がないから、腦裡を往復したに過ぎない問題。食物に關しては詳細を知ることが出来ないが粗食であることは事實で、各種の材料からも知ることが出来る、ことに備荒に關してはよほどの苦心が拂はれてゐると思ふ、米はもみで保存され、やゝ都會地にある米廠と呼ばれる精米

所もみから白米迄全行程を行つてゐる。もみすり臼の如きも内地と同様なのに驚いた。あらゆるものが、かめに保存されてゐること、陶磁器の多いのには驚く、昔々いんべ焼の種つぼが今花づつとして珍重されてゐる日本の昔話の如く、種も茶も陶器の内に納められてゐる、壺、瓶の多い支那に、且夕にかめを運搬した話などもうべなるかなと思ふ、だが胴ばりのした桶も相當見受けたが竹輪はまれにしか見受けなかつた。

植・物・雜・抄

武漢攻略戦は夏から秋にかけてとあつたが植物は秋になつて初めて花をみて、これもあつたのかと感ずるものが多かつた。大體揚子江岸地帯には漢口迄森林らしいものを認めなかつたことである。湖口の附近の山に若干植林されたと考へられるものがあつた、赤松、杉であつた、廬山には名山だけに耳なり各種の植物があるらしく最近刊行された廬山誌によつて楠、銀杏、臺灣檜等の巨木のあることを知り得た、楠は瑞昌附近にかなりの古木があつたが松の老木はまづ認め得ず松柏の類では「このてがしわ」に至る所で見かけたことである、馬琴の八犬傳に信乃が山中で道に迷ひ「このてがしわ」によつて東西を知る一くさりがあつたことを思ひ出すこと再々で自分も



進軍中に見た支那習俗



東西を知らぬ中支に來て何度この木によつて東西を知つたか知れない、自分の隊の兵にも東西を知る方法として教へたことである、多分支那の古典籍から馬琴が引用したのだらう等考へると一つ南方先生にでも出典の如何をたづねてみたいと思ふこと一再ならずであるが、戰場では如何せんやである、楊柳、杏、なつめ、ぎよりう等、庭園に近くあるものは楊柳を除く以外は内地にも見かけ得る。梅はないのかとよくきかれたが遂に見かけなかつた。でも梅の花の精が美人蛾蚋(？)だとの話、或は黄梅の地名からしても多く有る地方もあるのだらう、桃は至る所で見かけた、竹は主としてもうそう、竹だが支那では別名のある事は勿論、日本が二十四孝でかく命名したに過ぎない、日本ではこの竹はあまり有用でなく、たまさかズ

ンド切の花筒位であるが、支那では各種のものに使用されてゐる、最も多く見かけるのは竹の棒（割つて）にされてゐる事である、籠は主として日本の苦竹である、斑竹の多い事は豫想以上で内地で圓窓に寸尺をおしんでゐるのが馬鹿くさくなる程である、吾等は此竹を利用してテントの柱として便益を多分に得た。

都市では器具類の多くは楠、紫檀材が主材となつてゐるのに驚く、遠く揚子江の上流から流されてくる丸太の多くは檜で、日本の電柱に使用されてゐる程度を最高として株口三四寸程度のもが多く、のびのよい末落ちのしない上材である。

耕作植物に關しては大體前段に舉示したが凡て内地のものより劣つてゐる、白菜の如きも山東省の如き結球したものはまれで、大根も極く短い尻丸の徳利形のものであつて、其他體菜、小松菜の如きを主として、菊菜、ホーレン草は變つた點を認めない、進軍中は丁度秋のさかりで小松の茂つた山すそには萩、葛が亂れ咲いてゐたが、女郎花は遂に見なかつた。桔梗と同様でないらしい。葛は内地のものより色こく、野菊は極小形の眞黄のものがよい香を放つてゐた。栽培の菊は大體が厚物で可なり多く洋種もあつた、然し是は武漢の地に限られてゐて、殊に武昌では多くの菊の接木、咲わけが見受けられた、何か菊科の雜草に割接をしたもので、砧木の何草であるかは不明である、菊の香をしたふ吾人に香のない花は玉の盃に底のない心地であつた、一番植物中自分の心をひいたものは武昌大學の校庭に澤山植樹されてゐる「ケンボナシ」の若木に實がなつてゐたことで、子供の頃に返つてしやぶつた事である、此小木に結實する實は内地のと異つてゐるが、こゝにもあつたのかと呼びかけた程であつた、歐洲にもあるのだらう、プルノー・タウトの工藝材に澤山此材が使用されてゐたから、さては先生獨逸で承知し日本に來て使用したのだらう。

動物 雜抄

揚子江には鱉があると聞いたが遂に見かけなかつた、大きなとかげは廬山の近くで一度見かけた、一尺程で、蛇はやゝ色のきつしま蛇で、とかげは青とかげも澤山ゐた、壕にこそそはふ炎天の頃のとかけ等は一二分の蟲にも相當しないもので蛇と同様たゞ厄介なと思ふに過ぎない奴であつた、蝗蟲は名物とて可なり澤山ゐたが天日を暗くする如き群は知らずに終つた、古詩に秋螢をよんだものがあるが、支那に來てはじめてなるほどどうなづけるわけで、秋も十一月にまだ闇夜をゆるやかに飛ぶのは變な感じがする、何か人だまと不可分の關係にあるのではないか等と思ふ、手にとつてみるとやゝ細形なうす黄の奴で異境の螢の感が充分にする、何となく同種だと思ふ、

ヤクにさわる心がしてならない、日本のものが優越してゐると愉快である。

鳥も相當澤山あるが多くは鶯、鳥で朝鮮鳥と内地で呼ばれてゐる首に白い輪を入れたものが群をなしてゐる、雁は群をなすとは聞いてゐたが實に大群で何百羽とも知れず夕闇近くせまる頃江上を飛ぶ、童謡の「かりかり渡れ、弓になれさほになれ」を思ひ出して、獨り口ずさむと列が變化してゆく、その上をより高く、友軍機が爆音高く列をなして飛ぶ、實に愉快な夕景である、白鳥の群も飛ぶ、江上には「かもめ」も澤山最近ではゐる様になつた。かなり大形なものである、家畜の鶏、是は戦陣では全く有難いたまもので鶏卵と共に皇軍がどれだけ英氣を養つたか知れない、まづ名古屋コーチンの小形と思へばよい、あひるの群もよく見かける、江上の筏に飼ふこれ等の家禽も一寸變つた風景である、小鳥は雀以外は名も知らぬ鳥で、九官鳥に似てまつ黒な鳥がよくさへづつてゐるが、その名を訊ねてみたいと思ひつゝ現時迄不知に過すのも戰場である、雀は何處にも澤山ゐるが、誰の作話か或は支那の話かしらねど武漢戦のはじまると共に「漢口は大變暑くて屋根の雀が足を焼いて落ちたのを猫がひろつて舌をやけどした」の落語は陣中至る所の笑話であつた、或は「電線にとまつた」と話されてゐたのも聞いた、これが隊ごとにその地方地方の方言で話されるのだから、隊が異ると全く笑話以上の話になるのも面白い。

家畜は豚、牛、水牛、稀に山羊もみかけた、武穴で村民が皇軍の勝利を祝して豚と牛と芋とを持って祝賀に來た、紅唐紙に何でも「祝日本陸海軍大勝利云々」とあり祝賀のため奉呈、野猪、牛、芋頭とあつた、隊長として引見、金を與へようと云うたが取らなかつた、然し無償で受けることは皇軍としてなさざるところ、鹽少量を與へたが三拜九拜、彼等村民間では全く鹽は珍味中の珍味としてゐる、豚が野猪である事も初めて知つた、芋頭は内地の里芋である、徒然草に「芋頭をくひけるが」云々の話のあつたことを獨り思ひ出してほゝゑんだことだ。兼行法師はさては漢籍をおよみになつて、此文字を使つたのか等、ほとゝ／＼自分の學才のないことを支那に來て恥とした。



瀬戸貝に宿る蟲

古典籍には再々廬山に虎が出た事、潯陽（九江）に迄出たことが書かれてゐるが、廬山誌にも虎がすむとあれど、最近は何、康熙年間のことは一寸信用し難しである、犬は澤山みかけた、耳のたつた支那種で遠吠はするが、手近にはよつて來ない。來れば一太刀と鯉口を切つてゐても遂に名刀にけがらはいない犬の血をぬらずに終つてゐる、支那人のなりもの入りの夜の突撃も、肉迫戦になると退却する國民

性は犬の上にもあらはれてゐると思ふ。

漁業寸記

おそらく江岸の村民はみな漁業をやつてゐる、都會近くにはジャンクに乗つてそれを住家とする者も多いが村民は小舟に乗り、或は江岸に、かまぼこ小屋を作つて、其内でゆう／＼と煙草をくゆらしながら四手網の綱を引いてゐる、四手網も大きなものになると、五間四方位のもある、大體釣をしない様でよくとれる、九江の町にある湖水には多くの魚をみかけた、文獻の示す所によると、此湖水の魚は八家の者に限り漁獲権があり、八種の魚をとる各一家があるとか記載されてゐた。其方法について追求して見るいとまもなく進軍した。

揚子江の魚族に關しては七月頃に大毎に誰かゞ記述されてゐたやうだ、二三月後に其新聞の一回分だけを見たが、海魚の多くがゐることを述べられてゐたやうに思ふ、切抜をもたないまゝ記憶による以外ないが、湖にか何處かに海豚料理が名物とかの話を見た様に思ふ、自分の見たのは廬山下の甘棠湖で名古屋フグを見たことである、サヨリ、メバル全く海と同様である、メバルは貴魚と書かれてゐる揚子江中の美味な魚である、鯉、鮒、ぎょ内地のものと大差なしである、

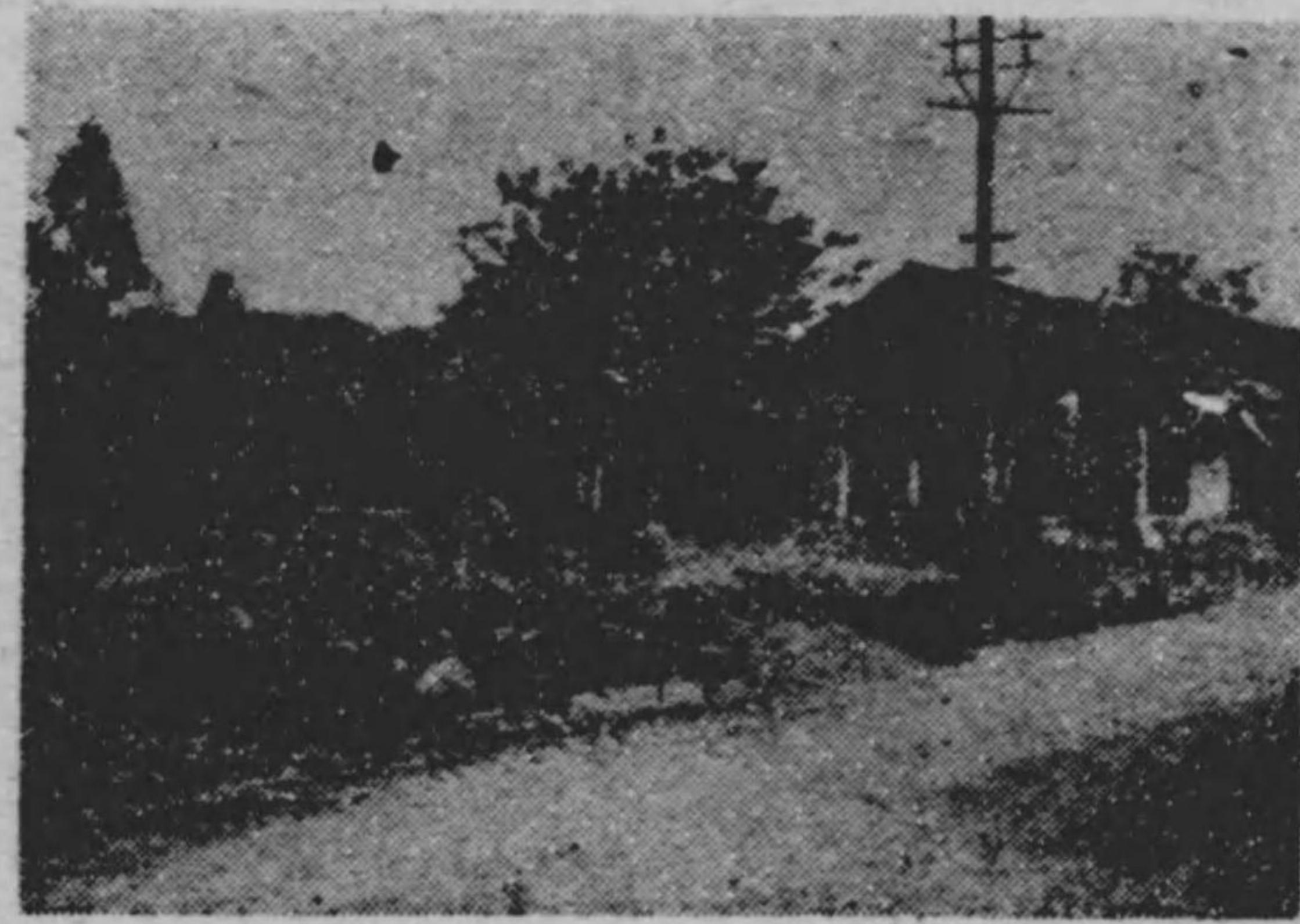
鯉、鯉には五六尺のものがゐる、鯉の五六尺のものを見た時には全くいやな氣がした、相當どきよのすわつた兵隊も此鯉だけは食はずに終つた、不氣味な魚である、すゝきは既に松江と支那との關聯で淡水にゐることが想像されてゐようと思ふ。最もうまいのはえびである。内地の河えびと同様、其他鯉に似た鯖魚と書かれるもの、たなごに似た編魚等々何れも大形で泥水生活のためか眼が小さい、いるかもゐる、實に泥水で下の見えな揚子江は珍しい魚の棲む所である、最近源五郎蟲の背に宿かりしてゐるセト貝の小さいのを見かけた。

埋葬見聞小記

吾々は支那の古墳の偉大な事聞きもし見もして來たが王公の墳はともあれ、庶民のものについては今日迄さして注意をして來てゐなかつたが、村々にある墓地(?)は戰場では重要な地位を占めてゐる、それは一に盛土の利用が相互になされるからで、可なり支那軍は之を利用してゐる厄介な地物利用である、だが中支方面の奥地では古墳と云ふべき程のものを見なかつた、町はづれ、村はづれに盛土を認める、或は家の軒に畑の中に至る所で見受けた、棺は寢棺で一般に楠材である。上級のもの黒ぬりに朱を所々にほどこして金箔をおき、板も二三寸以上の物を使用



土民の墳墓



圓墳の周りに環状土坡

した長さ文餘のすばらしいものである。下級のものは白木の儘で死者のあつた場合は畑、川岸等に棺を入れてカスガイで止めて土に埋めないで置いてあるものが相當澤山ある。一定時を過て埋めるとの話、其間は誰の所有地に置くも可なりとの事、但其確實な點は不明である、九江附近は土を別圖の様に盛り墓碑を置き一群をなすもの

がやゝ多かつた。奥地に進むにつれ散在して畑の間、家の軒に山村では見かける。武昌方面に來るとやや形式が異つて圓墳と圓墳周に盛土をした圓の形式の物を始めて見受けた（寫眞参照）この寫眞に示された通り家の近くの樹下に上掲の環狀の壁をもつ墳が見える。こゝは武昌大學に通ずる主要道路の傍である、墳墓がやゝ整理されてゐるのは漢陽の大別山の西側が一定されてる程

度で、村、墓、畑の混在である。

かどまつ、しめかざり

戦地にも正月が近づくとつれて門松七五三繩は大きな話題となつて、何れの隊でも苦心して材料の蒐集を始める。幸に中支も武漢地方では松も相當ある地方もあるが、〇〇には附近に山がないために松を得ることは至難であつた。竹も同様である。さすが〇〇には二十四孝で名高い孟宗の母の墓があるだけに、あまり遠くへ行かずとも竹を得る便利があつたらしい。遠く三四里もいって、松竹梅を求めて來る。事はじめの日には多くの隊がちゃんと門松も七五三繩もかざりつけてゐる。七五三繩は多くが吠をほぐしたものである。然しそれは武漢地方であつた。幸に私は正月に任務の関係上四五十里の範圍をみることに來た。山村では材料が多いだけにすばらしい門松を見つけた。竹なども直径二三寸のものを斜切して、内地以上にすばらしい物であつた。また七五三も、藁、稻穂が充分使用されてゐた。如何に小さい隊でもかざりつけはりつばにされてゐる。門松のあることは「日本軍人これにあり」のシンボライズに外ならないのである。然も出身地域によつて夫々の地方色が門松にはつきりと表現されてゐることは實に愉快な風景で、變つた門松

の隊では歩哨に一々出身地をたづねてみたくなる。だが吾等は「戦する身」であつて民俗學の採集でないために、みす／＼ゆきすりにみたにすぎないものも多く、残念でもいたし方なしである。是もうれしかつたのは、大冶附近の農村で丁度日本の舊家のやうな家の門前にすばらしい門松と国旗のあつたことは、地形があたかも内地同様であり、植物も、しゆろ、くすあり、山麓の階段式の畑のふちにこんもりと茶の木がところ／＼あるのは何とも云ひ得ないなつかしさであつた。

だがかく迄にして戦地では門松にせめても内地の正月感を味つてゐるのに、内地ではしきりに門松廢止論が唱へられて七五三は紙の印刷物だとの通知があつたので、皆がつかりしてなんと俺等は門松がせめてもの正月だのに、内地の門松廢止論なんて大々反對だと、話題として何回もとりあげられたことである。今日は左義長だからとしきりに四辻で左義長をはじめて、又々反對論をむし返してゐる。

おそらく、農山村で松林の必要の若松迄門松として切つて賣る者もなからうし、又門松専用栽培してゐる所も可なり多く、梅竹もこれがために減することもなからう。もし近代のかど松がおごりに過ぎると云ふなれば古格に歸れと云ふべきだと思ふ。すでに長江の奥深く、日本の門松は延長されて、如何に一線の將兵に故郷の正月を味はせ、慰安を與へたことか、それなのに本家

の内地で廢止されようとは戦地にゐる者誰もが不平であるのは當然であらう。左義長の日にはやはり童心に歸つて眞に「餅のかけ」でも捜す心境である。一月十六日には漢口の西本願寺の別院



〇〇部隊の門松

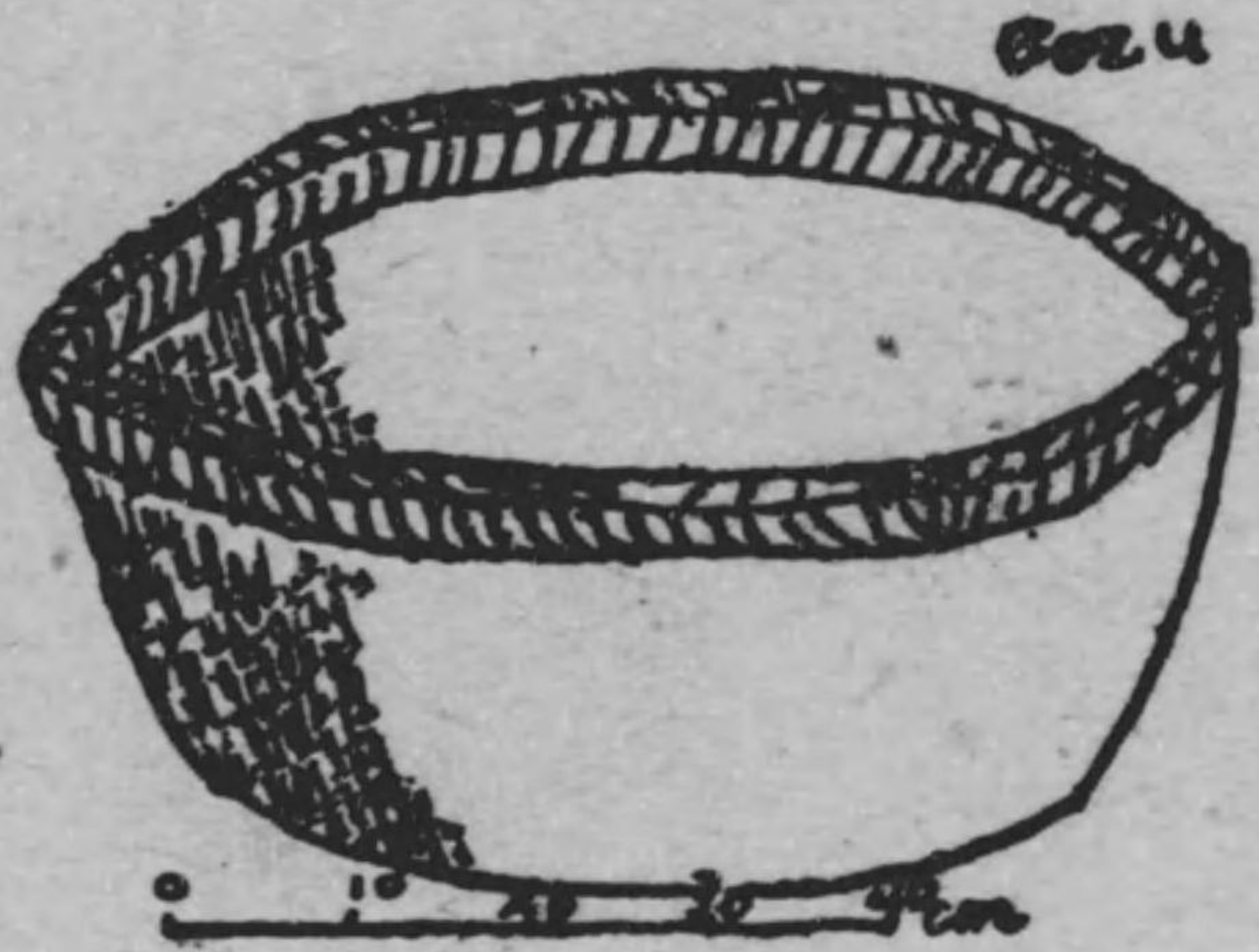
で報恩講のある掲示を見て念佛心のない連中迄一ぺん參つて來よう、と語つてゐる。ゐのこの日にはやはり其形だけは行つて話題をまして行くことが如何にたのしいか、習俗のもつ意義は戦地に來てます／＼深くなつてゆく。

今日は一月十五日であつて小豆と餅とを入れた粥を食べる日である。一碗の粥中に二三の點々として小豆と、固くて食ひ得ぬ程の餅のかけがたまに出て來る、誰れもが十五日正月を味つて甘い／＼とすゝつてゐる。隅の方で一兵が「ワシのお粥にはもちも小豆もアラヘンゾ」と言へば「シンボウセ、餅一ツやろ」と隣から小豆大のカタイ／＼餅をはしにはさんでさし出してゐる。「今頃ウチのオカアは一杯はワシの分だといいで小豆粥をくうとるだらうなあ」など大聲でどなつてゐる。「いらん事いふな」と誰か怒つてゐる。其兵隊は十五日正月の家の有様などを思ひ

浮べてゐるのだらう。

註、この場合「オカー」は自分の女房の意であつて母の意でない。

籠



竹の利用は前にも書いた通り各方面に利用されてゐる。大は直径一丈以上の「タポーロ」これは圖に示す如く、あさい皿形のもので、内地の蓆同様に使用されてゐる。綿の採集には多くこれを使用し、茶もこれにつままれてゐるらしい。小は直径二尺位の「シヨウポーロ」に及んでゐる。籠（ポーロ）が使用されることは何等内地との差を認めない、否より多くが使用されてゐる。ことに木炭迄が籠に入れられて搬出されることがある。この種の竹を材料とするもの他に、柳を原料とするものがある。嘗て神戸の某貿易商が最近獨逸へ柳行李の辨當籠が輸出されると聞いたことがあるが、柳行李は純日本のものとのみ思つてゐた豫想は中支の奥地に來て全く裏切られたかの感がある。上圖に示した「ポーロ」

はあさい皿形で、日本同様柳をさらして麻絲であんだもので何等の相違をみない、殊に此具について興味あることは工作上で至難とされる八角形を上手にうくり、マチには各邊一ヶ所宛茶に染めた模様認められることである。この外此種のものに深い形で、フチを板ではさんた種類も存在



タポーロ（大籠）



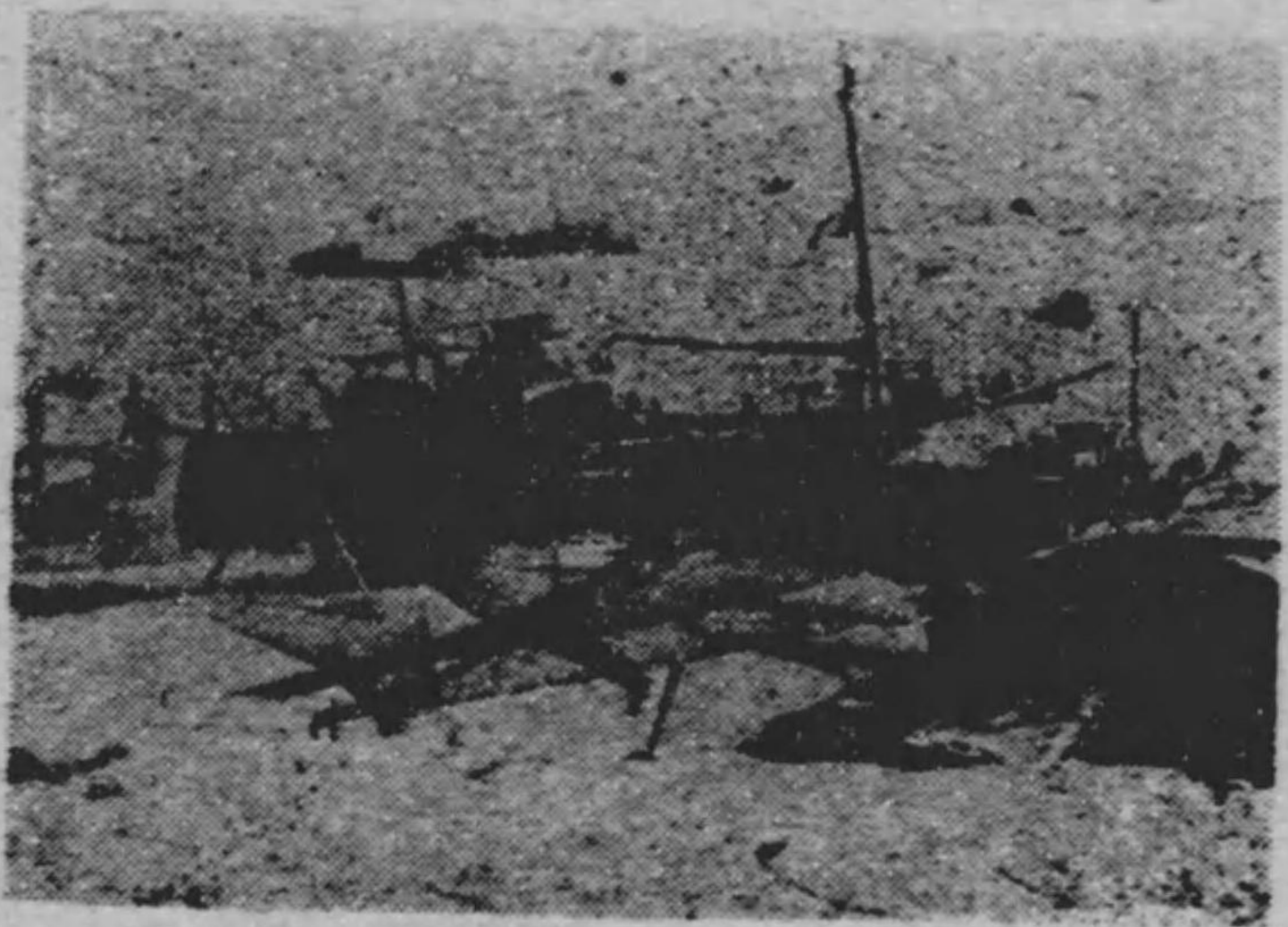
市標示する記號
(皿籠を三個中室にかざす)

することである。この種の柳が何處で産するのかは知らないが、可なり多くの器具をみるから、湖南湖北の如く湖の多い地域に産するものと考へられる。

網

進軍中に見た支那習俗

揚子江の川口から上流にのぼるにつれて兩岸に楊柳が次第に多くなつて来る。其の間に點在する民家は多くは漁家で、夏期には楊柳のかけにカマボコ小屋をつくつて南晝其まゝの四手網をか



江岸に干されてゐる打網

けてゐる風景をよく見かける。四手網も大きなものになると四五間方のものがあり、ロクロをつけてひきあげてゐる。又やゝ大形船のヘサキに四手網をつけて自由自在に運航してゐるものもある。だがこの四手網にはあまり大物はかゝらないらしく、雑魚の類で、貴魚、鯉等はまき網、打網を利用してゐる。まき網は内地のセバリ（播州附近）の香魚をとるものと同様であるが、麻絲のふとゝいので三四寸角目をもつてゐる、高さ一丈餘りもの長いものである。ひきあげると大きな魚が目をさしてゐる。

打あみもよほど大きな丈のもので四、五間もの長さでこれをたくみに打つてゆく。混濁した揚子江では魚鮮はととも發見することは不可能であるが、兵隊が待機の間網をひいてゐるのをみると各所にゐるらしい。揚子江の魚族の多いこと、産額も亦

可なり多いことが知られる。別圖に示す如く、網をすくには内地と異なる形の針を使用してゐることも考へ方によると當然とは謂へ、不思議に感じないではゐられない。

武漢三鎮附近ではこの何



網をすく子供



漢口租界江岸の魚市

十何百も知れない漁舟が朝早くから租界の岸に集つてゐる。たゞ漁舟のみでなく此頃なれば、農産物から薪迄運搬して來るのに對して市街地商人は日用品雜貨を岸に持ち出して露店で店舖をかまへて大群の市が結成される。こゝに行けば各種

の品物が交換し得るわけで、可なり遠方から來るらしく、小さいジャンクに家族づれで乗り込んでゐる。ある者はこれを住家として可なりの小兒も船中にゐる。此市には一ツの支配權をもつて



漢口租界江岸の市

ゐるものがあり、椅子とテーブルとを置き一々記帳して何程かの金を徴収してゐるらしく見られるが言語の充分に通じない自分には今詳細を知ることが不可能である。

耕作(水牛の利用)

耕作に水牛を使ふことは大體一般の牛の利用とほど等しく、大差を認めない。田をすくことはほど内地と等しく、すきもあまりちがつてゐない。たゞ異なるのは牛にくらゝ置かないで首木からつなをとり、しりがせに引かれてゐて、内地のどうびきを見ないことで、この方法だと可なり牛の勞力を消費すると考へるが、すかれてゐる土地は至つて浅く、一寸農夫にすきをかりて牛を使つてみた兵隊の話に軽いとのことであつた。面白いことは始め日本式に一直線に進んで折返しをやらうとすると如何にしても歸らない、兵隊はしきりにあせつて「コイツ俺のいふことをきかんぞ」としきりにたづなをうつてみるが牛は横にはしつてしまつた。さてよくよく見ると田は中心から渦巻形に外にとぐる／＼まわつて行くのである。はじ

めて方法がわかると、早速軍曹は「家のあきをニ一公に代つてやるか」などはしやいで一廻りやつてゐる。農夫は變な顔をして見てゐたが、何だか不安げにしてゐたので空瓶を一つやると「シ



水牛を耕作に使ふ



大治附近の山村

エ／＼」とよろこんですきかけてゐる田の中心にもつて行つて置いた、行手を急ぐ吾等は此短時間に軍曹も農夫に歸り、思ひがけない愉快な、時を得たことである。

註 ニ一公とは支那人の意である。兵隊の誰かゞ支那人を見ると備(第三人

稱)と呼ぶがニ一とは大きな差別的な意味を吾等は持つてゐる。だれがはじめたのか、支那人をニ一公とよぶのは、だが支那人からニ一とよびかけられると何だか輕蔑された氣がしてシーサン(先生)大人と呼ばれないと承知が出来ないのがお互の心もちである。ニ一とよば

進軍中に見た支那習俗

れるとたれもが「コイツナメトルぞ」と不愉快な表示をする。

茶

九江に行つた當時、露西亞文字、蒙古文字、漢字の三様式の文字の入つた磚茶をみて奇異の感にうたれたことであつた。磚茶は蒙古のみに使用されると考へてゐたのに、中支でも使用されるのかと考へたが、後になつて不圖も嘗て九江が磚茶の製造地であり、後漢口を中心として露西亞がこの磚茶の蒙古輸入をやり、蒙古の支配權を握つてゐようとはたえて知らなかつた。曾て清朝の末期東干の亂によつて蒙古に茶が密輸入されて困つた事實、蒙古と茶と不可分の關係にあることが諸岡醫學博士によつて「茶業を國管に添はしめ」と「英業界三三ノ一」に説かれてゐることを偶然にも戦地で一讀する機會を得た。事變前迄露西亞は阿片戦争以來漢口に磚茶工場を設け露支銀行を置き支那の資源を吸収して來たとのことである。中支に來て露、蒙、漢字入りの磚茶を見るのもむべなるかなと思つた。漢口に入つて大きな茶舗のあることに驚く、ドロコロスにつめた數種の茶は今迄内地の支那料理でのだのと全く異つたものが多い。内地の玉露に似たものもあれば煎茶、番茶に同じと思はれるもの或は粉茶と中々種類が多く、各種の名稱が木箱に彫形さ

れ金粉を施して置かれてゐることはやゝ内地の茶壺の陳列と趣がちがつてゐる。ことに何とよばれるものか忘れたが、茶の花が澤山混じられてゐるのは、よほど風味のあるものだと思へられた。

(内地でも出雲地方のボテ茶には茶の花をいれてあわだたせてはゐるが)

多くの茶莊にならべられてゐる茶銘には夫々内地同様中々ふるつた銘が多い。二三例を挙げると、蓮芯、龍井、紫湯、明前等である。

中支奥地の土民は茶をよほど愛好するらしく、何處に行つても色々の茶器を認める。九江燒で知られた、すかしのある螢燒も多くが茶器である。

最近になつて茶をよく見ることが出来る、だが吾等はどうな場合にも支那茶はのみたくない、何處迄も日本の茶が欲しい、茶葉がなければむしろ白湯ですましたい、でも此頃茶枕をしてゐるこれは愉快である。手枕、草枕、木枕、或は圖囊を、飯盒を、時には凡ての下着をまとめてくるんだ枕をして、あらゆる枕を今日迄経験して來た。だが茶枕を試してみると、頭ざわりと、ザクザクと云ふ音は限りなき重心をよび歸して來る。夜中ふと眼がさめて茶の香がする時、夢中で何處で香がするのか等考へてみる、慰問袋のあつたのを合せてつくつた茶枕は、實に豫想以上の慰安を與へてくれる。

纏足

支那女性の足はかねて承知であつたが丁度布を縫合せて作つた人形の足の様なかつころは實に不愉快の至りで、歩くのかよろけるのか判らない様子を見ると、何となく氣の毒になる。中支も奥地に來るとますます増加して來る。殊に田舎にゆくほど纏足が若い女性に迄及んでゐる。言はずもがなであるが、文化と纏足は反比例である。この足の連中はまづ藍色の鞋をはいてゐる。刺繡のしてあるのは稀にしか見ない。大都市では老婦人がまづ靴をはいてゐるのを見かける。だが斷髪は案外各方面とも實行されてゐる。まづ三十臺そこゝの女性はおそらく斷髪でパーマメントでもあるまいが、可なり上手にコテをかけてゐるものを見かける。都市には鞋靴店も多いが、田舎では全く手製で、鞋底のために古布を何枚も何枚もかさねて、かたく麻絲でとちてたくみに作りあげてゐるのを見る。たゞ都市では幾分ゴム靴が使用されてゐるが遠からず、ゴム靴全盛時代が彼等の間にも來るのであらう。

郷土演藝慰問團

漢口占領から早くも三ヶ月、十二月も終りに近づいて、慰問團が三四隊くり込んで來て、はじめて地方人の演藝といふものを久々で見聞することを得た。これ等は主として萬歳であつて、中には女性を主とするダンス等を加味したものもあつた。だが自分としてはあまりにも兵隊の心をくすぐる様なものよりも、ほんとに郷里に於ける生活にびつたりと合致する演藝が欲しかつた。



宮城縣演藝慰問團

それ／＼各團には特色があり、兵隊が如何に喜んだか知れないことは事實である。たが正月と云ふ頃には之等の諸團體も去つてお互が乗船以來何回、否何十回もやつたりみたりした歌謡と、浪花節をやつて楽しむ外なかつたのである。そして最後には愛國行進曲を大きな感激を以て合唱して解散するより外はなくなつて了つた。遂に私は一案を友隊の隊長に提出した。お互の郷土の歌と踊を舞臺にのばせて、競演の夕をやらうではないか、これには大賛成を得て、こゝに地方的な特色と、郷土意識にもえて、やゝフレッシュな感じのもとに郷土演藝の夕をもよほしたが、これもあまり長くやるにはお互に材料不足を來すことに

進軍中に見た支那習俗

なり、一二回でよすより外なかつた。

だが正月もすぎ十日頃になると、新潟、宮城、福島の新潟三縣聯合の慰問團が來るとのニュースが入つて來た。高知縣からも來ると云ふ。こない吾等の隊では全く羨望の限りで、實際俺たちの縣の人間なんて不人情なんだらうなどと、縣人をうらんでゐたが、いよく三縣の一團が乗込んで來た、郷土部隊を訪問、實演をやつてゐるが、他のものは入場禁止でどうすることも出來ない、やつと終りになつて一夕この演藝慰問の夕に會ふことが出來た。

まづ新潟縣の編成は縣内の藝者を主體とするもので美妓の一團であつた。出演種目は新發田小唄、スキ小唄の所謂小唄物であつて、これに手踊があつて見た目には美しかつた。だが私には地方色ゆたかな三階節が最もうれしい歌曲で、歌に出てくる主格の「お萬可愛やたすきで布さらす」のお萬が何か眼前に出て來た心地がした。これほど感銘したことは此歌を何度か聞いて會つてないことであつた。福島縣の編成は全員、男女ともに縣内の餘技をもつ人をもつて結成されてゐた。歌謡、奇術、漫談も又踊り手の娘さんも何れもそれを職とする人でなく素人の上手なのを選定した一隊であつて、出演種目は、相馬にへん返し、大漁節等一同が足と手をそろへてたしかに歌ひつ踊るには實際に眞剣味が多分にもられてゐる。前の美妓に比し顔も姿も劣つた人であつ

たが、眞情は一擧手一投足にあらはれてゐると考へられた。誰もが國の豐年を思ひ出し、大漁を思ひ出して大きな感激をもつてみたことである。私はかくてこそ農村から出た子弟のための眞實の慰問であり、お互が涙して踊り、涙して見得るものだと感じた。

宮城縣の一行は國防色の制服の女子オーケストラバンドの一行と二三の踊子であつた。さんさ時雨、わしが國さ、大島くづし、ハットセ等をオーケストラによつて合奏、和服の踊子が愉快に踊つてくれた。

だが要するに福島縣の農村の子女が野趣ゆたかに踊つてくれたことは、そこには何等の報償關係なく、お互の娛樂としてたのしみ得る農村の踊を思ふ心地がして、おくゆかしさがあり、他縣の練られた所謂くろうとの上手な踊や歌謡のあとには、やはり遊興のあとの一抹のさみしさがあるが如き感をいだかざるを得なかつた。

特にこゝ戦地に來て感ずることは和装のもつ偉大なチャイミングである。兵隊のたれもが和服そのものに大きな關心をもつて居る。ことに久々にみる帯の感じは全く内地でみてゐた感じと異つて、それで一の大きな日本女性を代表してゐるかの感をもつて、語つてゐたことである。慰問團中の多くが洋装であることは、旅行のための輕装として已むを得ないかも知れないが、然し一

着の和服を用意することは、さして困難ではなからう。日本着物を着て、日本の歌をうたふことは、むしろ慰問團の大きな使命ではなからうかと考へる。阿部秀子女史の提唱ではないが「日本人は日本語の歌曲」を、私はこれにプラスしたい。「日本の着物を」、この感は遠く戦地にあつて同胞を迎へる時、より深刻にそれを感じることである。事實具體的にそれを見るのは、半島出身女性が、こゝでは一人として和服ならざるなしであることも、すでに私の常望をみたすものである。

揚子江の魚と漁法

最近某誌の報ずる所によると華中水産股份有限公司は、昭和十三年十一月創業、すでに年産二千六百萬圓に達すとあり。上海南京に魚市場を設け、或は揚子江の稚魚の運搬に成功した事例が現地新聞紙にも報せられ、且各地に同公司の小旗を船首に東西する魚舟を見るなど、今事變とともに長江流域の一帯に着々として水産日本の進出を物語つてゐることは、吾等の心づよしとする所、勿論支那に於ても、越の范蠡が養魚に成功、すでに「養魚經」の著あり、陶朱の富の言は、



養魚に端を發すと聞くから、古來此方面の努力も相當なものと思ふ。木村博士はかつて鄱陽湖の漁戸二萬三千、漁獲高三十六萬八千ピクル、或は鎮江のエビ類五千ピクル、蘇州附近の川蟹が三十萬斤に、事變前は達したと報せられてゐる（大陸新報）。然し其漁法たるや稚拙の極といふべく、これに反しおそらく長江の濁流がはぐくんでゐる魚族の數量に至つては、無盡藏といつても過言ではあるまい。尙之が加工或は輸送についても講究すべき分野は無限であり、現在奥地方面に於ける鯉、其他の干物を觸目することは多いが、一部上海方面の罐詰工業を除く以外は、日乾鹽方法にのみより、特に加工といふべきものを認めない。殊にサメ等の大魚は、最近邦人の進出により一部鯰魚等と併せ、「カマボコ」としての製産を主要都市に於て見るに至つたことは、大陸への多數同胞の進展と併せ慶賀すべき一事であらう。輸送上に關しては未だ木船により、一部移動のみが實施されてゐるに過ぎず、今後は機關船によつて大量の移送される日も近しと思ふ。ともあれ海國日本のすぐれた漁法を移植するとともに、魚族以外の長江流域生物の

育成、或は加工が實現されるの日も近しと確信する。

支那淡水魚は其肉質と細菌の關係上、冷凍不能ときくも、筆者には理論的に之が説明は不能事である。

而して長江の大に關しては、尙依るべき文獻尠く、流水三千二百餘哩流域十餘省、其水源に關してすら未だ學究的な踏査が缺け、且其集水面積雨量にも亦明確な數字を求めることすら至難とされてゐる。我水路部發行の揚子江水路誌は吾等に與へる文獻の至寶であり、遡江船舶の依存する所であるが、一般自然科學に關する通俗的な文獻は求めて難く、この一文は筆者が過去四年間に足跡を印した江蘇、安徽、江南、湖北の各地で觸目した見聞録にすぎない、支流としては漢水、淮河。湖としては太湖の一部と、鄱陽、洞庭の兩湖、魚類に關しては手にしたもの或は觸目したものを主にあげる。

勿論之が學名等に關しては筆者に知識なく、俗名或は支那人より教へれた土語にすぎないもの多く、曾て長江流域の生物に關する權威者木村重博士は其魚類數二百七十數種とされてゐる。(大毎、揚子江流域の生物。大陸新報所載、世界の謎支那の川魚物語、共に木村博士、參照)

試みに、兵庫縣地方の自己の郷里に産する魚類と同種のものをおけてみるなれば、コヒ、フナ

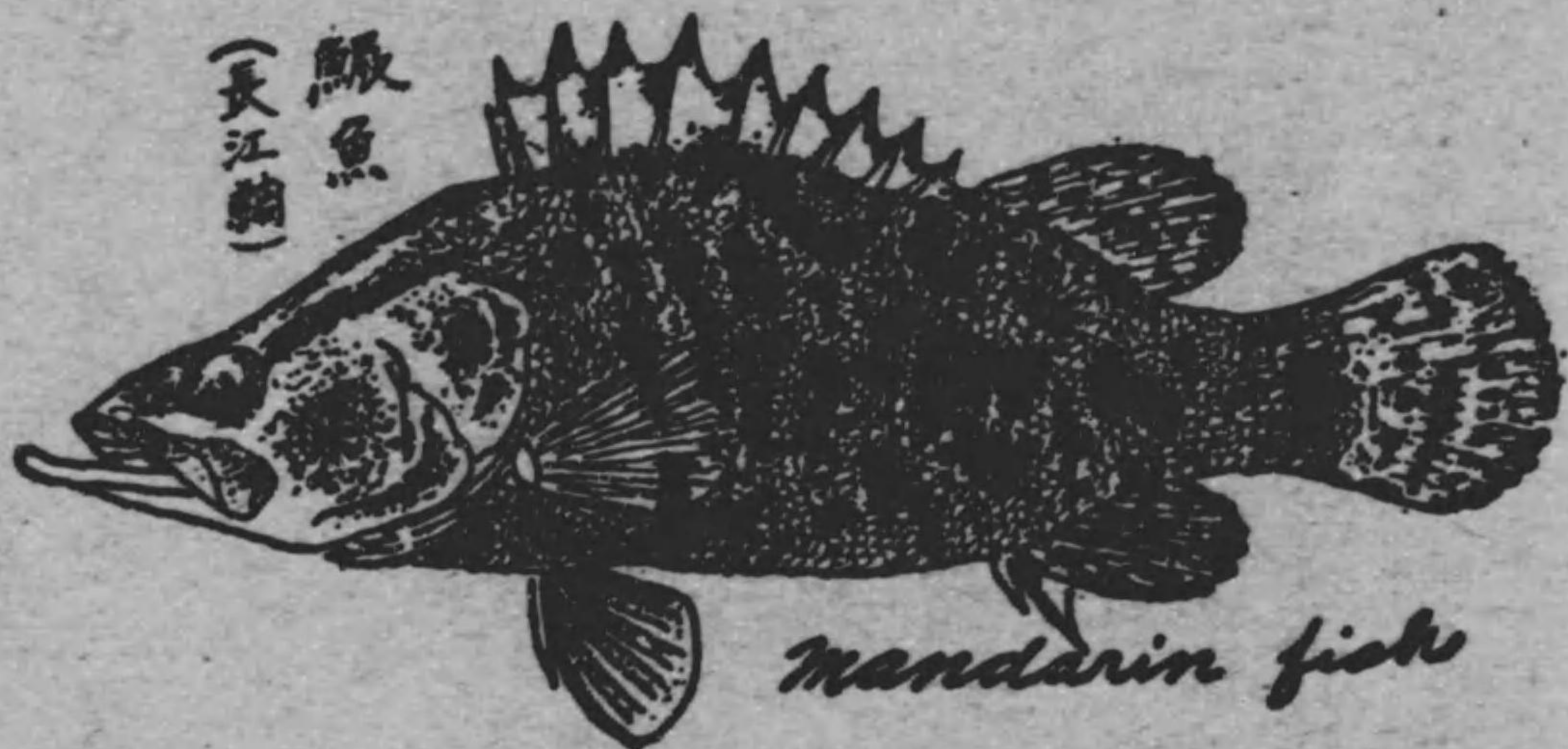
ナマズ、ウナギ、ギギ、ドンコ、ドチヨウの類は、形こそ内地のものより大形なれ何等の相違を認めない。且其數に於て數十倍に及ぶであらう、尙江中に棲む海魚として、フグ、シラウヲ、サメも同種であると考へられる。

次に長江に産する魚族中最も吾等にしたしみのあるのは蘇東坡の詩で知られてゐる鱖魚、漢口地區の邦人はこれを「長江鯛」とよんでゐる、「急就篇」を習つた者なれば誰もが記憶してゐる一文。

魚字傍兒一個厥字念甚麼、念桂也行、念厥也行、可是賣魚的都呷喝桂魚、按這個說「桃花流水鱖魚肥」的那句詩、自然是念桂罷、可不是、若把那個字念厥、未免成了、笑話了。

其形が内地のメバルに似て味も一寸等しく、この魚に限り美味だと感ずる。

次には美味で有名な魚、鱒魚は晩の春頃、外洋より長江に



鱖魚 (長江鯛)

揚子江の魚と漁法

遡るといふ、外人はこれを「マンダリン、フィッシュ」と呼んでゐる。

曾て大帝康熙、この魚を進貢せしめ、臣民の疾苦を忘れたに對し、山東按察司參議張能麟が、奏疏中に帝の反省を促した一文があるといふ（支那草木蟲魚記。澤村幸夫著）

この魚は「ひらこのしろ」と呼び九州不知火海のものと同種らしいと、澤村氏は語られてゐる。以上の類は上魚に屬するものであらう。何れの魚も内地瀬戸内海地域で「魚島」とよばれてゐる季節が、やはり魚獲期として長江筋でも適用出來得よう。この頃になると何れの町はづれにも魚、野菜を賣る市場がにぎはつて來る。今春某地の一都市で市場にのぼつた魚類について種類を舉げてみよう。

刀魚。（四月に多し）一斤八十錢、圖に示すごとく内地の太刀魚に似て、腹に針のやうな長いヒレがあり、不氣味な燐光色をした魚であるが、其名が形から來てゐることは一目にして明確であらう。（斤、錢共に中國）

曾て武漢攻略戰の當初、武穴鎮の上下流の江堤を敵が決潰して退却したあと、其の水の落口で多くの魚類をとつたが、住民が此魚を食すべからずといつたことを思ひ出すも、當時秋期で此魚を食すべからずともいふ季節だつたのか、今尙不可解な思出である。此魚に長い觸角様のひれがある。（第二圖）

連魚。或は連子魚と一般に書き魚扁を省略するのが普通らしい。目と口が接近してゐる。

鯖魚。支那のお

正月の魚であり、四五月頃は六七十錢であるが正月には高價である。

黃鱔魚。實に蛇

其のまゝの感じでヒレを有しない、

腹部の黄色は何となく無氣味さを添へ、隊員達も此魚はこれ迄食した者



揚子江の魚と漁法



魚 鱒
小さいは鱒



魚 鱒
普通五・六寸より一尺
扁平な魚である

をみないが、支那人は此魚を食ふと強健になると信じてゐる。やたら黄を愛する支那人の趣味にかなふかとも

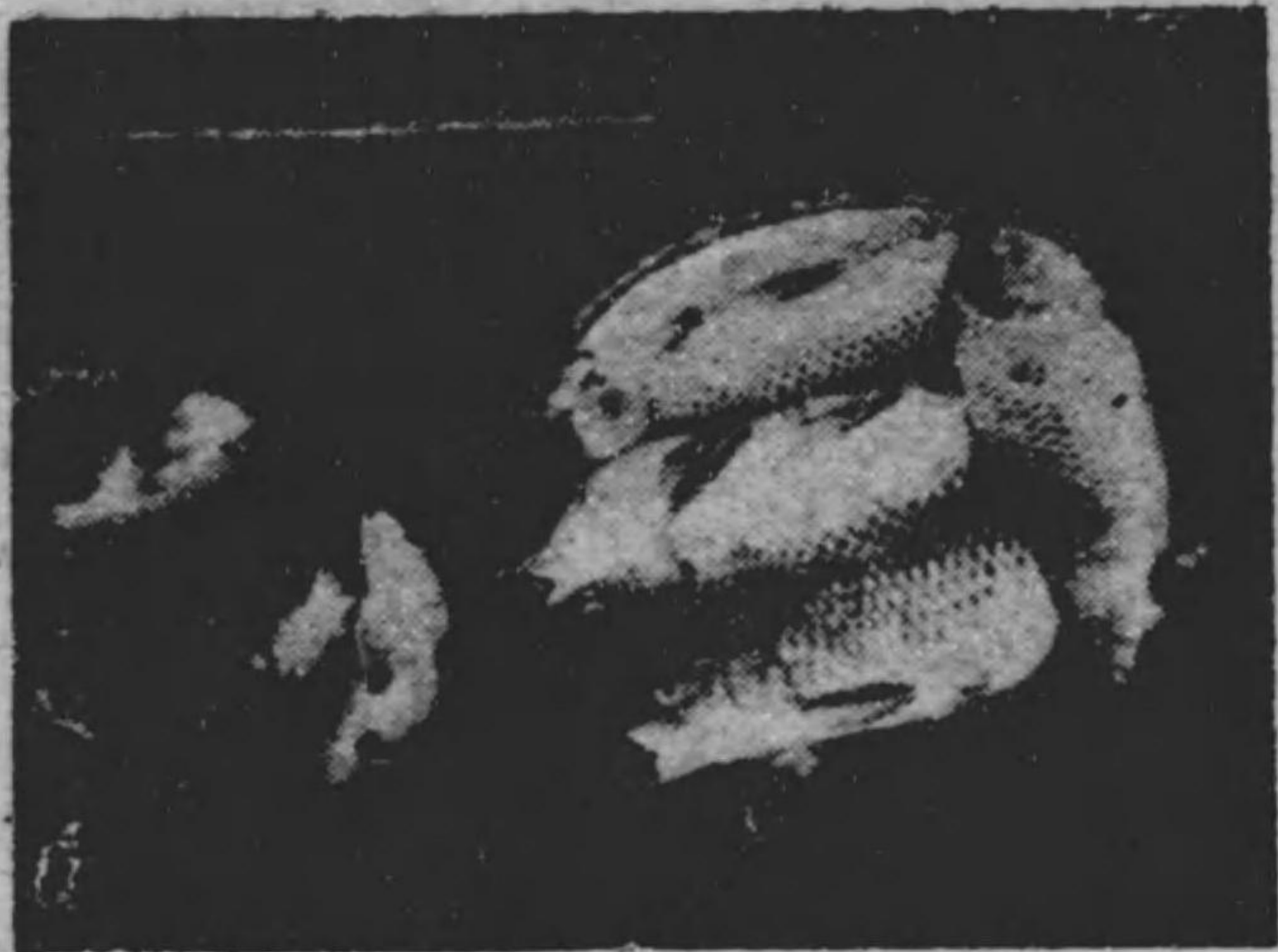
考へてゐるが、血の多いことは他に比すべくもない、市價は一圓近くを呼ぶ。

扁魚。其名の如く扁平魚である。長江流域に最も多く觸目する。

白魚、及びさより。あの弱々しい魚が長江の泥水にゐるのも不思議の一つであらう、白魚は淮河流域で多く捕獲されてゐる。

鰻。支那人はあまり好まないとされてゐるが有名な「隋園食單」には「湯鰻」「炸鰻」其他の料理法があげられてゐる。但しこの鰻は鯉魚に該當するやも知れず、魚名は文字上日本と異り解釋至難のことがある。

河豚。太湖の附近では此料理が有名であるが事變前迄は漢口にも特に其料理で知られた家があり、曾て漢口にゐた際それをたづねたが事變以來營業せずとのことであつた。



魚 鯉
この寫眞の鯉は約三尺位
左端のものは青魚

鯉魚。多いのと大きいのに驚く。

其他特に多くみかける魚に近年内地で急速な繁殖をして養魚場のギヤングと呼ばれてゐる通俗に「朝鮮ドヂョウ」或は「臺灣ドヂョウ」の呼稱のある、あの斑点のあるぶざまな魚を澤山みかける。特に大きな魚としてはサメ、チヨウザメ、等あり、長江に遺存する前世紀の唯一のもの「ハンナガチヨウザメ」(四二頁)は長さ三米以上にも及ぶといふ珍魚、筆者は幸に本春別掲寫眞の約六尺のものを撮影する機會を得たが、四年間に一度見たにすぎない。背は灰白色に腹部は白く鼻先が圖の如く長くのび實にグロテスクな形態をしてゐるが美味のよし、寫眞の女は十圓(支那金)なれは賣るといつた。日本金二三圓なら買ひ得たらう。ハシザキと呼ばれる山椒魚と共に長江の名物である。山椒魚は本項に屬さないが、支那にも相當の



るらしく廣東料理
 に有名と聞く。曾
 て漢口の市場でも
 イルカなどとも
 に見かけたから一
 般に食用されるも
 のらしい。魚族で
 はないがイルカは

漢水にも棲息してゐる洞庭湖のイルカは湖神として有名で興味ある傳説の主である。筆者の一番多くイルカを見たのは蕪湖下流地區で約三十分に七尾を認めたことが最も多數である。

尙珍しい生物としては鰐魚がある。主な産地は蘇州附近の太湖と蕪湖附近の清水河、筆者の觸目したのは古く潯陽の江として知られてゐる九江附近で、約二尺のものを、尙漢水畔某所の小學校に剝製の小形の一尾が置かれてあつたが多分附近で捕獲したものらしい。南京の某所藏の骨格のみの物は約三尺であつた、大きくとも五六尺にすぎないと木村博士は語られてゐる。



兵隊さん達のいけどつた大イルカ

鯉魚、鯰の大きなのは一驚に價する。四年前、田家鎮攻撃に際して友軍の敵機雷處理のために江上に浮びあがつた鯉、鯰魚は何れも六七尺、さすがの勇士達もこれは化物だとして再度江中に投じたことがある。青魚或は桂魚にも三四尺のものが至る所に棲んでゐるのに驚く。

珍魚に屬するものに草を食ふ草魚がある、又康熙版の「花鏡」には鬪魚が擧げられてゐる。日本の京都九條附近或は丹波柏原附近にも鬪魚の一種があることからみて多分支那にゐるものと似たものと思ふが、觸目した事がないために形は不明である。前記書には圖示されてゐるが、圖書によると、

鬪魚一名文魚。出自閩中三山溪内、其大如指長二三寸許花身紅尾又名丁斑魚云々。

揚子江にゐるや否や知らないが既に昔時、費無學有鬪魚賦叙とあり、官中では鬪魚遊びを行つたことが記されてゐる。

蟹は支那人の最も愛好するものであり、酒につけた料理は有名で曾て中國人の交友ある一紳士

から、今夜は蟹料理を供するからと、去年秋日まねかれたことがある。普通日本の河蟹より小さいもので、但馬香住港附近の松葉蟹を味つた身には珍味とも感じないが、とにかく御馳走であり高價であるらしい。然し有名な鎮江の蟹には尺餘のもあり、内地のものに比し實に油の多いのは驚くとともに、名物だけに美味である、蝦も内地の淡水にゐる大形小形のものが多い、短時間に何斗とつたことがあり、支那料理中のこれは確かに珍味であると信ずる、だがこれを生のまま食するだけの支那通連に伍するだけの勇氣はない。

以上魚類の概要を述べたが、揚子江上流地区にはすこしもふれてないから、單に下流地域の通俗魚を擧げたに過ぎない。以下これ等の魚類の漁獲方法に關して記すに當り、特に筆者の感ずることは農、漁の兩者につき日本との相似點を述べてみたい。

長江流域殊に江南地区に足を印したものの、誰しもがまづ野外労働につき感ずることは農夫と漁夫の多いことである。

まづ農業に就いては、其所要器具と農耕法のあまりにも日本と相似點の多いことである。殊に水稻の挿苗から收穫までの行程、施肥の差と揚水關係を除くと、故郷の田園生活と等しいといつても過言ではあるまい。其他器具も亦同様である。

これに反して漁業については、よほどの差を認める。凡てが幼稚なことも否めないが、根柢に差があるのではないか。方法の多くが古態であり器具の凡ても原始的なものが多い。日支兩國の差は勿論魚類、地形差によるだらうが、農業の兩者交流に反して漁業には別個の發達を考へてみたい。古事記に見える吉野川の河尻に筥を作つてゐた阿陀の鵜養の祖の話、龜の甲に乗り釣してゐた神々其他釣の神話が多く、日本古來の漁法についても考へて見たい。

同じ鵜飼にしても日本の様式は、鵜と鵜匠は一本の繩によつて結ばれる操作に對して、支那の鵜飼は原則に於て、以下述べる如く繩で結合されず、聲と棹によつて操作される。或は釣針にしても、一般の釣は所謂モドリをもたない、おそらく日本には現在此種の針はすくないかとも思ふ。見聞のせまい自分には、播磨で使用される鰻つり針に竹棹のさきに直結したモドリのない一例を知つてゐるが、一般釣魚方法と異なる例である。(兵庫縣民俗資料の小稿に概要を記したことがある)

この針に關聯して思ひ出すのは太公望の話で、今も濟南城壁外に太公望釣魚のあとと呼ばれてゐる小祠が遺存するが、彼は直針で魚を釣つてゐたといふ笑話を遺すのも、おそらく現在も支那の魚は直針でも釣り得る氣樂さをもつてゐる。

最近になつては慰問袋によく釣針なども入つて来るし、此道のすきな連中は道具を内地から送らせて、餘暇いとうれしげに太公望をきめてはゐるが、事變當初は釣針なども入手出来ぬまゝに、鐵線をまげ或は縫針をまげて、其まゝよく釣をして可なりな成果を得てゐた。あながちモドリのない支那の釣針も笑つたものではないと思ふ、要は内地魚はいと鋭敏なのに對して支那魚ののどかさはこれも大陸的ともいふべきか。

支那に於ける漁業關係文獻は其數に於て甚だ多くないと信ずる。勿論海洋の漁法については若干の日本文獻の譯本的なもののみかけるが、淡水漁法に關する文獻は觸目する機會にはめぐまれず、且支那人の隙接地域の漁法などについて語り得る者はまづ一般人にはこれを求め得ない。貧しい體験から以下漁法の概要を記するなれば、之を分つて左の五とする。

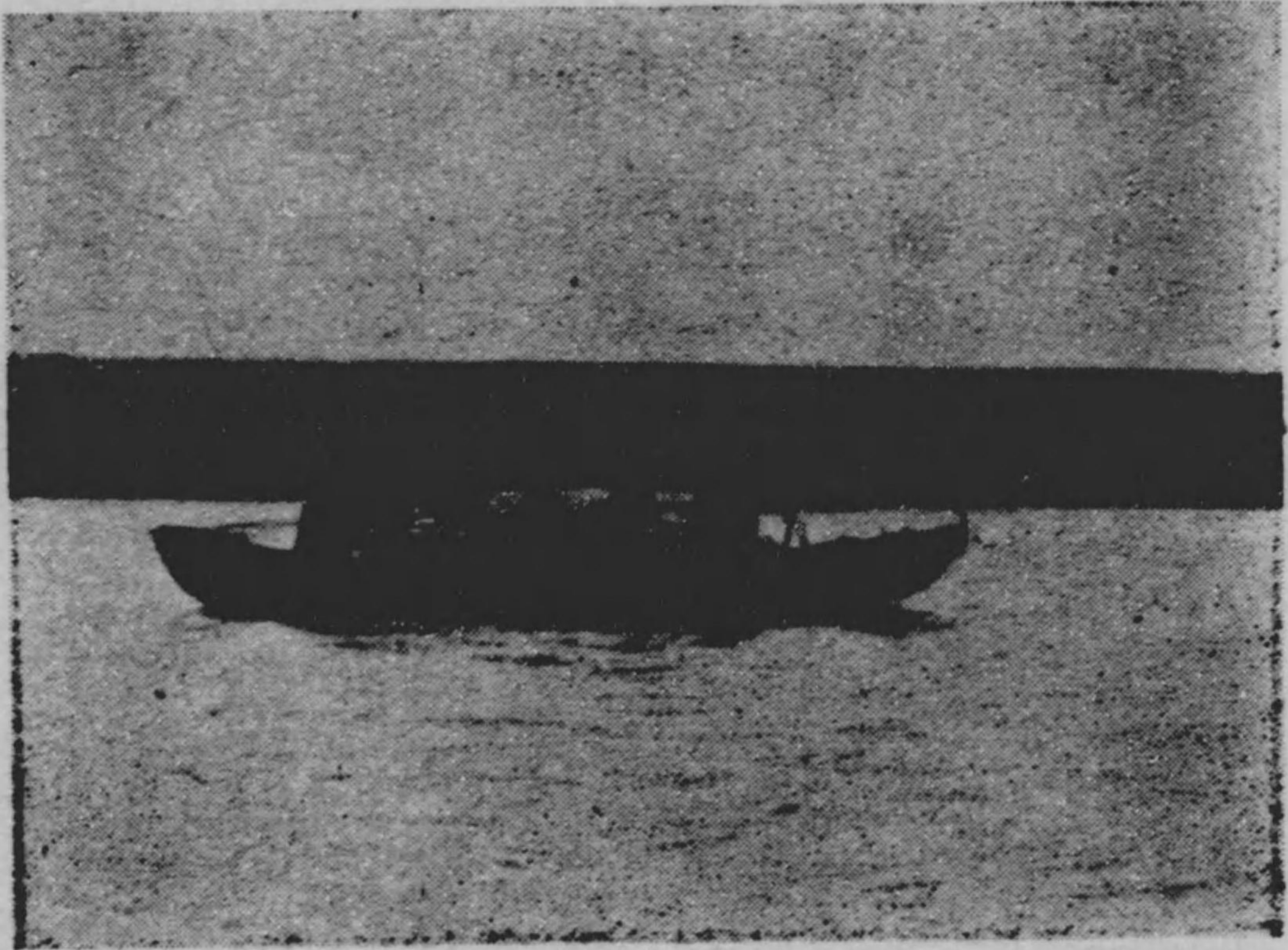
- 一、動物を使用するもの
- 二、網によるもの
- 三、釣
- 四、うけ

鵜の使用

五、魚叉

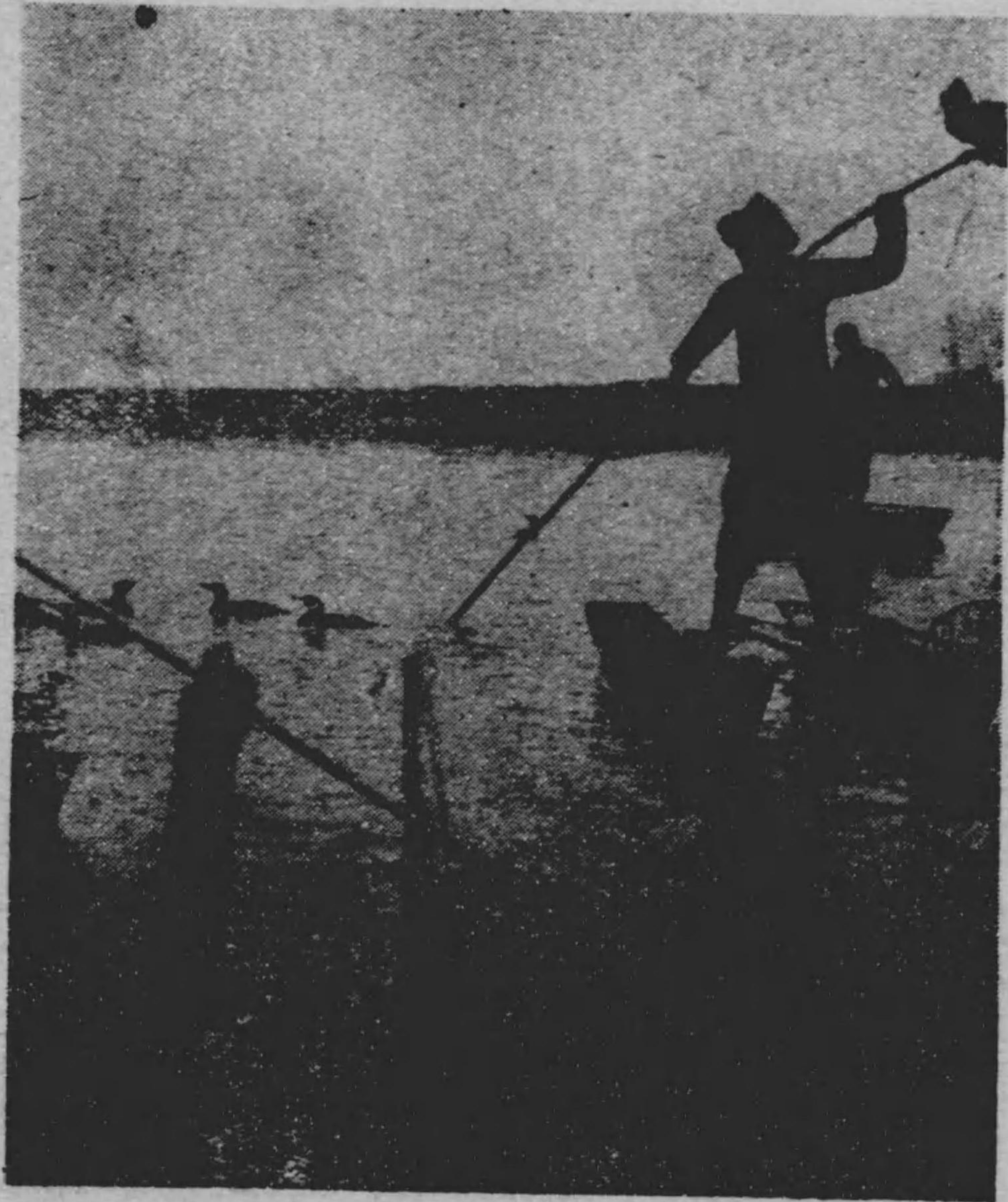
(一) 鵜の使用に關しては日本でもすでに古事記にそのことを載せられてゐたから、古くから其方法があつたであらう。然し支那の鵜飼は鳥を網で結ばず、自由に驅使する巧みさははるかに日本に優れた方法であり、鵜のとる魚も單に鵜がふくむのみならず、大は二尺もの鯉すら其背の中央をついばんでくる、其際他の一尾の鵜が援助にゆく、鵜の活動などは人間の相互扶助を實踐するの感あり、眼前にこれを見る時一つの魔法の如く思はざるを得ない。

この鵜飼も地域によつて異なる。即ち東部地方海岸よりの各省、筆者の知る範圍では北は



鵜飼河淮

揚子江の魚と漁法



湖北地方鵜飼(双舟式)

五四
白河より中央安徽省淮河から、南太湖等は寫眞に示す單舟式と假に呼ぶ方法で鵜を飼ふ漁民が一定の漁村を形成し、そこを根據として出漁するらしく淮河畔では相當の鵜飼村をみかけたこともある。これに反して奥地湖北省で見られるは雙舟式とよぶ上圖の様式で、點々と水溜りを移動してゐる、鵜匠で他の地に移

る場合は、鳥を小舟の周圍にとまらせて兩舟の間に肩を入れて擔つてゆく。何のことはない水上では舟であるものが、陸上では漁具を舟中に入れ、鳥を舟べりに行儀よくとまらせてゆく擔ひ箱である。此のたくみな方法は日本には比すべきものを見ない。

兩者の差は一は基地より朝に出でて夕に歸り、二は點々と漁場を追つてゆく遊牧的な方法である。だから東部地方の大河或は湖では、舟を陸上に運ぶ必要がないのに反して、奥地では點在する水溜りを求めるために、かゝる方法を産むに至つたと自分は考へてゐる。

自分の觸目した範圍では淮河大運河等には鵜漁者の村落がある。

(二) 網によるものは地域によつて差を認めるが、尤も一般的な例示として安慶府漁具調査表を擧げるなれば、網の種類八種、其他の漁法六種、これは主として安慶府附近の揚子江上の漁用網についての記述である。概要を述べると、(五一頁参照)

(1) 撒網又名旋網、材料は麻絲長さ一丈六尺(以下支那尺)眼六分、周四丈六尺、日本と同様シズのあること變りなく、投網に比すべきものであるが、其投法に於て内地の如く左腕にかけず、両手にもち、たくみになげ得ることは、支那何處も同じである。尙各地方により網の大小あり。



打網

支那に於ける網は一切防腐用として澁を使用せず、梔樹皮によつて煮染めこれに豚の血を以て染める、この樹種については今明確にすることを得ないが、南洋方面に多く産する紅樹(學名 Monglope)なるべしの示教を某氏より得たが、近來の良書とされる陳氏の中國樹木分類學中にも觸目し得ず。

この樹種に關し華中水産公司白石氏の好意により、入貨經路を知るを得たが、廣東より上海に入り揚子江沿岸地區も上海よ

支那府漁具調査表所載漁具名

- 1. 撒網
- 2. 滾鉤
- 3. 罾
- 4. 船罾
- 5. 脚網
- 6. 罾網
- 7. 滾網
- 8. 銀魚網
- 9. 蟹網
- 10. 蟹籠
- 11. 卡線
- 12. 斷(迷魂陣)
- 13. 魚叉
- 14. 蝦籠

り購入するよし。樹皮は内地の椎木皮に似てゐる、或は日本に輸入されるブラツチヨエキスの原木と同種ならんか、たゞマンダローブを呼ぶ支那名なることはこれを明にせり。

(2) ひき網ともいふべき方法、繩長三十丈、三寸毎に鉤をつけ其數千、鉤の長さ五寸、大小あり、大は千個十二斤乃至三十斤この間に浮とシズをつけて繩の兩端を船に結び、江上を引くと繩は江底面積度の位置にあつて移動することにより、鉤に大魚のかゝる装置であるが、岩洞の間では六十丈二千鈎のものを用ひるとされてゐる。(これと似た漁法は内海でブンチンコギと呼ばれてゐたと思ふが、確かこれは近年禁止された漁法だと考へてゐる)

(3) 四ツ手網では小さな物には、片手で上手し得るものから、岸に小屋がけにしてロクロを使用する方三、四丈のもの或は(4)に示す船につけたもの、實に様々な種類を見るが、日本と大差を認めない、然し規模の大はやはり揚子江に認める。

以上の網のうち「打瀬」「手操」の兩者に類するものは内地と大差を認めないが打瀬にあつては内地の帆を利用するのに對して竹製の板状のものを流す方式がやゝ異つてゐる。



淮河の巻網漁舟



うけの一種・捕魚具

からこのクリークに移動する場合は道具一切を肩にして運行する。同種の桶は菱、及蓮の實を採るにも用ひてゐる。

其他網によるものには内地とほど似たものがあり、また類似のものに網を二本の棹によつて開

閉し得る如くした深水で使用するのは内地と異つてゐる。

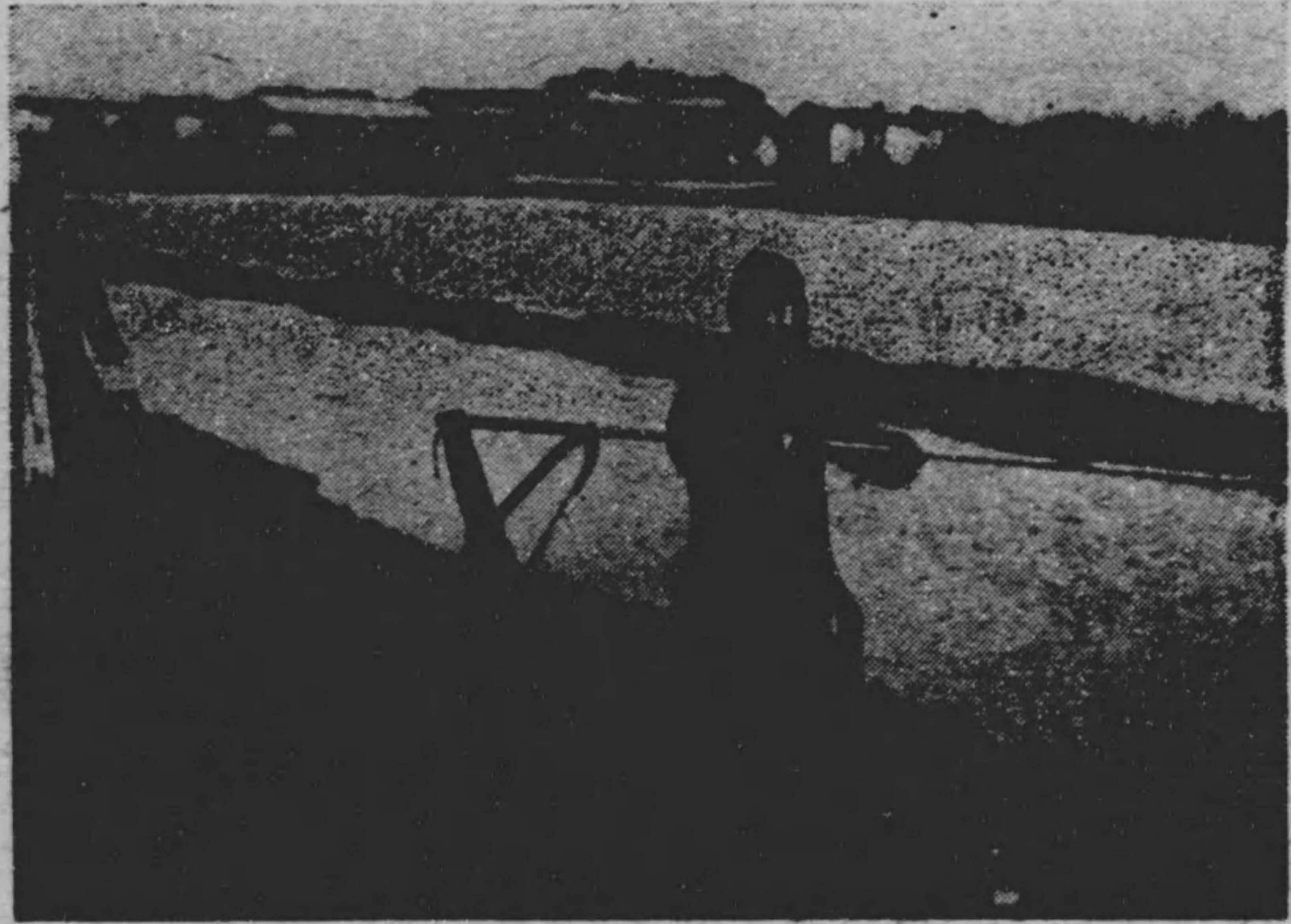
(三) 釣、一般の方法は内地と大差なし、たゞ内地のつけ釣ともいふべきか、數丈の繩に釣をつけ夜間江湖中に投入する方は内地に比して凡てが大がかりである。浮木をつけて至る所で行はれる、最も原始的な方法はこんなブリミチープな手段で尺餘の鯉魚を捕獲し得ることは不思議とも感ずる、この方法は紐を魚がバクツとやると竹がはじけてとれなくなる。



たらひ船に乗つて網を張る

日本で釣のためにうきみやつしてゐる人々がもし大陸に來るなれば、其方法が如何に簡單で何の苦心もなく、たゞ鐵線をまげたものに、ミミズ、飯粒、サツマイモ、イナゴ、オタマジヤクシ、蠅あらゆる手近の材料で尺餘の鯉や鰻を釣り得ることはおそらく夢の世界であり釣竿の如きは竹ぎれでも楊柳の枝でも可ならざるはなしである。

(四) うけ、或は筆者の郷里播磨では「モンドリ」と呼ぶ竹製具の籠については、ほど前記の



子供達もこの網で魚をとる(湖北所見)

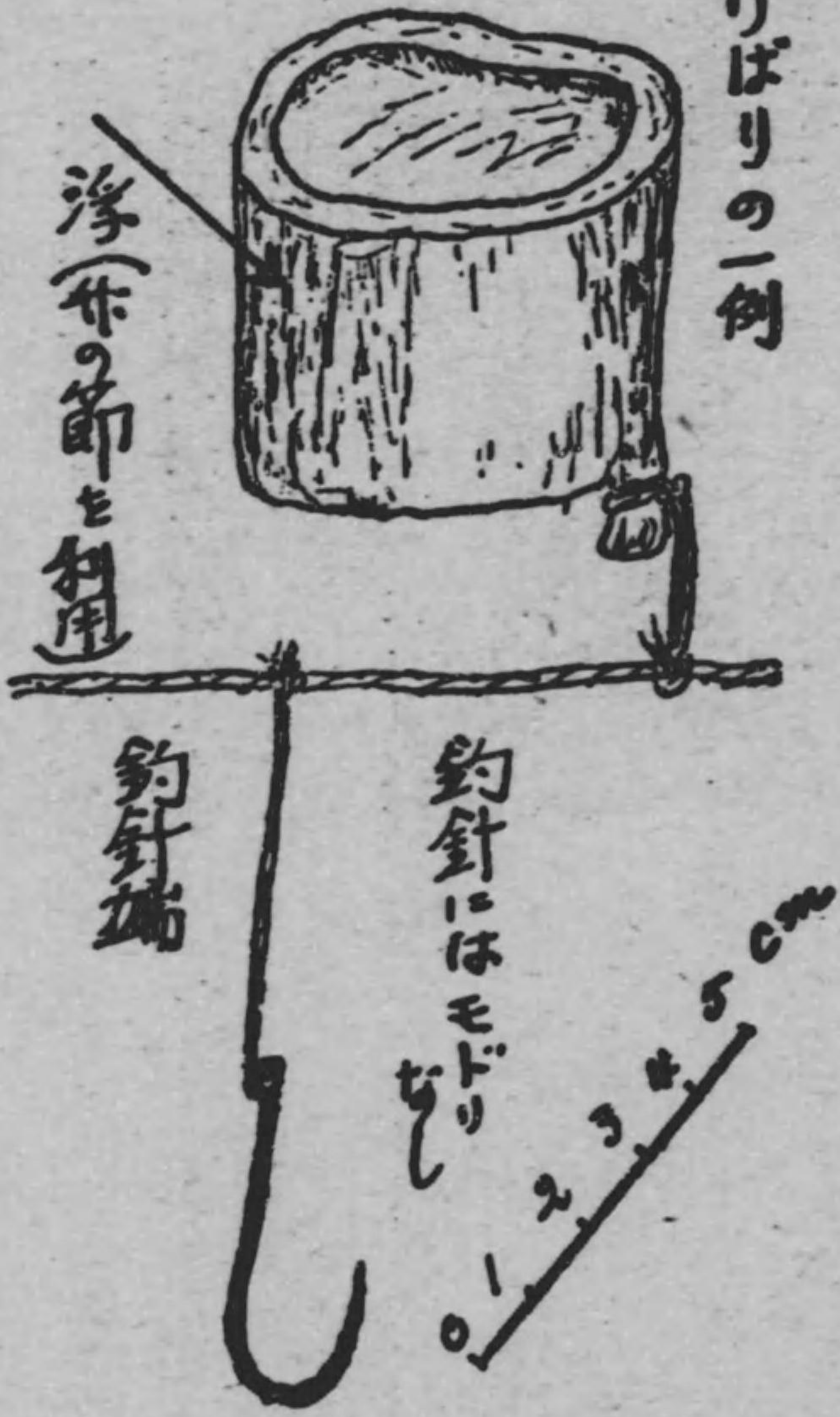
蟹、蝦の漁獲について説明した如く各地方によつて其形状を異にし、自分の觸目した種類だけでも四、五種に及んでゐる。

其他雑多な簡易な漁法として淺沼に小舟を浮べ上すばみの竹籠の底なし圓筒で魚をふせて小網ですくひとる漁法、是が名稱を知らないが、本漁法は水が清澄にして底迄見えることと深さ二三尺程度に限られることで自分の觸目したのは南京の玄武湖竝に湖北省漢陽の斷琴の交といふ故事で有名な古琴臺下にある月湖、この湖は支那に例を見ない澄みきつた湖水で中秋名月の夜には龍宮が見えるといはれる程で古琴臺上から湖底を見ると實に多數の魚族が遊泳してゐるから従つて竹籠でふせ

てとることに最も適の地であらう。

尙田家鎮要塞附近から東部に入つた地帯では釣にエサをつけないで網に多くの釣を結びつけて

つけばりの一例



安徽所見

魚の通る地點の水中につるしておくことによつて魚がこれにかかる事實或は小舟に乗り五六尺の棹の兩端に釣針を多く結びつけて交互に水をかいてゆくとこれに魚がかかることなどは内地では夢に等し

又漁法とは言ひ得ないかも知れないが、減水期に水の一二寸となつた沼を足で踏んでゆくとよく魚類をふむ、それを獲つたり、或は四ツばいになつて沼地を横行してつかんだ魚を堤上に投げ

揚子江の魚と漁法

てゆくなど滑稽味多々とも言ひ得よう。

これを要するに支那の漁法の簡易なる理由として

- (一) 棲息地帯としての沼湖の多いこと。
- (二) 魚族の豊富なること。
- (三) 濁水を主とすること。
- (四) 従つて魚類は一般に視力によく盲目に近い事實。
- (五) 沼湖河底に礫石なし。
- (六) 中支は揚子江の増減水により水位の變化ありて水流は一の魚類配給作用を有す。
- (七) 石垣なき河江沼湖にある魚類は泥水以外に身をかくすの方策なし。
- (八) 凡て生物は遅鈍なり。
- (九) 急流のなきこと。

等を擧げ得る。

だが結局は魚の多いことと、生活力の旺盛にして一度揚子江の漲水を來すや、何千萬方里の沼湖に魚類を散布して、とれども釣れどもつきず、上流より下流に至る間、河水をはゞむ横堤はな

く、海魚も自由に遡行して内地の河川にみる魚梯を必要とする等、夢想もし得ない魚類の樂園を根幹とすることに歸し得よう。

尙魚類の料理法についても併せて記述したいと考へるも、何分魚名或は料理法に至つては日本の一般印刷には不適な文字多く、上梓は結局不可能と思ふまゝ、清朝の有名な詩人隨園の名著「隨園食單」などを参照されんことを希望する。

附記



魚鱗

魚鱗—明朝から現代に至るまで「魚鱗」といふものがある。是は昔、明朝の朝廷の料理人が城外に買物にゆく場合、鐵製の門通鑑札であつて片方は魚の形に凹み、片方はその凹みにあるように凸形に彫られたものである、そして魚鱗には番號がついてゐて一つ宛皆魚の形が異つてゐた。

料理人は城門を出る時番兵に片方を預け、歸途には残る片方を提出して兩方ピッタリ合へば入門をゆるされた云々(大陸新報 木村重博士文抄)

一、執筆後 澤村幸夫氏著支那草木蟲魚記、東亞研究會發行を著者より投惠、一讀したが鵜飼に關する興味ある記事等あり御参照を乞ふ。

一、歳末草野心平氏の好意により左記書を一讀眼福多々

Common Foodfish of Shanghai by Bernard E. Read Published by Shanghai.
1939)

右により鰕魚が即 (Mandarin bion) である事を明確にし得、文中右に關する條項を訂正の要あるも時日なく了承せられんことを乞ふ。(十二月二十三日太平洋の大捷を聞き喜びつゝ)

中支奥地の鵜飼

二月のある日、ある要務のために〇〇部隊にゆくと隊付の大畑軍醫中尉が「〇〇部隊の〇〇隊で保護してゐる鵜使ひの一團が今日でこゝを切りあげて移動するが、大變興味ある鵜飼であるから見ておいては如何」との話であつた。丁度此日は自分の隊も待機で手すきであつたので友隊の〇〇部隊長にも通知して早速出かけることにした。この鵜使ひ(支那語では何といふか知らない)は〇〇隊長がある大澤中尉の保護を徳として大變散慕してゐる一行である。

この一行の他の鵜飼と異なる點は、左の各項である。鵜飼の支那に存在することは諸文献でも、

また陸軍省恤兵部繪葉書にも鵜飼の圖があり、讀者は御承知のことと思ふ。

一、移動性をもつこと私の見た一行の護證を見ると共破縣の者であり、轉々としてクリークをまはつて行く、そこで魚をとり販賣してゆく。

一、鵜船の異なること 二艘の小舟からなるもので、荷なつて何處にでも運べる輕舟で



著者

あつて、鵜を使ふさをで同時にこれを操る。

未だ支那の他の鵜飼を見ないが知友の言葉によると北支のものとも杭州附近のものとも異ることである。最も自分に興味を感じたことは遊牧的な性質をもつてゐることで、丁度日本のさ



鵜飼の出發

んかの一團がその昔移動した如きものゝ感じがあつた。だが此際聞きたかつたことは行く先での漁業權は如何といふべきであるが言語不通で不詳に終つた。

一、一團の編成

小船、八。人員、約十名。鵜、二十五羽。魚を入れる籠一架。せばり網、三〇（長さ十五米、深さ一米位二張を使用した）たもあみ各船一、竹さを、各船一。小船（別掲寫眞参照）長さ二米足らず、内にまじきり二個所、幅員（胴張の所）四十センチ位、二本の丸太で連絡する。荷なつて行く場合には鵜をのせて行く具となり其他雜品も入れる。

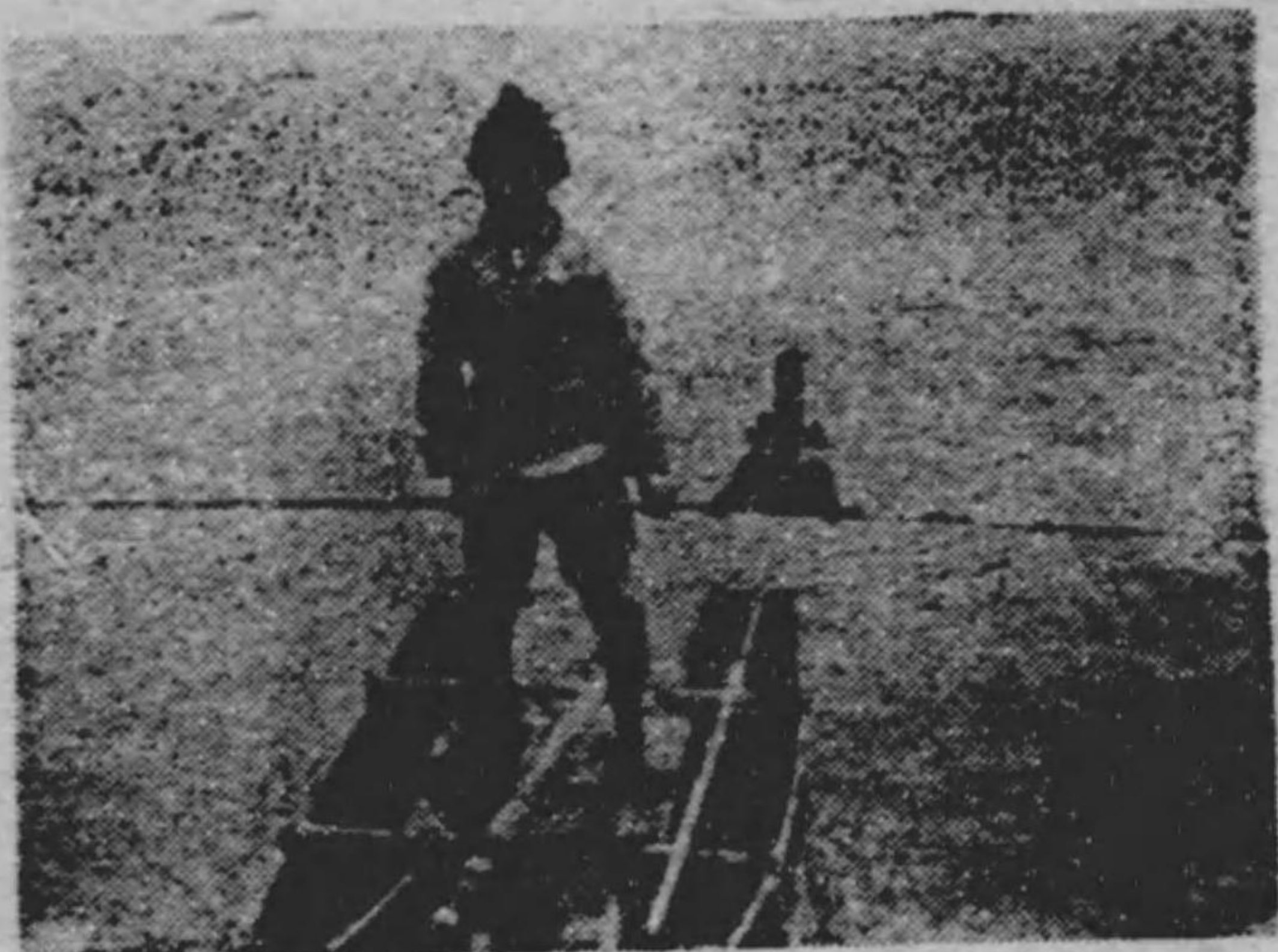
一、鵜のくゝりかた

鵜の首は藁のしべと思へるもので簡単にくゝつてある。そして右足に麻とシユロとをませた細い一尺二寸程のひもがつけてある。鵜を手もとに引きよせようと思ふ時は、さをでこのひもをひつかけて、さをを手もとにたぐる。だから日本の鵜飼のやうに綱によつて操作するのではなくよび聲によつて操作してゆくのである。この點は最も内地のものとの大差のある點であらうと思ふ。

一、作業の場所

私の見たのは漢口郊外の、幅五〇米長さ二〇〇米位のクリークであつた。クリークと云ふよりも、獨立した池で畑の間に掘下げられて地表から水面迄二米足らずのもので、水深は不明であるが、一―二米程度らしく、水は長江に近いが青い、底迄は見えなかつた。始め鵜飼と聞いた時に長江又は漢水での作業と思つてゐたが、船を見るに當つて流れのある地點は

困難であることを充分に知ることを得た。尙濁水中では鵜の行動が不可能であるから、自然清水の場所を選定することになるであらう。だが支那で青い色の水といつても内地の水とは比較



中支奥地の鵜飼



この鵝遣ひ煙草をやると大喜びで鵝をあやつつて見せる

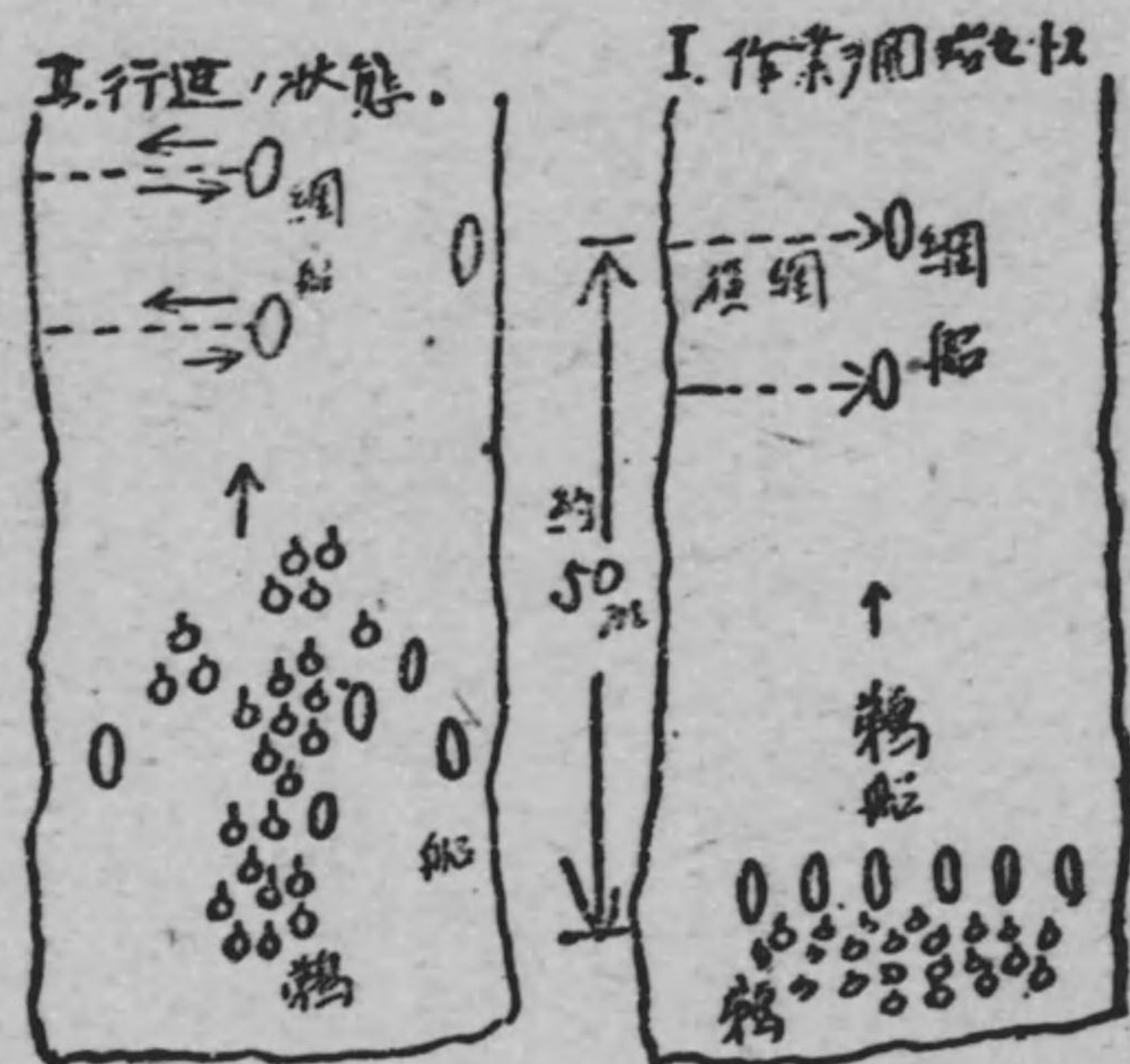
にならない混濁の水であることは御承知願つておきたい。

七〇

一、作業の順序

まづ一定のクリークに着くと船をおろし同時に日本の瀬張網同様の網を別圖(Ⅰ)の如く入れる。同時に六艘の船が進行して、内一艘は網船の對岩に於て魚の移動を阻止する如き有様で、其間船は↑の方向に進むと同時に鵝が。Ⅱの如き隊形を取つて前進する。其間鵝使は「エーヨーホーホー」とかけ聲をかける。「ヨーホーエーエーオホ……ホ」ともよんでゐる。この兩方のかけ聲によつて鵝の操作に相違がありとも考へられた。そしてしきりに、

に、さをで水をうつ。鵝は水にくどつて魚をくわへて水面に浮んで来る。大きなのは二尺もの鯉と争闘する様な有様で浮ぶのもある。それを見ると鵝使ひは船を進めて、たも網で魚をうけるか、或はさをのさきで鵝の足にむすびつけた網をひつけて手元にひく、鵝は其時さをの



しに乗る。これを船迄たぐりよせて魚をはかす、大きな魚をとつた鵝は一度船の上にあげて、船端で小憩してゐる。どれもが船端にあがらうと其時する傾向が見えるが追ひやつてゐる。鵝が水面上に浮遊すると、こきりに竿で水を叩く。すると鵝は再度水中にもぐる、これが何回もくり返される。

鵝は内地のものよりやゝ大きいと思ふ。大體白いサシ毛のあるものが多く、人にはよくなれてゐて別圖に示すやうに筆者の手にとまつても平氣である。これを

もつてゐると鵝使が「チエコ、ク、ク、クニヤン」鵝のことは何と云つたか忘れた、これは女性であることを、吾等にわかりやすく姑娘といつたものであらう。みな「テンホー」と大笑ひを

したことがある。

自分の見たのは二百米位のクリークを五十米ごと位に三回行つた。獲物は鯉、鰱魚、鯰魚等が主であつて二尺以上のものは二三鵜がくわへてゐたが、にがして一尺餘のものが最大でさつた。

この作業を終ると鵜を集めて「あさ」をやるとのことであつたが、午後二時頃から始めて午後四時過となつて〇〇〇〇の任務に關する所定要務の打合せが、午後五時からあるために、最後迄見ることが出來ずに引き上げた。(昭和十四年三月十日陸軍記念日の夜十二時)

城壁遺存の陶磁磚瓦片

支那の大平原に一つの風景がありとすれば延々と起伏する城壁と態様に變化ある古塔が形成するものであらう、中華人の言葉をかりるなれば「平明山水」の美と、中支に於ける其代表例として岳州、これに亞ぐものを揚州と先學に示教されたが、何れにせよ、水城、壁塔は遠景に於て無限の風光美を展示してくれる、而して中支にある一、二例を除くとこれらの築造は繁業の形成したものであり、根柢は土を以つてした藝術であるともいひ得よう、揚州の風光にして城壁と塔が

なかりせば平々凡々の極みであり、蘇州、南京亦同じであると信ずる、やゝ遡江して彭澤城は若干特異な例で急斜面にめぐらす山城下に都市をつくつてゐる。

さあれ民國二年上海城が除去されて以來刻々として新都市計畫は城壁をクリークにうづめその跡を幹線道路に變じてゐるが、遺存する城壁は今次事變に大きな戰術的價值を存したことは論ずる迄もない、吾等戰友の多くがこれに肉弾を以て突入したことは忘れ得ない事例であり、南京光華門上の墓標中華門側の部隊名も風露に墨のあともすでに淡からんとしてゐる、今や城壁の何處にも日章旗がはためき、秋至れば日本と變りなく蔦は色づき南京ハゼは紅葉し、梶の木は「鈴かけ」に似た實を、オホイタブカラズは、いとうまげな實を城壁に結んでゐるが、湿度の關係上中支の古城壁、塔何處にも苔のむすことなくこれのみは吾等にも、のたりなさを感ぜしめる。武人は城を見れば戰術的價值を論じ、其植物學者は「古城壁は古來一般人の立入りを禁止されてゐる關係上貴重なる採集場だ」と語つてゐた、私は之に加へて蔣政權の城壁破壊は「其包含物を露呈して吾等に偽物でない支那古物を展示してくれる一寶城である」と語りた。曾て聞くに南京夫子廟附近の古玩店主の多くは回々教徒で最も商賣にたくみであると、もし中支の古玩店で掘り出しをしよう等考へるなれば「孫をして祖母を生ましむるに等しい企てである」と、私は斷言したい

たゞ何の粉飾もなく古物を展示してくれるのは崩れつゝある城壁の断面であらう。

然しこゝに珠玉ありとはいひ得ない、それには二つの理由を挙げ得る、一は築城時、附近の瓦礫と畑圃の土を盛り上げたにすぎず、二は古城壁は年とともに増強して上層は近世のものに過ぎないことである。特に蕪湖以東の何れもが倭寇の侵入によつて明末清初に形成されたものが多い事實である。それに加へて意識的に發掘することは不可能であり、陣中たま／＼城壁近くに宿營或はゆきすりに觸目した瓦礫を採集したにすぎないために、こゝに擧示する資料も單に片々たるものであることをお断りしておきたい。且は採集の時日に關し古きは四五年前にさかのぼり新舊談を混するのやむなき事情をも了承を乞ふ。

○ 鎮江

既に禹貢の時代揚州の一城として知られ漢には丹徒縣、三國吳にあつては京口、隋唐の潤州、宋代鎮江府が置かれ、對日本關係にあつても多くの交渉をもつてゐる、至順鎮江志によれば元代に早くもキリスト教會があつたといふから、相當殷盛を極めた涉外都市があつたらう、古城は現城の東方にあり遺存する現城は明清倭寇のために強化されらしい、丹徒縣志或は寺誌としても金山・北固、焦山志等まとまつたものが残つてゐるが、古遺物としては北固山甘露寺に巨大な天

監十八年造とよぶ鐵塔があるに過ぎない、これも重修に重修、現存のものは宋或は明代とされるが、各様の佛像の様式に古態あり、この城郭も事變前蔣政権により除去され、今は全城の三四割を残すに過ぎない、だがこの工作が中途にあることは吾等に幸する、だから遺物は全城から採集が可能である、東西二十町、南北十町餘さして大城といふべきでなく、北岸を揚子江に接し、西及南に蘇州へ通する大運河をめぐらす要塞である。

採集の遺物は多く北邊よりの地帯で有名な北固山甘露寺の高臺下である、この壁面にみるや、特異な事象は陶磁片の多いことと人獸骨を露出すること、磁片は青磁系のもものが多く某氏の示教によると景德鎮系であるとの話、大部分は厚手で大形である。何れも劃花模様をもつ類であつて陶片には天目風のものも多く認める、時代は何れも新しく明末清初に過ぎない、元宋代と認むべき例品なし、次に磚に文字あるものは多く觸目するもこれも亦明末清にすぎず、多くは鎮江城磚或は丹徒縣云々の文字を認むる程度であるが、その一は「修河磚」の文字をみる。

厚さ五センチ、幅一七、全長は破片のために不明であるが多分、三〇—三五に達したであらう文字の示す如く、修河材料であつて城壁のための磚でないことは明確である。採集地が長江岸より百米餘の關係上會つて岸壁に使用のものが混じて積土とされたと考へてよからう、土質、

焼成、書風より見て年代も相當さかのぼり得ると信ずる、ことに一般は左書に對して本品は右書であり巧みな雄勁の書風である。

二は假に「蓮花磚」と呼ぶ、所得片は二であるがともに同一型よりなるものと推測する、今此二片より復原すれば、

一邊を約四十センチとす、正方形厚さ約五センチ、よほど大形に屬すべく、中央に蓮珠十八顆をおく珠房を有し之に復瓣十六の莖葉を配し、外區に二直線の一區を置き外邊に寶相華模様の便化ともみるべき一紋様、これに亞いで忍冬唐草の外週あり、圖案として複雑なるは一般磚とよほど異なることである。

この中心區の様式は純然たる漢瓦當に似たるも珠房あまりにも大にして且寶相華の便化よりみて作製年代を唐末或は宋初とすべきや、これが考證には陣中何の文獻もなかつた先學の示教を俟つ次第である。

本品は主として壁面内より出土するも、城磚の裏づめの瓦礫として使用され、本來の壁面に用ひたるものではない。ことに一片は火炎を受けしとあり、紋様よりみて寺廟等に使用されしが如く、特に出土地が北固山甘露寺下にした、同寺は北固山志によればその創建唐前にさかのぼる

ものにして、現存遺物には前掲鐵塔以外に何物もなきも、諸文獻により唐代すでに大寺として存在せしこと明かなり、假に今推定を許されるなれば本磚は寺用のもの、破片を城壁に利用せしものなるべきか。

○ 南京城

古には三國時代より六朝に至るの間建築、秣陵、建康として或は金陵の名に知られ、南朝四百八十寺の名蹟は至る所舊蹟ならざるなし、されど桑海の變は遺蹟を毀滅して、現在みるべきものとしては明紫金城の一部たる城門礎と雜草に埋れる大礎石の寂莫たるのみ、明太宗の孝陵も支那軍により濠とトーチカに荒らされてみるかげもなし、たゞ城壁は一部皇軍入城の砲撃に崩るゝに過ぎず、四圍十里に近き大土木事業は昔に變らず、されば城壁の断面もみる事難く、明故宫跡には今も遺物の出土あり、されど、事變前これも要所々々の發掘により故物保管所に保存、事變後中支建設資料整備事務所として皇軍の被護下にありて、亞で新政權文物保管委員會に移管を見るに至り、たゞ明孝陵の附近農民耕作の鋏さきにかゝりて畑すみに積みあげし瓦礫に交りて、古瓦陶磁器のおびたゞしけれど、新舊品の混合と捜査に専念する餘暇もなく陶磁の珍片も求むるに難く、以下の數片を擧げ得るに過ぎない。

明故宫跡琉璃瓦片

事變當初はさして求むるに難からずと聞く瓦當、唐草あり、黄青の兩色、紋様は龍と鳳凰の二種、されど明代のもの尠く、後補品多し、古品は龍の勇躍せると外圍に波浪をめぐらし重圍といふべき圖案、瓦質堅く黄くろすみて完全品を求むるに難し、多く清代品に過ぎず、まゝ漢瓦或は琉璃瓦片を得るも小片のみなり、然るに近時南京古玩店に賣る琉璃瓦に完全品を多々觸目何れも模造品にしてます、眞物なし、或は他より移入せる俗悪品ののみ。

南京城磚

磚は吾等より以上中國人の愛好するものとして古品すくなく唯一の例として「洪武十年」の一品を觸目せり、其燒成度堅く、文字面は磚横側に捺印し文字亦優れたり、他は一般に無數にみる品種にして後補のものとも認む、文字面前者と異り捺印せず木框に文字を彫刻し其内に用土を充填せしものと愚考す。

前者紫金城當初のもの諸書に古磚は磚硯によしとあることも本品をみてさこそと首肯し得、後者に各縣の物あり、茲に其一例として窯業に關係深き龍泉造の一品を見る、この幾種も進軍とともに再び道傍に捨つるのやむなきこと、戦の職にあるものゝ常とは申せ心残りなきにしもあらず。長江をへだて、里餘浦鎮城あり、城壁すでに崩れはて、雜草の間に巨石の累々たるをみる。古くは石をもて築きしなるべし、たゞ城東長江に面する高臺に「中敵臺」なる一遺物あり邦人は韓信をまつる堂宇なりともいふ、遺存する咸豐、道光年間の修築碑により、中敵臺なるを知る、嘉靖、籌海圖編によれば當時、如何に多くの烽臺と敵臺が城壁に倭寇のために設けられしかを語る、江岸に面するこの地、曾て嘉靖三十四年倭寇は南京城を攻略、或は遠く上流蕪湖に徐州にも突入したる彼等は如何に中支の築城術を發達せしめたるか、城瓦小さく二字名乃至數字あるもの多く、考古的價值あるものなし。

蕪湖より上流安慶、彭澤、湖口何れも城壁現存し南京、蘇州に比すべくもない。九江城はすであと方もなく取り去られ、たゞ廬山に通ずる東部の一域に城壁を存し磚面に文字を認めるも何れも清代の築造物に過ぎない、これより上流鄂州、黃州ともに城壁は遺存するも上層部よりみるに古物なし、黃州は赤壁に知られ城外に碑の存するあるも清末の建設みるべきものなし、且赤壁は漢口より上流とするの説あり、其位置未だ定かならず。

武漢三鎮に至りては漢口はすでに城の面影なく、現中山路は城壁たりしあとと聞くのみ、城壁の一片も得ること難し、漢陽は一部崩れし城壁城門あれど、壁土の断面に何物をも求め得ず、磚

片に文字あれど清代期にすぎず、城壁も荒れはてこれにつゞく伯牙斷琴の交りに有名な古琴臺の如きも、敵の宿营地とされ、入城當時荒廢の極みにして馬糞に麥芽のみ青き茅屋を見たるのみ、鳳凰臺とよぶ邊や古磚をみたり。對岸の武昌は楚の國都として古く文物燦然たるの地、爾來帝王必争の地とて其城壁は堅固を極めたらんも、面影を残すは有名なる黃鶴樓の臺地側面に磚積のあるのみ、會ての九門はたゞ町名に止るのみ、唯一の遺物として觸目したるは宋代磚の一にて長さ二十八センチ、幅十八、厚さ五センチ、側面に「嘉定乙亥鄂」他面に「鄂州城磚」の文字あり破片にして全形はやゝ長さに於て數センチを缺くが如きも武昌の古名を録し、書風の古態なる城磚としてみたる最も優れたる一例とす。

他に城邊はり出土せる一碗あり青磁系にして高さ約八センチ徑十二センチ、高臺一五センチ厚手にして雜器たるに止るべく、識者の言によれば元代景鎮窯たるべしと、昭和十三年十月二十七日入城以來すでに五星霜雀躍しての入城の時の思出として、今我茶碗として朝夕記念、陣中愛玩の一也。

以上の瓦礫もすでに拓影寫眞のみ手中にありて實物は中支の某々地點に残したるものあり、今や大東亞戰の非常時、玉石も亦命令一下すべてすてゝ、南北何處にも屍を埋むべき身、瓦礫を玩ぶにはあらねども戰陣の寸刻、眼にふるゝまゝ我慰安として愛玩せしものを、せめても筆録して文化の上に寸毫の参考たり得ればと念願するのみ。

揚子江と倭寇

中支に東西すること幾年、支那の地域の大を感ずると共に考現學的にも史學的にも自己知識の貧弱なるを悲しむ。

揚子江の今夏時増減水五十尺餘に及ぶ上流地域、或は潮の干満數百哩に影響するなどその運輸上に及ぼす考究は一般常識として、はた吳楚を平定した漢民族の力、すでに江岸地域からすがたを没した苗獠族、日本古代交通史など吾等の考究すべき事象の多い中にも最も其資料に缺ける揚子江關係自然科学或は四百年以前江上に勇躍した八幡船、特に後者は日本に依存する文献の稀少なのに反し、支那にあつては近時倭寇平定者を表彰して抗日資料としてゐるが、これを單なる鼠賊としてゐる。彼等の研究にあまんずることなく、その根幹をなす事實を掌握し史實を鮮明にし且昔時飛躍の勇猛心を究明し、尙倭寇が單なる賊徒に非ずして一の頭首のもとに組織ある事實な

と科學的祖上に上せる必要があると思ふ。

日支の交渉はすでに何千年來に及ぶものであらう。魏志倭人傳には明確な交渉が所載されてゐる、勿論倭人傳の耶馬臺國の九州説と近畿説は今尙論争のあるものと信するが、ともあれ約千六百年前に兩者の間に交通のあつたことを記録してゐる史實は否めない。

筆者は今次聖戰に従軍して揚子江地區に遺存する事象特に農業上の諸具に多くの相似と言語上にも可なりの交渉を認め得る、且つ新村博士はたしか「吳服」の名は吳人との交通の一斑を推察し得るとされ、阿部仲磨の有名な和歌は蘇州附近と推定されてゐる。遣唐使も揚子江口を上下し弘法大師も河口附近に着されたことを辻博士が考證されてゐる。やゝ後期には謡曲にいと興味深い物語として揚子の市、或は現代の九江が潯陽として登場してゐるが、おそらく此年代頃から益々江南と日本の交渉を加へたと信する。

倭寇も其頃からの所産かと推定される。倭寇に關しては既に秋山謙藏氏が研究され諸論文が發表されてゐるらしいが、戦地に久しくゐて其高説を拜讀し得ぬことを遺憾とするも、以下は左記文献を入手一讀するとともに、現地にあつて感ずることどもを附記したに過ぎない。

一 江南圖書館本 影本 嘉靖東南平倭通錄

二、同 國朝皇彙、兵部

三、北平圖書館 同 日本考(原本萬曆版)

四、首都志

倭寇はすでに明初太祖の頃活動をはじめてゐたらしく洪武二年正月倭寇山東並海郡縣又寇淮安とあり、其後幾年かは海岸地區に活動して奥地にはあまり遡江してゐない。然るに後嘉靖年間に至つては次第に廣範圍に及び、遡江軍は遂に現在の蕪湖に及び、且支流或はクリークを東西して江南江北は最も大活動の舞臺となつてゐる、勿論倭寇は北は膠州より南は海南島に及んでゐるが古來江南は豊有であり且水利の便は益々倭寇に利便を得さしめた事は推測に難くない。

揚子江を中心として倭寇活動地域を考へる時あたかも鶴翼の如く江北は遠く興化城徐州に及び江南は蘇州杭州寧波にその繪巻をくりひろげてゐる、殊に長江本流と大運河を作戦上に利用したこと大であつたらう。

當時揚子江下流域の文化はすでに高度のものであり、現在の上海は縣城として城市を形成しつつあり、吳淞も一つの聚落をなし太倉、蘇州、鎮江、南京、蕪湖或は北岸の通州、江陰、揚州、興化等一帶の現在都市はほとんども當時と差異なく分布し水利もほとんども似たる關係と考慮せられる。以下

説かんとする所は特異なる揚子江の増減水と倭寇が如何なる關係あるやを見るに、別表に示すとく嘉靖三十一年より同四十二年間の來襲狀況を示せば同三十四年を最高とし且十二ケ年中の來襲月の蒐計を表示せば別表の如く、四月の七回、五・六・七月の各六回は所謂増水期に該當し冬期は其回数二乃至三に減少す、勿論二月及九月は揚子江並支那海の荒天のつゞく事は今も變りなかりしと見るべく、支那現時の諺言に

三月三、九月九、無事莫在江邊走

(註、三月三日九月九日に命のおしいものは揚子江の岸にゆくな)

と恐れられてゐるし、日本の諺にも二八月一人子は船に乗せるなど警戒してゐる如く、この通俗的な諺のもつ意義や亦大である。二、三、九月おそらく中支に暮した何人も悪天候續きを肯定するであらう、本表も又之を充分裏書してゐるが、冬期にも倭寇は絶無でなく出沒した事實は何を語るか。

これに關して二つの理由を挙げ得よう、即ち一は支那に根據地を有してゐたこと、例へば前掲文献に勦晋陀山」なる一句、「當然寇晋陀山」とあるべきを寇といふ文字を晋陀山に限り使用してゐない、何十個所もの地名には何れも寇何々とされてゐるのに對して味ふべき一句と考へる、冬

期或は九月の悪天候期は如何に勇壯なりしといふ彼等も大洋を渡り扁舟によつて渡來し得なかつた事は想像し得ること、晋陀山、否舟山列島の地域は彼等の根據地であり兵站基地たり得たであらう、尙晋陀山志によるに「寇紅毛」の史實を擧げるも同寺域に限り倭寇のことなし、勿論數回にわたり、同山を支那軍が攻撃してゐるが、これはむしろ同地を倭寇占居の事實を語るものであり、冬期もこゝを基點とすれば揚子江を遡江するに難くはなしと信ずる。

次に當時の文献が示す如く偽倭寇の事實である。文献の示す所によると其首領株が日人であり他が之に和する支那人も多くあつたらしく嘉靖三十三年の條に四十人中倭居十三而中國叛逆居一十七人と示し又他にほ

「得倭器」とか「眞倭島魯美他即」或は「倭魁辛五郎」

と特記されてゐるのはその内容を示すものなるべく、こゝに日支人の結合があり、且在支據點を有し至難とされたる二百十日期にも進出し且不斷に異變を生ずる原因も一は偽倭の存在にもよるであらう。

尙嘗て興化城を三ヶ月占居せる等たゞ徒に殺戮を事としたとも考へ得ない。

次は水路の利用は彼等のまた得意とする所であつたが、おそらく大洋を横斷した船を以て直ち

に揚子江支流に突入したとは考へ難い、多分大運河の水深も現在とさして大差なしと信するが徐州附近に至るが爲には揚州附近を本據として小船に分乗する必要があつたと認める、嘉靖三十四年五月に

倭舟三十余艘衆約千餘人自海陽突犯蘇州青村云々

とあり數に關しては信じ難いかも知れないが、ほど近似値は得る事が可能と考へられる、さすれば一艘の人員三十餘人彼地附近の水利より考へて乗入り得る小舟なりと想像出来る次第であると共に誇大され勝の人員として三十人以下の乗組員と假定して集團の算定基礎とするとき、ほど揚子江本流より支流に突入した人員が推定され、本流或は海岸邊の都市攻略人員は數千と記し、又萬と記されてゐるのも大船運行可能の故であらうと考へられる。

然らば彼等は舟にのみ依存したかといふに、時によれば一團が陸上をはやての如く縦横に走り意の如く振舞つてゐる、殊に我弘治元年（明嘉靖三十四年）七月には板橋、秣陵の方面から南京城を攻略してゐる事は今次事變南京攻略の友軍の左翼が雨花臺に迫つた經路と合致し、もし推定が許されるなれば八幡船團は四百年の昔南京の碼頭を船旗へんぼんと遡江しそして南京上流の右岸に上陸して攻略を開始したであらう。

殊に盛夏の候でありよく倭寇の圖にみる半裸に刀を肩にした圖も肯定されるが他面別記統計の示す如く、おそらく倭寇の進撃は陽春より夏期であり半裸の圖形が一の代表的な服裝を生むに至つたであらう、だが必しも彼等が冬期衣服も身につけず等考ふるは大きな誤であり、國朝典彙に所載されてゐる〇〇〇〇な行爲をしたなども考へられない、もし支那の文献が語る如しとすれば二百年にも近き長期の間進出は不可能事であり民衆も亦こぞつて防禦につとめ遠く蕪湖まで遡江し難い情況にたち至つたであらう、むしろ當時吏道の腐敗は倭寇鎮壓に名をかりて苛斂を極めた事實も認められる、其反對現象はむしろ進撃助成の一因ともなつてゐる。

又興味あることは巡撫使が無能のため賄賂を呈し其額數萬兩或は金花牙驕などそれを新船六艘に載せ歸つてゆく光景などすでに外交的手腕が大いに働いてゐることを認める。

尙日本に鐵砲の渡來と前後して倭寇防禦に銃砲が使用され可なり倭寇のなやまされた事實がある、何時の代も戦に新武器は勝を制することに變りなく、おそらく天文年間の種子島に鐵砲輸入の正史以外に九州地域は彼等によつて、ひそかに鐵砲輸入のあつたことも信じ得よう。

（昭和十六年孟春於中支）

中支の印花布

—
 當地も秋の終りとなり棉の收穫もほど終つて農家ではしきりに、繰綿作業から——じんき（播磨地方ではかくいふ、方言に就ては曾て柳田先生の書かれたことあり）——絲つむぎの作業が行はれてゐます。幼年時かすかに記憶にあるこれ等の諸具を今眼前に展示されて、その作業を見る時、何だか歌舞伎の田舎の場面でも見る心地がします、ふしくれだつた絲は幼時故郷の倉の隅に残つてゐた古絲を思ひ出し、手織機の部分品オサ、サトク等一ツ／＼の名稱を獨りあれだ／＼と合點しつゝ色々な質問がしたくなります、だが此村は隅々迄安全でもはるか彼方の平原の孤村には何がゐるのか犬のなき聲にも雞のケタタマシイ音にもある限りの注意を必要とするのが戦地です。何といつても興味のあるのは木棉に關する事どもであります。それは曾ての自分の幼時の記憶をよび起す一番大きなものであるためせう。

去年武漢攻略戦のトップに武穴鎮で自分の眼についた印花布と藍房は今尙腦裡を離れません、藍房とあると「紺屋のあさつて」等の俗諺を思ひ出しだり、印花布は内地の「オキガタ」と一樣



中支の印花布

子

掛

であること、子供の頃、田植に村の乙女達は必ず紺の「オキガタ」のおこしに紅だすきをかけて今日を晴れと田植をした事などが眼にちらつく事です、爾來藍房で印花布を染める現場を見たものだとの願望を達することが出来ました。かゝ紙に石灰と豆粉をねり合せたものをぬり白木綿にかたを置きます。複雑な模様は二回かたを置くことです、それをほして藍染にする、職工の工賃は二食親方持ちで一日六十錢、印花布一疋三元四角、もし日本金で買ふなれば三圓位で買ひ得ます、（一疋は三丈八尺）但支那尺この模様は古典的

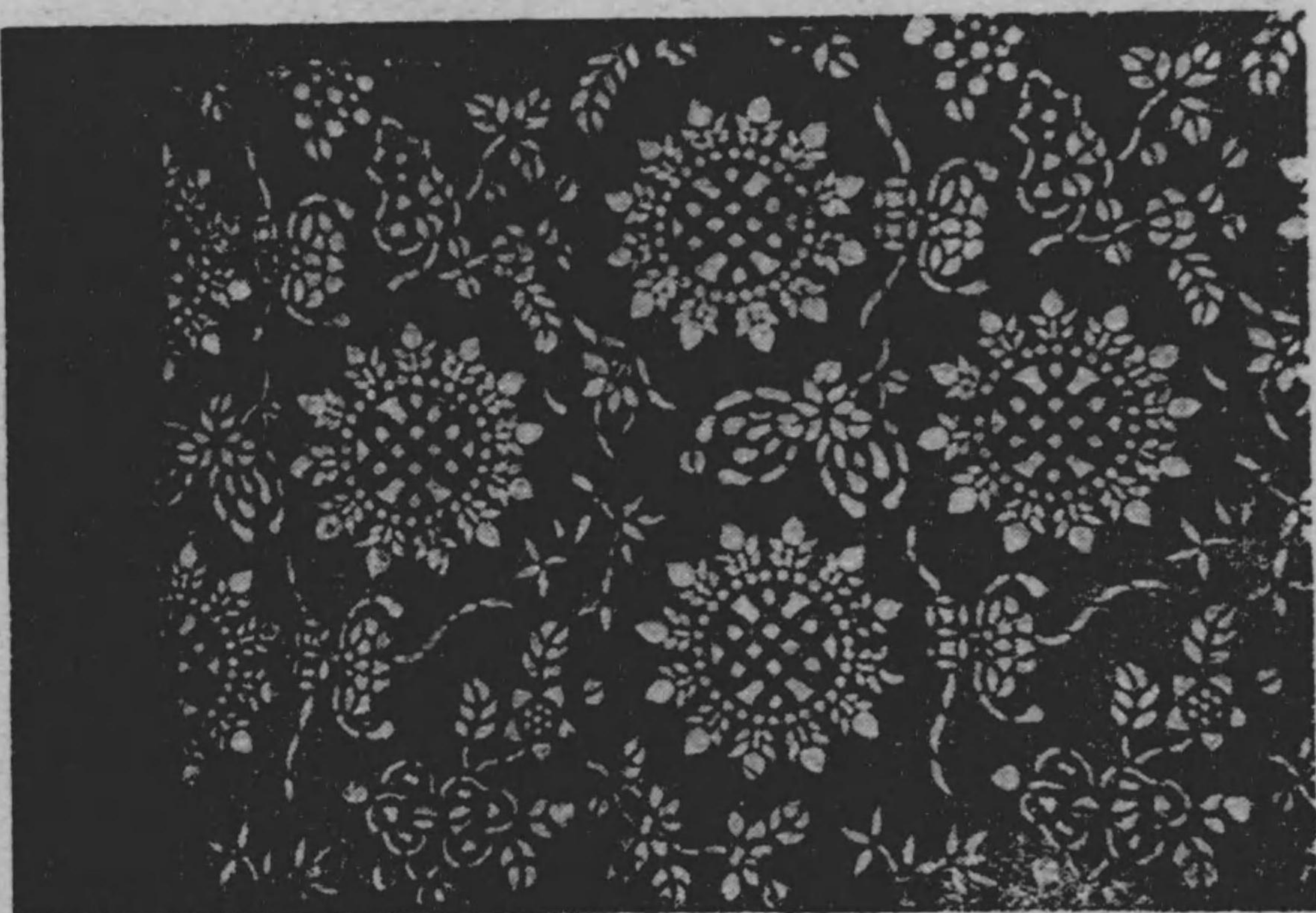
なものからよほど現代化したものがありますが、要は手織木綿を手染にしたものであつて都會では使用されない所謂「土産」(田舎物産)とされてゐます、でも農村ではその多くが使用されてゐることです。

掛子(衣服の一つ)臥單、(蒲團)、圍裙(エプロン)から日本ののれん、同様な用途をもつもの等雑多であります。

模様の一二について述べるなれば(一)喜鳥が梅にとまつてゐる圖は古く天平の蠟纈染の感があり、日本の如く梅に鶯と思ひきやさにあらず。(二)に蘭花に梅花。(三)に八結模様花草。(四)に鳳凰とつる草。(五)獅子に乗る神仙、夫々の線にギョチナイものが多いですが全く黒地に白は螺鈿から來る感を吾等に與へます。私は印花布の持つ一つの工藝的な價値を述べてみたいとすら考へるのであります。最近雑誌「大陸」十一月號に甲斐已八郎氏が滿洲でみた麻花——印花粗布とも呼ぶとあり——に興味ありとされたスケッチ入の一文をよみ滿洲の物と同じ物があることを知ると共にすでに日本内地に此事變を境として相當、花布が輸入せられてゐることを知り愉快に感じました。(昭和十四年十一月二十二日)



圍裙 (前掛)



臥單 用布

中支の印花布

九一

中支奥地の舊曆歳末

在支那三年、はじめ誰もが經驗する便器に飯をもること、〇〇〇で洗面したことも、もう昔語りになり日常の會話も心がけ次第でやつてゆける様になると次には支那の家庭、人情風俗が知りたくなる、だが眼につくのは支那の紅事が第一で一般的なことはとかく等閑視され勝になる。現代の支那文化人にはすでに纏足などは夢の夢だとする人々も多く、一九二七年の民法草案によつて男女同權がさげられて以來老人共は家庭内の争が多くて困るところばす現時である、今は兩極端の社會相が支那のほんとうのすがたかと思ふ、輿に乗つた新姑娘が通るかと思ふと新型の自動車を紅白色とりりの自動車で飛ばすお嫁さんもゐる。(註新姑娘——お嫁さんのこと)

然し吾々の眼にはやはり昔の型のみが興味勝で、とかくそのみをあさらうとするくせをもつてゐるが、出来るだけ一般的な歳末の街頭風景を寫してみたいと思ふ、こゝは中支の奥地、長江に面した新文化都市〇〇である、一月の二十日頃迄は連日の小春日和であつたのが急變して零下五六度となりさらに二月に入つてからは寒さが厳しく連日の雪で七、八寸も積雪、三四尺の垂氷も

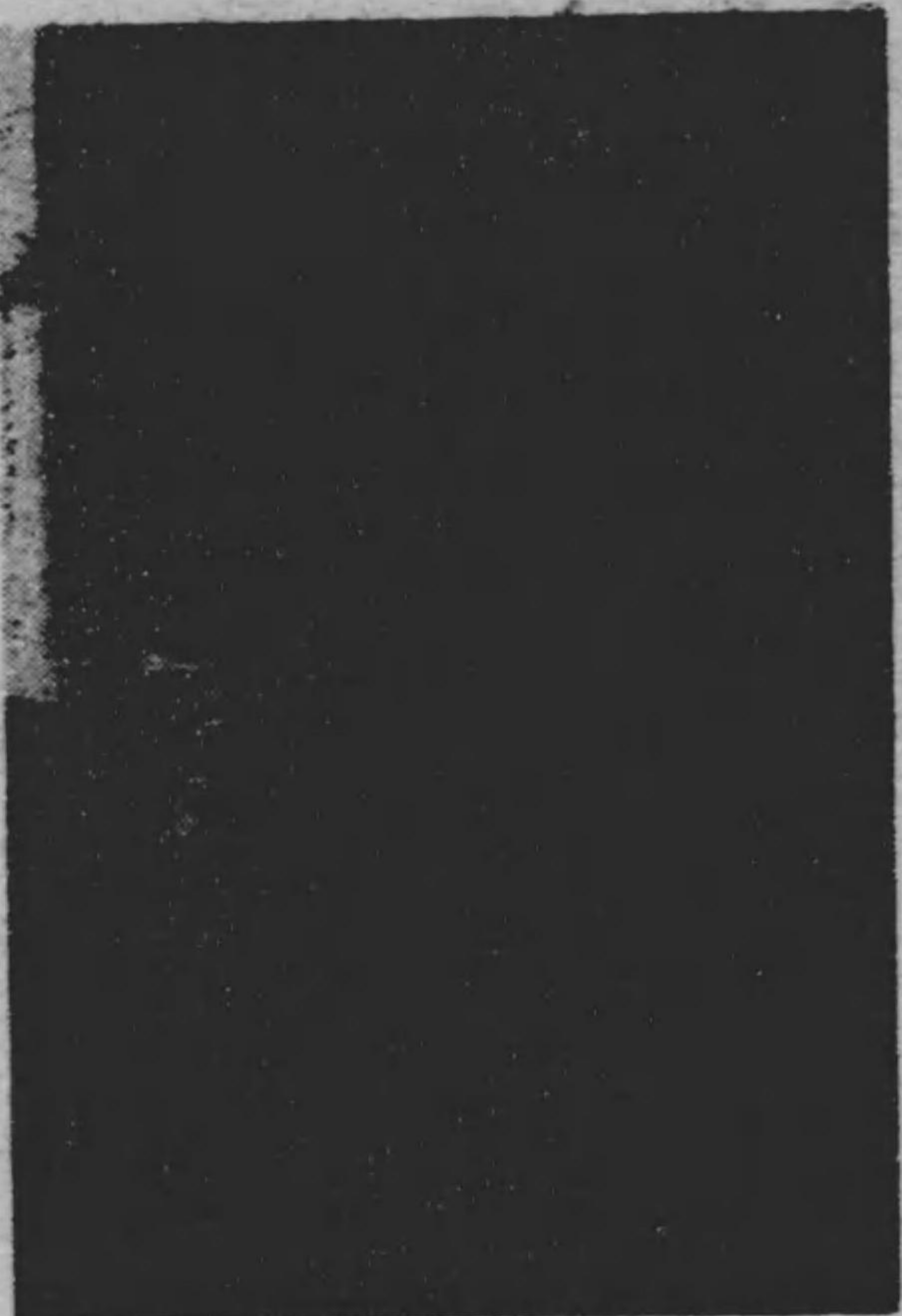
みかける、もう二日すれば正月といふ街頭は實にあわたししい、雨傘や雨具をもたない彼等はこの不良天候つゞきの泥カヒの道を歩む事は苦痛の極みであらうが、新年の買物は止みがたいと見えて人力車が一寸出にも使用される、何十とも知れない人力車が絡繰として狭い道をふさいでし

まふ、内地で考へてゐる人力車は單に人を乗せる物たつたのに、こゝでは荷車の代用もする、薪もつめば豚肉も山積して通る。

まづ店頭には正月用の

彩燭 紅燭 彩燭は蠟燭の大型のものに箔をおして樹下美人風の彩畫のあるもの一對が單位で七八十錢より二三圓、紅燭はたゞ紅の蠟燭、何れも竹の芯があ

彩燭につけた金花



り、さかさまにして店頭に美しくかさられてゐる。

壽香 日本ツァーシヤンのセンコウと同様であるがやはり竹の芯があり日本の數倍のふとさである。共に同じ店で賣られてゐる。

年糕 普通の米でつくつた、内地のシトギと同様な扁平な長さ四五寸のもの、四十八本をつみあげて一括してゐる価格を聞いてみると一圓二十錢といふ。

猪肉 豚を猪とよぶ、猪肉を準備することは勿論であるが父母祖先をまつるためには雄鶏、猪頭

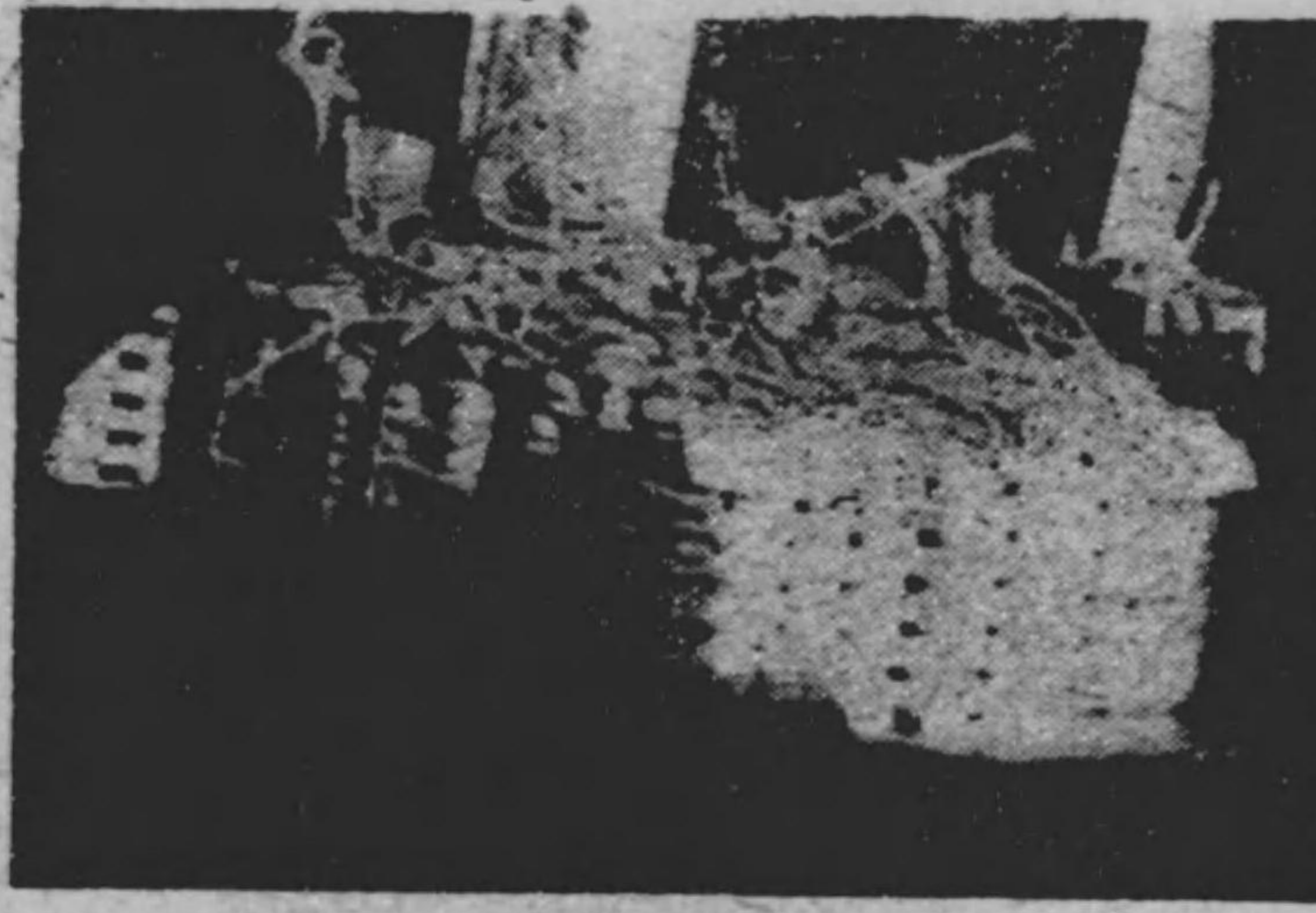
鯉魚の三種が是非必要で共に皮をはぎ紅紙でかざる。

鯉魚 長江の産する鯉は實にすばらしい、長さ五六尺に及ぶものがある、魚屋にも賣つてゐるが街頭で荷つて呼賣する者が多い二三尺のもので七八十錢。

鴨子 ほんとの鴨も賣つてゐるが多くはアヒルである毛をむしり或はすでに油で丸あげにして賣つてゐる二羽二圓位。

年酒 正月用の酒各種がある日本のビールも可なりはゞをきかしてゐる。

布店 彩布は色とりとで實に美しい、然し支那ドレスはかけ



をひそめて今では人絹が一番多い、全く日本製品である事も興味深い。

苹果・福橘・棗子 りんごは勿論日本産、一個上物は三・四十錢、是は事變前も日本から輸入されてゐた由、全くの貴重品で、支那の人はあの美しい紅色の果物を食ふと萬病を治すと信じてゐるらしい、蜜柑は正月には福橘と呼ぶが、湖南、福建省から多く出るらしいが現在は珍らしく且高い、棗子は干したものとにも祭壇をかざるに必要な果物である。



中支奥地の舊曆歲末

白 撞 賣

れてゐた由、全くの貴重品で、支那の人はあの美しい紅色の果物を食ふと萬病を治すと信じてゐるらしい、蜜柑は正月には福橘と呼ぶが、湖南、福建省から多く出るらしいが現在は珍らしく且高い、棗子は干したものとにも祭壇をかざるに必要な果物である。



其他各種の常店も此時とばかり賣出しをやつてゐる、その道傍のせまい空地を利用して正月用品の露店賣出しがある。

賣 神 門

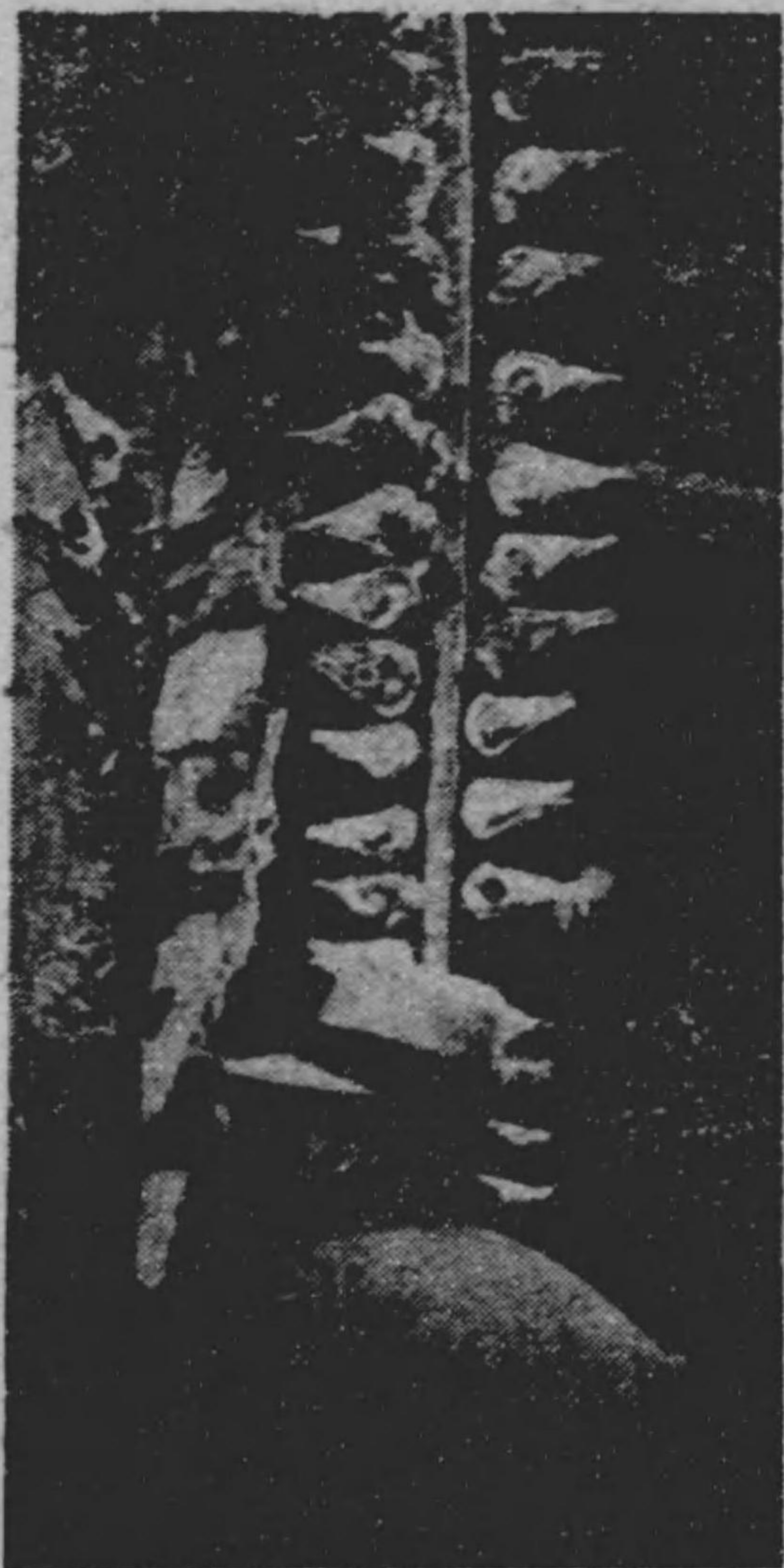
檀香タンキヤン 白檀の切つたもの上下各種があり價は上等のもので一斤五圓位のよし。

門神モンチユン

正月には門戸に招福のため色々な繪をはる、ドギツイ

赤青色で彩色した紙片を賣つてゐる、かたはらには「代書春聯」と書かれてゐるが紅紙に吉言を書く代書もやる。

尙筆墨、タオル、ハンカチ、野菜の露店もにぎはつてゐる、其人こみの間を元寶、元寶花、金花賣がゆききする。と思ふと道傍の壁に青龍刀面搖鈴等の正月用子供玩具を少女が賣つてゐる。元寶 元寶蹄鈴をボール紙にはりつけた、馬蹄銀をまねたもの、祖先の追福のために焼くもの。



金 花 賣

金花オキシラフ 金色の薄板を打出して圓をつくりこれに造花をつける、上物は孔雀の尾をつける、これを彩燭の上にさしてかざる。

要は支那民衆はすでに和平來を信じきつてゐる、謎兒マズイでなく猜マズイへとときしてゐる。空の受軍の○機キの爆音も最早や彼等は意にしなす。

字藏と陶磁片工藝

字藏とは寫眞に示す、文字ある不要の紙片を焼く築營物であり、中國人の稱呼「字藏」で特に説明を必要としないと考へられるが、陶磁片工藝とは自己の假稱であり、中國人の稱呼につきては分何といふか判らぬ、その大要を述べるならば陶磁片を再生せしめてゐる一の工作物、即ち其一例は寫眞に示す如く壁間に鉢、壺皿の類の破片を利用したモザイク風の物、或は庭内路面と圖様の工作あるもの等、又は其他小具に應用したものを一括したい。兩者をこゝに併記したのは因果關係にあつては何の關聯もないが、以下述べんとするものは共に物の敬惜感念の發露に起因した點であり、其美風習を擧示するとともに、弊も掲記して諸賢の高級を仰ぐ次第である。

中國人は古來文字を愛し、これを味ふ點に於てはおそらく世界の何れの國民よりも優れてゐることは林語堂も其著に高調してゐるが、字藏はそれに端を發したあらはれであらう。

中國の町、村、何處を問はず辻、寺、廟、學堂、勿論モダンな現代學校にもこの字藏があり、廢墟と化した町、村が復興すると同時に今も字藏と土地神の小祠が登場して來る。あらゆる舊風



圖筒形字藏(長江中流域)

習を廢除した蔣政權もこの字藏に關しては打破の手をのべなかつたらしく、上圖に示す如く、正面にどれも築造記念があり、古くは清朝より近く民國各年のものと認めるそして古いものには多く文字紙敬惜の功德が掲記され

且古聖人の像が描かれてゐるものもある。村童達がよく、こゝで文字紙を焼いてゐるのを見るし、又學校では一の當番が焼却に當つてゐるが、日本に見ない村の共有物であり且社會事業施設の具とも見るべきであらう。

中國には古來「還魂紙料」なる言葉がないと聞く、それは古紙の多くは、この字藏で灰と化す

ためでもあり、又文字のない紙片は如何な小さなものも夫々利用され紙屑といふものがちらばつてゐない。特に本年は舊風習の残る〇〇の地で感じたことは端午節句に子供等の胸や背につるす



大字藏・高さ十米(中支奥地)

避邪のかざりものゝ厚紙蓋紙は全部、煙草の空函紙でそれに色紙をはり、老虎、金蟬(古劇に出る)などがつくられてゐる。それが一村とが一町でなく、直を異にした二三の地點で見たのが同様に廢物利用のたくみに驚きこ

れでは紙のすき返し材料も前者と併せ皆無と考へざるを得なかつた。ともあれ文字も紙も全く敬惜する國民で支那の發奉(領收書)の小紙片であることも日本人の學ぶべきことゝ信ずる。字藏



磁片利用の壁面

で紙片を焼く程の彼等であるから文字を書く丁寧さは吾等のせつかちにはじれつたくなるがそこに支那書風の藝術味が表れるのだらうと他面感心もし驚きもするが、かく文字と紙の敬惜こそ彼等に優れた書風を生んだ起因かと思ふ。これに伴ふ弊害もなしとはしない。凡て文字ある紙を焼却するために日本の古物屋や、或はよせやにみる紙屑又は古文書の山がなく従つて日本の如く古文書學の發達を來さない結果ともならう。これとともに文字愛敬は古筆の複寫となり特異な發達をなす所謂拓或は搨と呼ぶ拓影の尊重となり古碑があればそれを手拓して生業とするものがあり、ために風雨の損傷よりも手拓のために磨滅して古碑面はみるかげもなき瘦せ細

りつくしてゐる。自分は中支にあること四星霜其の間眼福としたのは唐碑で有名な明徴君碑のみである。勿論同碑はかたい大理石であると共に高逸な名僧紹の人格と高宗の御製、王知敬、高正臣の崇高な筆致を敬慕のあまり、今も堂宇内にあり香煙が絶えない一の信仰の對象物の関係もあらうが、硬度の高い石材のため等に依り現存するに至つたのであらう。すでに日本に明徴君碑の法帖が如何に多く輸入されてゐるか、若輩の自分ですら出征前に可なり多く觸目してゐる。だが實際同碑を見るに及んで驚いた事は側面に美しいレリーフの彫刻がある、これ迄一として同碑の拓影に其圖様が添付されてゐるのを見ない。それは文字のみを愛敬し圖様に迄彼等の趣味とか研究の及ばない例であると私は斷言したい。

尤も中國人のみでなく、今次事變で皇軍の勇士達も古拓を愛する趣味が傳波して蘇州寒山寺の「月落烏啼」の碑拓を如何に澤山購入したか、同寺の僧は終日碑拓に汗を流してゐるといふ。尙中支各都市では同碑拓からの複製を安價で販買し寒山寺には眞偽兩拓を掲示して「偽物に御注意」と日本語で附記してゐるなどこれは苦笑せずにはゐられないが。

さて話は餘談となつたが、次は陶磁を愛する感念或は民衆が陶磁器を鑑識する眼をもつてゐることには驚く次第である。この事あるが故に支那陶磁の特異な發達があり得たらう。勿論御窯に

よる發達は當然肯定すべきであるが、御窯の發生には根柢にやはり其民族腦裡に流れる愛好心が權化となつたものと私は考へたい。日本なればかけ茶碗としてするのをよほどの場合でないとしてすに例のカスガヒで止めて使用し、最後に小破片となつたものも保存して壁をかざり或は邸内路面に利用する等又より以上高級な定均、汝、饒窯などになると一ケの小破も小物入や、阿片具に或は硯屏に額に應用して愛玩してゐる心もちは單に物おしみの心理でなく愛惜の心だと考へたい。物に對するこの敬惜、愛惜の發露が化してよき美術となり或は工藝と化することゝ信ずる。以上二例を擧げたが中國人の物資に對する愛、敬惜感はおそらく日本人に數倍し、支那の塵あくたはほんとの生かすべきものなき塵埃と斷言して可なりで、此點資源愛護の上からも美術工藝を生かすために一般に中國人の使用する敬惜といふ字句は最もピッタリと心情を表現し得た言葉と信ずる。

觸目した二例を擧げて其學ぶべきと弊を併せ記して他山の石としたい念願に外ならない。

金 鈴 盒 子

明日は中秋とて各戸に孟蘭盆會の準備が進められて各所に月餅を賣り出しのかんばんを見うけます。特に本年感ずることは蟲賣りを多く見かけることでもあります。相當開蟬戲も盛んなやうで可なり賭錢も行はれてゐるときゝますが、それよりも「金鈴盒子」をもてあそぶ者が多いらしく路傍の蟲賣りの多くは金鈴（内地のクサヒバリ）であります。別圖に示すやうな水牛製の盒子に



蟲 胡蘆 蓋 口 部 象 牙 牙 彫 刻 形 刻 部

大きさ二三分の小蟲を入れてふところにしてばせて身近く蟲を聞く風流、むくつけな己もこれをまねて盒子を買ひ軍服のポケットにしのぼすのは不似合ではあれ、如何にも金の小鈴をふるやうなデリケートな音は支那の俗脱味を知り得るかと考へます。其他呼哥々（くつ

わむし）、紡線姿（ぎす）も小さい籠にかつてゐます。くつわむし兄さん、絲つむぎ婆など其稱呼も面白いと存じます。燕京歳時記にみる蝸々兒、聒々兒などと少しく趣を異にしてゐます。前書とあまり出版年代の異なる金陵歳時記に蟲のことを觸目しないだけ中支には蟲狂がすくないとも考へますが、時々古玩店には古雅な蟲入れを觸目しないでもありません。勿論燕京歳時記の



硝子函の中に金鈴盒子あり。蟲が人つてゐる。

「有永樂官密、趙子書」などの名器ではありませんが、吾々の手にもし得る程度の蟲胡蘆はやゝ、古い時代のももあります。「是故京師世族、耗財之道、實不止聲色珠玉而已也」とありますが、たくみな瓢の紋様は其のために特に型をつくり瓢の成長するにつれ包まれた型により形成されると聞きますと實際を見ない自分には合點の行かない點もあります。然し紋様のある紫色の瓢に象牙の蓋をつけてゐる贅澤さは前記書の著者をなげかしめるに充分だと考へます。別圖は私のもつてゐる蟲胡蘆の出し入れ口であります。その四圍に梅、水仙、蓮花、菊が彫刻されてゐます。これは小形で徑二寸に足らず高さ三寸位で、やはり

内ぶところに入れるよし、小鳥を手にし、白蘭花、茉莉花、桂花を身につけ道ゆく彼等は必ずしも有富者と限つてゐません。豚くさい、ニンニクくさい支那人と思つてゐることは大きな誤りと考へます。硝煙尙消えやらぬ生活に尙彼等にそれだけのゆとりを認めます。明夜は中秋でありますので、支那民衆と混じて月をながめたいと考へてゐます。どんな話を彼等がしてくれるか楽しみであります。

寫眞は金鈴を小さな前記水牛の器に入れて賣る店の一つであります。支那人は金鈴を金陵とも書きますが、中支では一つには金陵—金鈴と通ずるために愛する人も多いかと聞きます。

金陵棲霞山佛教美術と六朝遺物

江南の春、それは杜牧の「千里鶯啼綠映紅」の一詩につきるであらう。聖戰幾年、山村に至る迄酒旗に代るに日章旗と和平建國の旗が翻翻として春を謳歌してゐる。曾て南朝四百八十寺も今面影はなしといふも近代の考古學者朱契は其著「金陵古蹟圖考」に「嘗蒐集諸書僅得二百二十有六寺」と語つてゐる。古都金陵を中心として寺廟と鶯の多きは前掲二古詩の遺響を今も語る

に充分であらう。

金陵の古諺に「春牛首秋棲霞」とあり、一は西郊の牛首山後者は東北の棲霞山の秋色を擧ぐるもの共に山中古寺あり、六朝の昔「茂苑城如畫……從臣皆半醉天子正無愁」の片影の残る地幸に客歲孟春、吐鵲黃鳥の音をきくつゝ棲霞山踏査、皇軍庇護の下、戰塵にもけがれず遺存する寺内の佛教美術と附近に残る六朝山陵の一端を古日記中より摘録したのが以下の雜文である。

南京より上海に至る、四ツ目の驛「棲霞山」に下車すると眼前に山石峨々とした平原中の山と相對する。これを南に廻り約五町、こゝに有名な棲霞寺が山ふところの幽寂境に昔を語つてゐる。彼の「桃花扇」の一章に「放目蒼崖萬丈拂頭紅樹千秋雲深猛虎出無時也避人間弓矢」と今其景象なきも中支に於ける隋唐以來の佛教美術の遺寶を觸目し得る地はこの地に比すべきなしと信ずる。山は三峰よりなり、主峰を鳳翔、東を龍山、西を虎山とよび標高三一三米、寺は山の凹字形をなすくぼに南面してゐる。本寺に關しては既に邦人先學諸氏が踏査され研究論文も不尠（註一）或はこの拙文は蛇足に過ぎずと信するも、二、三の手拓を世に紹介する佛縁を得ば幸なり。

同山は古く攝山或は繖山と呼ばれ、山中に藥草多く（註二）以て攝生すべきによりかく稱呼するに至つたといふ。此山の有名となつたのは處士「明僧紹」がこの地に結茅二十餘年後が齊永明

七年その捨宅を精舎としたに始り、古誌には多くの不可思議な傳説が紹介されてゐるが、今も其宅址には白雲庵として遺存してゐる。

明僧紹に關しては梁高僧傳に見ゆるところ其歿享年ともに不明であれ、その高逸な人格が相つぐ高僧法度又江南三論宗の祖とされる僧朗これを繼ぎ梁武帝の歸依を得て益々棲霞山に於ける三論の發達を來したであらう。

舍利塔



舍利塔

首都志の記載によれば六朝以後幾變遷近世にあつては長髮賊に灰燼に歸し光緒年間の修葺が現存のものであり、寺觀偉大、嘗て清乾隆帝南巡此地に行宮を設けしことが「南巡盛典」に所載されてゐる。

舍利塔

寺中最も有名とされる物に石造塔一基がある。上江兩縣志卷三、「相傳文帝遇異尼得舍利數百顆分八十三州各種塔蔣州其一也」とあり、現塔は隋代の右文に該當すべきや、或は後世の重修なり

や、諸説あるも先學の示すところによれば、隋代の創立、南唐重修説が肯定されようとしてゐる。尙本塔は近年重修上段の位置より現在地に移轉當時九輪が補加されてゐる。塔は八角よりなり初層はやゝ黒味を帯びた大理石の一種とみるべく、二層以上はやゝ石質を異にしてゐるが塔礎以上各級の大きさは次に示す如く。(陳邦賢編棲霞新志による)

級次	長呎	闊呎	圍長(八面周)呎
一級	九・一一	一・一〇	八〇・〇二
二級	八・五六	一・〇八	八〇・〇八
三級	六・一〇	一・〇二	五四・〇八
四級	五・〇七	—	四四・〇八
五級	五・〇四	—	四二・〇八

後補の九輪を合すと約五十呎近に達すべく基部に釋迦八相の浮彫があり、其上に寶相華を線刻せる横欄を置き、上に三瓣の蓮花があり、これには毛彫りの天人或は寶相華を認めることは東大寺大佛の雕刻と一脈相通すると考へられる。初層八面には一面置きに四天王と扇形の表示をみるは舍利を寶藏する寶庫を表徴するの意ならん。其各隅の柱には夫々左記經偈を刻してゐる。

第一柱 經云凡佛造塔云々と造塔功德

第二柱 □(稜ニ似タル文字)嚴經讚佛四句偈

第三柱 提談經並金剛經四句偈

第四柱 佛讚迦葉佛塔偈

第五・六柱 (文字毀損)

第七柱 喜見菩薩禮日月燈明佛偈

第八柱 佛翹一足讚底沙來偈

文字は何れも雄勁な楷書でかゝれてゐるが、其年代に至つては後刻なりやとも考へられる。文中の文字中多くの現代使用との差異を認めることは書法の研究上からは年代考證は可能なるべきを思ふも筆者に其才能はない。

初級塔身には扇を表現し東西に文珠を他の四面には持國、增長、廣目、多聞の各四天王が彫刻されてゐるが、この一層中佛舍利を寶藏することを意味し、各佛は勇壯なる守護の任に當るものであらう。この各面に以下三名の工人名が刻されてゐるが、唯一の年代考證の重大價を持つてゐる。工人名に「匠人徐知謙」「作石王之載」「丁延規作石」の人名あり、創建時の刻人なりや否や

に關して定説なきも棲霞新志の編者陳邦賢は匠字の作風より見て三人を「舍利塔所刻の匠人」と論じてゐる。

各層の檐は三重の桶を刻し木造建築を便化したものと見られる。然し何れも斗拱を置かず直接檐を表現するのは當時の作風なりやは古便化か不詳といふの外なし。

釋迦八相彫刻

木塔の價値と重要性の大部分は八相圖にありと信ずる。たゞ悲しむべきは後代人物の首頭部を故意に毀損せる一事である。各圖は以下

西北、託胎。北、誕生。東北、出遊。東、踰城。西南、降魔。東南、成道。南、說法。

「棲霞山の史蹟」の著者小川貫弑氏は西南降魔に先だち南北に說法圖を刻むのは如何なる理由なりや、後世重修の際解體して順序を誤つたものであらうとされてゐる。

託胎は白象降臨の様を表し、正面に瓦當のならぶ宮殿あり摩耶夫人の長柄の團扇をかざす四人の侍女にかしづかれ白象に乗る釋迦が右方より光臨宮殿の表現に簾を畫き靈妙なる筆致である。

誕生、夫人は今右脇より出胎、やゝ左よりに七寶臺座に釋迦佛が端座合掌し、中空には九頭の龍が甘露水を降してゐる。

出遊、畫面右に城門を出づる態様を示し多くの従者が愛馬の近くにむらがり、其前面の路傍には合掌する僧形人、座するもの子供の手をひく老人あり、其上段には人家を表現し、牀上の病人のために藥壺を運ぶ者、其後には泣き悲しむものなど病家を一目にして表し、其左には死者をめぐつて、哀悼の表現は何れも巧妙なる描き振であるとともに各人物が何れも多分に漢學のもつ表現法を持つてゐることは八相中本圖は最も顯著であり、前者誕生圖と相似の筆法を認める。

踰城に關しては小川氏が説かれてゐる所は、北魏雲崗の作圖と異つて諸天人、或は帝釋天が追従する場面がなく印度以來の手法をばおいて支那化してゐる點である。其左方に落飾の悲しみの人々を表現し、上方の空間に釋迦の修行を彫刻してゐる。

降魔、中央の釋迦に對して劍戟をもちせまる者、或は多くの怪物龍神夜叉が四圍に刻まれてゐる。

本塔には西南降魔圖に先だち南方に說法圖の存するは順序が一般と異り、且小乗のものには降魔のないのを普通とするが、こゝには出遊に加るなとやゝ通例と差異ありとされてゐる。成道、河畔に水浴よりあがらんとする釋迦は左手で腰衣をもち右手を挙げ之に應ずる如く、天空樹間に釋迦を迎へる天女があり、其左側中央には七寶の臺座に端座する成道の釋迦を置き左に乳糜の鉢

をさゝげる牧牛女難陀のすがたにつゞく二匹の牛が描かれて右端の人間釋迦の成道への變化が巧に表現されてゐる。

說法、四人の供物をさゝげんとする人々は四天王であらう。金剛寶座にまします釋迦に供養せんとする二人、大きく傘の如く表現した多那樹一般圖と異つて本圖には主として供御圖である。

入滅、本圖は右に涅槃左に荼毘からなり前者は多くの表現とさして差なく、後者は寶棺の四圍に火焰をめぐるし群衆の悲悼の様が描かれてゐる。

以上八相圖は何れも筆者工人ともに不明のものではあるが其作風よりみて造塔年代をも併せ考ふべき江南佛教の粹とも稱すべき偉大なる佛教美術の遺存であらう。

御製明徴君碑

寺門の左側にさゝやかな堂宇があり、其内に文餘の大碑が龜座の上に巍然としてたつてゐる。

石材は「梅花石」とよばれる細緻な石質のため數字を除く以外は完存する唐碑を觸目し得る。

文は唐高宗撰、高正臣書遒勁なる書風は頗る聖教碑に類するものとされ古來法帖にも多く、碑陰は高宗の御筆「棲霞」の大文字があり、碑側には美しいリリーフが彫刻され唐以來千餘歳風雨の侵蝕することなく、明僧紹の遺徳を今もたゞへて變りなく諸人の鑑賞をほしきまゝにしてゐる。

る。

千佛巖

岩石にめぐまれた北方には雲岡、龍門の有名な佛龕のあるものに對し江南には比すべきものなきも、茲に遺存する偉業は梁武帝天監年期に創められ、爾來諸檀越の力によつて完成されたといふ。

ふ江總棲霞寺沂に

僧紹之子仲璋爲臨沂令於西峰石壁與度禪師鑄造無量壽而坐身三丈二尺五寸通座四丈並二菩薩侍高三丈三寸大同六年龕頂放光齊文惠太子、豫章文獻王、竟陵文宣王……等琢造石像梁臨川靖惠王復加瑩飾

佛龕其三尊をめぐり二百九十四造佛五百十五尊とされてゐる。今も三聖殿に彌陀三尊はましますも何れも首部は後補にして近代水泥を全面に塗布し舊態を缺くは恨甚だしきものあれど上下左右の奇巖を利用の掘鑿する規模の雄大と變化は幽寂のこの地離俗を味ふに充分であらう。

三聖殿前にある二佛は文餘、攝山志によれば兩佛は古くは舍利塔前の道引佛なりしと某書に「像貌有顧愷之筆法」とあるも上限をさる古く迄も求め難きか。

尙全山岩石に刻文多く棲霞山碑帖とよぶもの百餘種あり、事變前村民李禎祥なる者碑搨を業と

せりとさくも今求むるに難し。

六朝陵墓

寺より西七、八町鐵道に添ひ水田中雪白の石製物が點々として遺存するは六朝の墓前にある麒麟、辟邪、神道碑であり既に墓陵に關しては中央研究所より六朝陵墓調査報告書が出版されてゐる。各墓を抄記すれば

- 1 梁 新渝侯蕭映
- 2 同 安城王蕭秀
- 3 同 鄱陽王蕭恢
- 4 同 始興王蕭憺
- 5 同 否手侯蕭景

他に失名陵、墓各一あり。

各陵墓はすでに荒れはてたれど奇獸が今も遺存し、且神道碑がギリシヤ風を多分に帯び多くの碑文は滅損してゐるが、前記(5)は石質によるか明確に文字を存しことに六朝にみる「反左書」の一例として有名である。何故に當時かゝる書風が流行したかは不明であるが、既に樂浪發掘の

漆器中永平十二年銘の「反左書」があつたと信するから古代支那の一書法であつたかも知れない。以上棲霞山並に附近の六朝遺物に關し二三の紹介をしたが、附近一帯の拓本集或は文獻を擧げるならば限りなく、たゞ自己の撮影或は手拓し得た範圍に止め且陣中文獻なく棲霞山に關しては西本願寺派僧侶小川師に凡ての示教を賜つたことを記して謝意を表す。

註一、小川貫弑著（六朝の勝地千佛の名藍）棲霞山史蹟（本編は南京青年會叢書第一輯として現地版）

○常盤大定著 支那佛教史蹟の研究

○大屋徳城著 棲霞寺 鮮支順禮行

○同 南京棲霞山

○上記二文獻は未見

註二、陳方賢編 棲霞新誌 第九章 物産

戦地より趣味通信

支那古玩の偽物の問題につきましてある古玩店主が先般私に「笑話」を教へようと次の一話を申しました。（在支〇年大體會話可能となりました）

日本の兵隊さん達は誰も彼も皆硯を買つて歸る。この次に戦争があつた場合は日本の兵隊さん達は鐵砲をもたないで硯をもつて敵になげつけても戦争が出来る。

此男は日本人に偽物をしきりに賣つて、目下發財々々で此頃は妾を三人もつて結構な生活をしてゐることです。それに對して某中國人の曰く、諺に「不開張三年、開張吃三年」とあるが其通りであると（前記の男をさして）、偽物を買ふ日本人の眼識のないことを大變笑つてゐる。特に某大人の買つた〇〇硯は今評判になつてゐるが、實は××街で去年の暮刻銘のものである等、支那の人々は眞偽の判別のつかない人々に對して笑つてゐる。審美眼をもつ人々には敬服して大人とし取扱つてゐます。偽物をどしどし買つて歸ることは、何等日支親善の爲にならないものと考えます。

○
在支〇年私の貧しい眼識で陶磁ではほんとの龍泉青磁一個、定窯の破片數個、萬曆の如き極々上等ものでなく高々東照窯の物、五年前横川工博のコレクションを見た眼には支那のどこにあれ

だけのものがあつたのか事變下によいものは何處に行つたのか萬事が不可解です。會て九江に入城した時問屋の倉庫は何時の年代のもので澤山あるに驚きました。書畫亦然り、岳飛、蘇東坡も二三十圓で買へると喜んで買つて歸る人あり、日本青磁が澤山奥地迄來て幅をきかしてゐます。

○
在支〇年此間日支親善のためにしたさゝやかな行爲を多として二三有識階級とも交つてゐますが、今では婚禮によべられたり、子供が生れて三十日（彌月）の正座に据らせられてまごついたり可なり胸をひらいた話もききます。可驚ことは支那のやゝ有識階級は子女も古玩の眼のあることです。先般も郎世寧の動物畫を合點のゆかね點があるので某氏の所にもつて行くと父君不在で小姐（令嬢）がよくはわからないが此サインが駄目と思ひますの一言、鑑定の結果繪は確に郎世寧のもので無銘に後加筆。どの家庭でも古玩は注意しないとだめだと申します。そして支那の古玩賣買人は凡て「心不好者」で日本のよい人をだますのだと云つてゐます。よく話に「張之洞軼事」の一書にある「受騙骨董」の一事が出ます。あの大官でも偽の古代甕を三千金で買つたとか彼は常に清朝の大學者阮文達が焼餅の榻を古代篆籀と誤つたのだとなくさめてゐた——要するに偽物を買ふのは無識としか考へてゐない。何等日支親善の效をなすものでないと信じます。以上思ふ

まゝ書きました。何かの参考にもなれば幸であります。

x

現在中支奥地で日本人相手の古玩店が多數開張してゐます。どれを見ても九江の間屋に山積してゐた類のものばかり、凡て慾に發した買手の誤り、軍でも土産物を買ふことは充分注意されてゐます。否むしろ、買ふべからずであります。日支親善はそんなものでなく、よく中國人を理解して誤らないこと、物でなく心の問題と考へてゐます。

陣中隨想

蝸蝓が鳴いてゐた夜がいつとはなく蟋蟀の音と變化して秋の氣分となつてきました、野には血しぶきのやうな曼珠沙華が咲き秋、葛、河原撫子、われもこう等秋の草々が内地と同様咲き亂れてゐます。然し戰場はどこ迄も女性に縁のないのか〇年間女郎花は見ず桔梗は所によつて自生することもあれど一般的ならず、とにかく涼風來は汗の生活から離れる點で何よりも喜であり、風流よりも安眠の出來る時をもつ秋こそうれしけれであります。

農家はすでに第一回の稲は内地なれば三番草の頃合、見渡す限りの棉畑には白く棉が吹き出て綿くり、糸つむぎが始つてゐますが、昔の日本に於ける道具と全く同じであります、女達が手ばたを織つてゐるのを見ると、夏布とよぶ麻（但この地方の麻は内地のカラムシと呼ばれる苧麻）です、プリミチーブな手織の麻布や木棉が今も藍がめを用ひる紺屋で染められてゐることは一世紀前に歸つた感ありです、最も自分が愛著を感じるものは手染の印花布で紺地に白く螺礪のやうな感じを示す置き型染であります。模様は種々あります。用途は娘達の衣服蒲團等です、に都會地では忘れられようとしてゐます。

支那の都會地は何處も西歐かぶれがしてゐますが田舎には尙支那本來の面目が遺存してゐることを考へます。あの「花様」とよばれる切紙藝術も農村の所産で農民達が其閑期町に行商する事實、或は竹細工、これには最大なものには農作物をほす徑一文以上の平籠から小は子供の玩具迄種々のものがあります。現代支那の流行兒「林語堂」は其著に竹の文明として諸具百種をあげてゐるとか、おそらくそれ以上に及ぶことでせう、中支奥地は竹細工の多くは孟宗竹であります。

（孟宗母の墓は武昌にあり、支那ではこの竹を孟宗と呼ばず）竹細工の發達は木材不足に原因すると考へます。曾つて關野博士の論文に支那の磚の發達原因として木材不足を其の一としてあげられてゐたことも思ひ出します。内地の下手物趣味家が支那奥地の農村に入つたならば一日してトラック一臺分の雜器を求めることとせう。

支那の民家は實に屋根の曲線と塀の美觀にあると考へます。其内部には今尙窓に貝殻利用のものがあつたり、實に原始的で、吾等の住家と異なる最大ものは押入、棚のないこと、凡てが皮函と壺が物の收藏されてゐる器具で、支那民家の燒跡を見る時、少くも壺は大小とりませ三四十個をみかけること、一つの壺展を展開することでありませ。雜器にもなかなか古雅愛すべきものがあり、古丹波或は備前と一寸識別困難なものも見かけます。だが戰場では研究でも採集でもないためにたゞ眼にふれて通過するだけのこと。

在支〇年陶磁に少しの趣味ある自分はやつと唐、宋窯などの破片すらも見ることに至難を知つて、最近は雜器によつて眼福を得ようとしてゐます。それ等には形といひ、色合といひ、實に古

雅なものが多く、酒壺、烘爐、油壺、或ひは日常の飯碗にも何百年來製造方法の進展してゐないのが雜器だと考へます。御寮の偽物よりもこれにほんとの中國古來の美しさの流れが遺存してゐるではありませんまいか。手ばなをかみ、小布のつぎはぎだらけの古衣を着てゐる庶民に私は中國人のよさを求めます。

x

佛像に至つては曾て金陵の地も踏み、せめてその香でもかぎたいと思ひましたが遂にめぐまれず、頭デツカチの近代佛のみでそれも奥地に來る程、塑像が多くなり面貌も西域に發見されたスライン博士の報告にみるやうな洋人くさみが加つて参ります。おそらく南京などにはもう、六朝佛なども古玩店にも散見するかも知れませんが、或中國人の話には上海北京で仕入れて中支奥地に輸入するので本來中支には現在なしと話してゐました、たゞ西藏佛は時にやゝ古いのをみかけました。高々宋代程度であります。

需給の關係か最も見ないものは古書であります。過去數年間に未だ宋版の片葉も觸目せしことなしです。今迄の自分の手にふれたものは木活景德鎮窯業志です、それは〇〇〇で眼にふれ其日は之を開く寸暇もなく、宿營すべき地に置いて後に歸つてみると見當らず、兵隊さん達に聞い

てみると、そんな古いきたない本は塵と共に焼いてしまつたとのこと、さて／＼無理からぬこと多分康熙か乾隆の古版ではなかつたのか、それすら見る時間をもたない時もあるのが戰場であります。爾來陶磁の参考書を心がけて捜し求めますが〇年間に陶説を一冊買つたきり、それでも高



お盆の十六佛中の一つ

野版の往生要集を一冊求めました。江州八木濱西照寺了榮と奥書があり寛永八年七月とありますが、何人か源信の名著を支那にもち歸つたものと思ひます。これを買つたのが父死亡の通知を受けてまもない頃何となく佛縁不淺とうれしく讀んでゐます。

x

最近朗世寧 (Caotigilione) の繪がある碗を見

かけました。勿論偽物と思ひます。

紙のやうにうすい景德鎮の面目は存してゐます。とにかくこれだけの技術は光緒年間迄景德鎮或は他にも遺存してゐたらしく、或は今も茅屋の隅で黙々とろくろをくつてゐる工人が何處かに

あるのかもしれませんが、大康熙帝の幕下にあつて陶磁からエッチング迄支那藝術に一つのエポックをつくつた後については、より多くを知りたいのが、一つの念願であります。これ迄に眞と見るべき繪にも磁器にもゆき會はないことであります。

近頃特に興味を感じるものに班指バンシと手枕があります。すでに支那で弓を用ひなくなつて相當の年代が経過してゐますが、中國人の班指を愛することは今も可なり盛で玉、沈香等の高價なものもあり、あの一寸足らずの小器に畫材も豊富ですが文字の國だけに數字のもつ意味にも面白い風雅な文字を認めます。手枕は象牙よりも竹製或は陶磁製のものに面白いものがあると考へます。事實炎暑の際文字を書くにあたつてこれを使用すると汗が紙面につかず便利だと思ひます、これも畫、文字共に中々興味があり、年代に至つてもよほど古いものもあるらしく考へます。

古拓に至つても同様せい／＼百年も前のもあれば、珍品王右軍の唐代のものが日本の帝室御物にありとか、おそらく支那よりも日本に唐代のものなど多いのでないか、彼の清朝の大博士、楊守敬先生の日本訪書志或は留眞譜などを見ると、むしろ日本に遺存するものゝ多いのに驚いてゐる

ますから、爾來支那で古書を(現在)搜して眼福を得よう等考へるのは誤りだと自覺しました、然しこれも北京とか上海は別のこと、其邊の事情には一切通じない現況の自分の意見であります。

寸暇ある際つまらぬ碑でも手拓して見ようと、やつと、タンポを造り紙店に行つて手拓用の紙をくれといふと「拓」といふ文字「不明白」といふ、ほど／＼困つてよく／＼聞くと一般には榻タタでなければ通じないといふ、さて唐紙々々と内地で呼んでゐるが何といふ紙なのかこれも不明、何年かゝると、煮鏝紙、宣紙、江南、江西紙などもやつと識別するようになりました、ところが紙數の數へ方は内地も雜多ですが、支那ではそれ以上紙によつて枚數が異なるために結局、禪問答式に指を出す萬國信號が一番早い次第。

中國人は生花そのものゝ香を愛する國民であることを知りました。例へば白蘭花、茉莉花を姑娘達は頭や胸にかざし、蘭、菊の花とともにこれが香を茶にうつしてのむことはおそらく日本にないことでせう、ことに茉莉花を愛好することは至大、この風習は古くからあつたのでせう、楊慎丹鉛錄に「晉書都人茉莉花郎今茉莉云々」とありベルシヤ原産とか(だが臺灣にあるらしく最

近の週間期日の創作「かほれ茉莉」の内容にての花のことあり。尙や古具に「花筒」と呼ばれてゐる象牙や竹製の小具に香の高い花を入れてもつこと等中々風流味ありと思ひます。

且中國人はあの悪臭に平氣でゐながら香には鋭敏な鼻の所有者たることに驚きます。これと

壺、皿、硯等の

鑑定に音による識

別、これも銀の判

別から來たのかと

思ひます。

×

以上何日かかゝ

つて思ひつくまゝ



を書きました。要するに支那といふ國は廣大でどこ迄も不可解であり三年五年ゐて支那を解しようなどは、大きな誤りであることをやつと知つた程度であります。終りに一つ孟蘭盆會の紙藝術を御紹介いたします。いよく中秋も近づいて参りました。今年こそ中秋の月餅が十分たべられ

る様子、とかく戦地では食ひものゝことに話がゆきます。尙我等には不可解な支那芝居の財神のクマを下手な繪でおめにかけます。これが福の神様だなどどうして考へ得られませう。だが支那人の芝居すきにも驚き入る次第です、治安が回復すると早速芝居がはじまる、それとともに途上での喧嘩口論、夫婦喧嘩の増加この二つは共に治安回復のバロメーターと私は常に申してゐます。

闘 蟀 戲

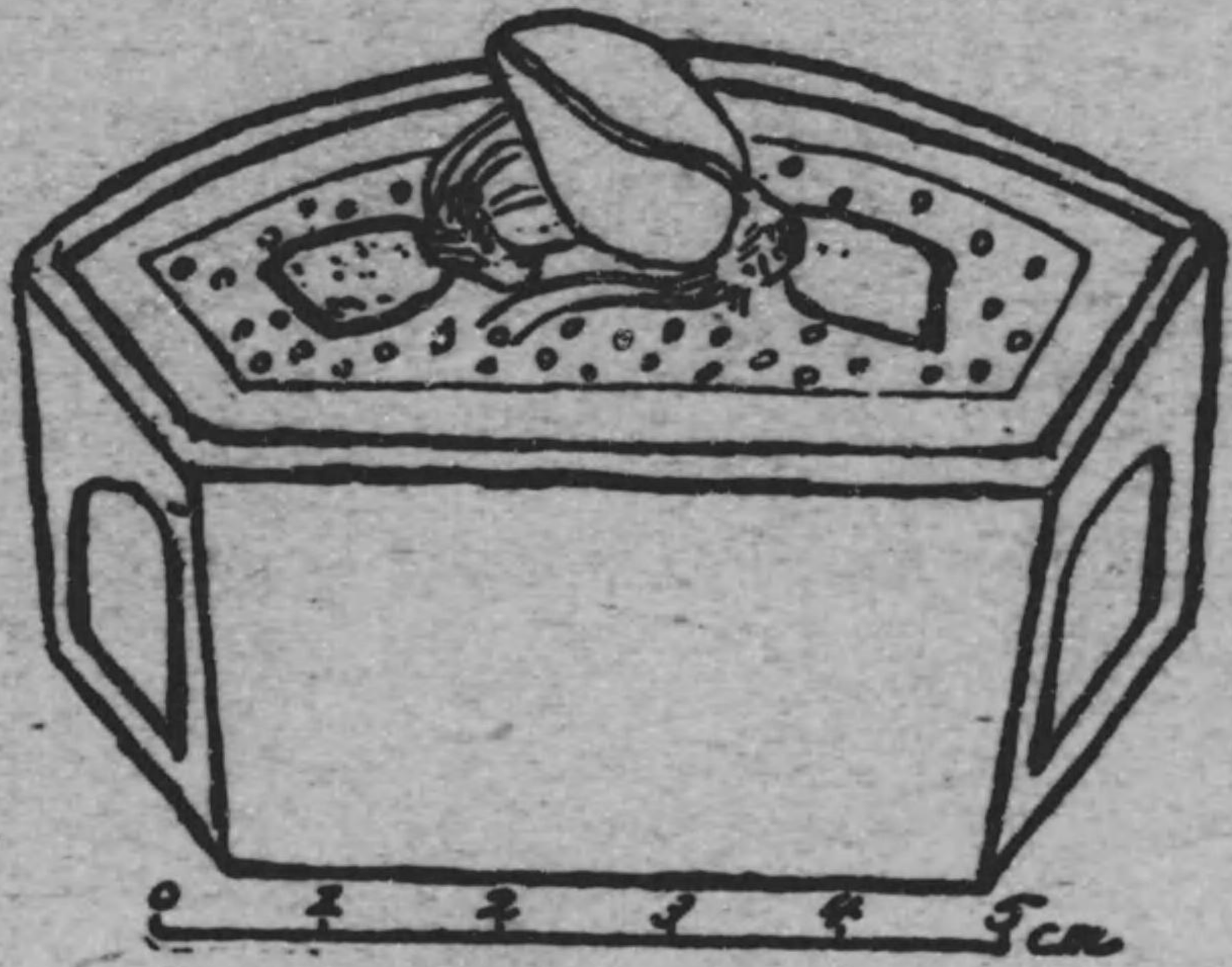
中支に霜もをみはじめました。今日は〇〇で玄圃梨をしゃぶりました。日本各地の人々に其方言を聞いてみると「けんぼなし」「てんぼなし」「けんび」等々色々あるやうであります。子供の頃裏山の落葉を踏んでしゃぶつた、内地の玄圃梨と同じ呼びをもつてゐるまゝ故郷の晩秋をしのび得ました。或は往年ブルノータフト氏の工藝展に玄圃梨材を利用した美しい色彩を思ひ出しなつかしく其樹を一めぐりしたことでした。大陸の秋は實にすみきつて中國人の「小陽春」といふ言葉がびつたりとあたつてゐると思ひます。子供の頃聞いた雁の話、天空高く何百何千の雁が「サホになりユミ」になつて飛ぶ有様は大陸に來てはじめて見るとともに一昨年十月二十七日武

漢入城の日に頭上を何列ともなく飛んだ雁の一群もすでに早くも思出となりました。さて、此秋特に興味を感じた一つ「闘蟀戯」について述べてみませう。

かね／＼其の遊びのあることは話に聞いておりましたが、如何にして行ふか不明でありました。ことに別圖に示すやうな陶磁の器があり、それを何に使用するのかを疑問と致してゐました。たま／＼一日尙志怡君の家を訪問すると、其一揃ひがあり、はじめて説明を聞いて合點がゆきましたが、蟋蟀をた／＼かはすには、大體左の器具を必要とするよしです。

- 一、蟋蟀（陶、磁製）自分のこれ迄見たものは直径十二、三センチ、深サ六、七センチの圓筒形で上にふたがあり、其間に次の二具が入れてあります。

一、過籠（上圖参照）上部に鈕があり、はめこみのふた、左側に穴あり、なかは空であります。この内に蟋蟀が住むとともに争闘を行ふ場合この間に



入れて甲盆から乙盆に運びます、其際兩方の穴を親指と人差指でつまんで運び指をはなすと蟲は出てた／＼かひます。

- 一、水碗直径三センチ位の小さら、これは蟲の食器であります。

以上三具をもつて蟲を飼ひ、且移動の際に携行するわけです。盆其他なか／＼こつた焼物があります。勿論闘蟀は古來賭錢が目的で、新生活運動以前は有産階級は一回に百、千金を賭して行つたよし、虫も強いものになるとなかなか大金をもつて賣買されるとか聞きました。

小陽春にのんびりと蟲を戦はしてゐることは中國人らしいところもちだと考へます。

本來一人が有産階級がやる場合には賭錢も多いだけ、器具にもよほどこつたものがあるやうです。自分の見た一つに陶製のものゝふたの裏に左の文が印刻されてゐました。

姑蘇陸暮南橋下塘

とあり、ふたの表には左の一文が刻されてあります。

酌酒與君々自寬 人情翻覆似波瀾。

白首相知猶按劍 朱門先達笑彈冠。一

草色全經細雨濕 花枝欲動春風寒。

闘 蟀 戲

世事浮雲何足問。

不如高臥且加餐。

辛酉年季春己未日過野鶴寄巢戲刻 陽湖畢子伯子

辛酉とあるのは形式からみて乾隆六年のものであるだらうとの話でした。この意味によると隠逸の人士によるものと見られるが、古くはさもあつたかも知れない、然し現在では一に賭錢の戯と化してゐます。鬪蟀の話で思ひ出すことは彼の有名な宋の悪宰相「半間堂」のことです。半間堂即ち賈似道については中華人名大辭典に

涉子、字師憲、少落魄爲游博、不事操行、理宗時以姉爲貴姬、累拜右丞相、軍漢陽、元兵攻鄂州、似道割地納幣請和、詭以鄂州圍解表聞、尋入朝、益崇政、權傾中外、度宗立、以太師平章國事、封魏國公、賜黃葛嶺、作半間堂、吏抱文書就第署、大小朝政、一切決於館客、日與群妄蟋蟀、元兵迫健康、宋軍屢敗云々

春秋の筆法でゆくと宋は全く、こほろぎのためにほろんだ結果ともなり、彼又こほろぎのために最後は「爲鄭虎臣所拉致」これ又あはれであります。

何時の頃からこんな遊びがはじまつたのか自分には考證力がありませんが、名畫とされてゐる半間堂鬪蟋蟀圖に見える具はやゝ現代のものと異つてゐるやうですが、おそらく日本では製作し

ない陶磁具であると思ふまゝ概要を述べてみました。

陣中花信

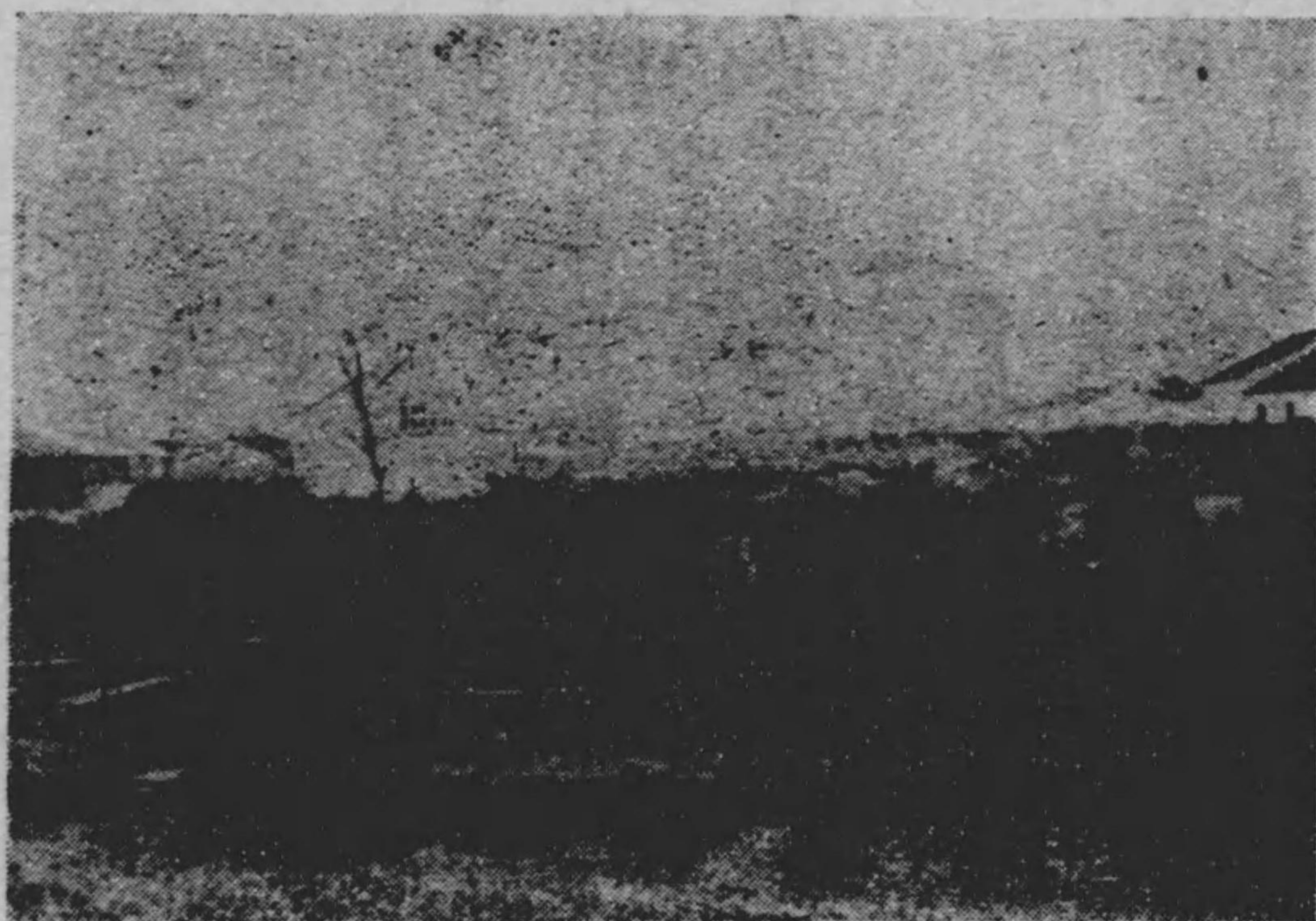
中支での幾度目かの春が参りました。花だよりを申し上げます。今年はゆくりなく染井吉野の満爛たる樹下で櫻をみる機会を得ました。傳聞する處によると、此櫻樹は事變前日本から寄贈されたものだとか、たゞ内地と異なるのは樹下に敵が掘りすてた塹壕が縦横に走り、所々に嘗て火をふいたトーチカの存在することです。然し壕の縁邊には堇花、翁草、或は名を知らぬ紫色系の野草が咲き、すぎし戦を語る藥莢の錆色と不似合な風景を表示してゐる事です。とあれ春はうれしく、寸刻にすぎてゆく大陸の春を満喫し得たことあります。

大陸の春を語る草花は、すでに一月に入ると薺の若芽を「地菜」と呼んで、霜の且につみ草をしてゐるのを見かけます。それについて豌豆の若芽が支那人の食膳にのぼることも早春を語る一つであります。尙食用の野草としては「木鶏頭」として首蓿の新芽をつみ、「はるのげし」をも、しきりにつみ草としてゐます。以上の草々は單に農村人の食用のみならず、都會地の市場にも登

場することでありませう。すでに以上の草々は備荒のための野草として、日本でも徳川期の諸文献に散見する所ではありますが、何れも美味でありますことを申上げると共に、時局の食糧に對する一策として遊戯的なつみ草からも一歩進んで野草に對する一策として遊戯的なつみ草からも一歩進んで野草に對する再認識をおすゝめしたいと考へます。

二月に入ると陰曆正月となり、梅、水仙花が登場すると共に内地でまれにしか見ない蠟梅が、支那では特に愛好され何處にもあることで、種類も數種あるらしく南浙がその本場とされてゐます。水仙とともに其香を愛し、正月の装ひには姑娘達は水仙花を頭に或は胸にかざつてゐるのも何となく早春らしい感ありです。

陽春三月ともなればほど内地と同じ野草が野邊を飾ることで、スミレ、アザミ、ゲンゲ、カタバミ、トウダイグサ、ナツナ、ギンギン、タンポポ、クローバーと呼ばれ或はオランダゲンゲの名ある苜蓿は何れ舶載か、田舎には見かけませんが、ほど内地と似た草々の外に紫色をした數種の美しい花のあることであります。だが内地の春と異つて三月下旬に、梅、桃、李、杏、梨等が咲き揃ひ、春めいたと思ふと三寒四温の文字通り四月に入つて、降霜、結氷があり、ひさめがつづいたり、激變する氣温に案外支那の草花は強い生活力を持つてゐるのに驚きます。植物、動物



園花集

總發行所廣州虎邱山冷香閣陽堂
分發行所各處飲料店及各大酒店

虎印土產

集集花乾

此類各款其質極佳專門商標
不佛請各款其質極佳專門商標
不佛請各款其質極佳專門商標
不佛請各款其質極佳專門商標

虎印土產

集集花乾(貼紙)

凡てが變化の多い氣候に訓練されて、偉大なる生活力をもつに對して吾等はあまりにもめぐまれた皇國に生育されたことを喜ばないではおられません。

内地の春に比べて陽春といふべき期間の短時日であることを遺憾とします。四月末にはすでに夏日の感あり、蚊も相當來襲するなどは内地では考へ得られない差異であります。暑氣來とともに登場して來る花、黛黛花、白蘭花、茉莉花、梔子花など白色のすがくしさを有し、且特異な芳香をもつ花々であつて、たゞ玫瑰花だけが此間にあつて白色ではありません。すでに晩春にはむしろ吾等には強烈ともいふべき香りを放つ白蘭花の散つたものを姑娘達は頭にかざしてゐますが、やゝ異つた香氣ともいひ得ませう。梔子花は内地のくちなしと同種らしく、然し支那に於て此花を愛することは九月菊十月梔子花とされてゐる程で、種類も數種あり、徽州産のものが矮生で愛用されてゐるらしく「盆玩清香動人」などと語られてゐます。

かく支那の花を數へて見ると、やゝ日本と異なる點は花と香を單に愛するといふのみでなく、もすこし實利的に香を直接身につけ香水の代用とし、或は茶水に移して味ひともに愛する特異な傾向であります。例へば菊の如きも茶に香を移して白菊茶とよばれるなど。だが生花を乾燥して香を失はない技術は日本には類例の少いものでありませう。其方法についても詳細不明ではありま

すが、康熙版花鏡に花香耐久法の一條に擴げられてゐる一法は

取梅或菊、或玫瑰、茉莉、珍珠、蘭皆摘其半開之蕊、四停茶葉一停花、以礮壘收之、內一層茶一層花、間投至滿、用紙若縲固、入鍋內以重湯煮之、取出待冷、另用紙封固裏置火上、焙極乾收用炮茶、其香可愛

尙同書には百花酒として四十餘種の酒名のほかに、梅花酒、菊花酒、玫瑰酒、桂花酒などが、示されてゐます。菊の水に縁なき自分は溥陽の江や楊子の市邊に足を嘗て止めたことはありますが、かゝる酒がありと聞くのみで味つたことなしてあります。たゞ茶のみは今宵も支那茶を喫しつつ筆を執つてゐますが、四年の歲月は花の香ある茶にすつかりしたしみが出來ました。何故に此種香茶が日本に流布しなかつたか自分の疑問とする所であります。

支那の口碑

支那に來て四年各地を踏んではきたがそれは軍人としての行動で單なる旅行者でないために支那の民俗學的に事象については留意はしたもので、それは單に外面のみで、民衆のもつ内在的な口

碑傳説には、あまりふれる機会に今日迄めぐまれてゐない、だが三國志、水滸傳以來の支那民衆のもつ傳説は限りなく、至る所史蹟と傳説に充滿してゐる。然し其多くが古詩として民間に傳承され、支那の傳承はむしろ詩の傳承であるかも知れない。

文献についても、すでに清朝期に全縣志が編輯され、多くの資料を求め得ようが、嚴密な意味に於てこれらは所謂學者の美辭麗句により綴られたもので、やはり傳承のほんとのすがたは民衆の口裏にあるとは認めるも、吾等の會話力はまだ十分聽取するだけの能力には達しない。他面民國となつて、事變前の「新生活運動」は、口碑傳説、習俗等を無意義として否定しようとする、一部の人々をすら見るに至つたことである。其一例として、左記圖書から一文を抄譯してみれば、

周郁文編、兒童史地 中品奇風異俗
叢書之一

秦縣中秋節風俗(江蘇省)

舊曆八月十五日中秋節には、江蘇秦縣の習俗として、この日には各戸鮮菓と月餅とを買ひ夕食後それらの品々を供へ、蠟燭をともし香をたき一家老若男女明月を禮拜します。諸君はこんな習俗が、古來久しく傳來する所であり、各地大同小異であることを御存じでしょう、特に秦縣の一種

變つた點は「團圓餅」といふものをつくることであり、それは中秋節の數日前糯米を粉にして、中秋の午後熱湯でこねて圓餅として、餡に芝麻(日本の胡麻)や白糖を用ひ、鍋で焼き一家がわけて喰ふのです。これによつて一年中家族がなかよく出來るといふのです、諸君こんな風俗がよいことと思ひますか、悪いことと思ひますか。

本事は各地の習俗を擧げて、末尾には何れも

這種迷信、傳道可笑不可笑哩。眞是可嘆。豈不可怪。眞是蠢極了！

などと結はれ、其卷頭言に迷信を打破し兒童をして改善すべき必要を、この課外教授によつて指導するものとされてゐる。

凡ての舊慣を打破しようとする傾向は、嘗ての日本に於ける鹿鳴館時代に比すべしで、この指導精神は、よほどの山村に迄普及してゐるが、然し現代なれば支那の民間傳承も尙採集し得ると信するも、吾等の會話力の不足のために、たゞこゝには主として、浙江方面に流布する民話を蒐集した左記の書冊から、數篇の「昔ばなし」を採譯して參考としたい。勿論渡支那以來獨學の語學を以てかゝることを企てるの大膽且つ無謀であるかも知れないが、印刷物にめぐまれない戦地ではかゝるものをも無理にも愛讀するのやむなきを了とされたい。

経緯百科叢書、王枕石編、民間故事、(民國三十年重版本)

一、狐狸のお産

ある村に姓を張とよぶ産婆さんがありました。大變上手でどんな難産もうまくやるといふ老手でした、ある晩一人の老人が張さんをたづねて参りました。

「張奥さんはお宅ですか」と門外から伺ひました。

「門外にゐられるのはどなたですか」とたづねると

「我は胡と申しますが家内が三日三夜難産でまだ子供が生まれませんので、家内が大變苦んでゐます何とかまけて来て頂けませんか」

張さんはそれを聞いて早速着服をかへて來訪の老人についてよほど遠くへ急いで参りました。

すると大きな邸宅に老人が案内して入りました、みると何だか普通の家と様子がすこし異つて、子も卓子もみな紅木(註一)で下女下男の顔が何だか衆人と變つて、不思議に思ひつゝ室内に入るとあか／＼と晝の如く灯がともり、二十歳位の衣類を着た婦人が苦んでゐましたが、聲は老人のやうにあえいでゐるのです。

張奥さんは一見してこれはこれは「討鹽生」(註二)であることを知つて早速、つまみの鹽をも

つて來ることを命じ、そして片手出してゐる子供の掌に鹽を置くと、呱(支那音グア)と一聲して生れたので、家内一同は歡ぶとともに其手術の上手をほめそやし、彼女が子供に産着をきせると、銀十兩をお禮として差出しました。産婦のいふには、

「張奥さん三朝(註三)には來て頂がなくとも結構で御座います、しかしお禮銀はもたしてやりますから」

それで彼女は銀子を頂いて産婦にお禮を述べてよろこびいそいで歸りました、第三日の朝になつて見ると机の上に紅紙(註四)の一包みがあるので、何かと開いてみると銀四兩が入れてあるので實に不思議に思ひました。

「誰も家に來ないのに此銀四兩は誰が持つて來たのか知らん、これは胡さんから届けられたのだらうか」

と色々考へみましたが見當がつかず家の者に

「あの胡といふ家はきつと狐狸のたぐひにちがひない、あのうちで三朝には來て頂かなくとも銀子は届けるとの話だつたから、この四兩はきつとあそこからの贈物だろうだが、何で紅紙に包んであるのかしらん」

彼はまちがひなくそうだと考へました以來村人は「狐狸の張さん」とよび益々有名になりました。

河南省商邱流傳

註 (一)、「紅木」紫檀に似た木、家具器具等に用ゆ。

(二)、「討鹽生」出産の時の片手が先に出て難産することの意のよし、其際は鹽を少量掌に置くと手が母体内に入るといふ、尙冬期は湯を用ひるとよいと古老は語つてゐたが都會人或は若い人に質問したが知らなつた。

(三)、「三朝出産三日目産婆が来る、七朝には名つけ三十日目」「彌月」として近親知友を招宴、私も湖北でまねかれたことがある。

(四)、「紅紙」吉事は紅吉凶共に贈る金額は今も偶數に限られてゐる。

二、蟬の由來

昔々大昔の頃には蟬といふものがゐなかつたさうです。このことに就て一つの傳説があります。昔ある村に夫婦がゐました、主人は百姓でひまがある時は他人に傭れて愉快に働きましたが、妻は實になまけ者で太陽が三丈も登つて來なければ起きてこず、炊爨もしないので常々夫はそれを責めますが、何として「江山易改本性難移」の諺の通り、どうして本性を改め得ましょう。夫は

日ごと不快に思ひ、己れの薄命を嘆息し、憂鬱な日を送らなければならぬのでした。

或は夫は田の仕事を終つて歸つてみると、妻は何處に行つたのか夕食の準備もなく、腹はペコペコにへつてゐることとて大聲でどなりますと、隣にゐた妻がのろ／＼とやつて來て

「遅了遅了」(遅し遅し)

と申すのを聞くや否や夫は怒つて木棒で妻をなぐりつけたゝめ、頭から出血間もなく死んでしまひました、其魂魄が遂に蟬となり、夏になると夜飛び出していつも

「遅了遅了」となくのだとのことで世の人々は今でも蟬はなまけものゝ妻が變じたものと語つてゐます。

浙江紹興流傳

註 蟬のなき聲にジイ／＼といふのがあるが、あの音が「遅了」と中國人に響くらしい、内地も同様夏になると子供達は竹木枝に蜘蛛の糸をまいて、蟬とりをやる風景は日本と變りありません。

三、蠶寶寶

「蠶寶寶、」と養蠶の頃にのみなく鳥が浙江省嘉興地方にあります。皆さんはこの聲の傳説を御存じですか。それは昔ある一軒の家で男は全部死に絶えて、たゞ一人女房のみが残つてゐま

したが、再婚の苦勞を思ひ後家暮しをしてゐました。

ある日思ひ切つて家財を入質するやら或は賣り拂つて其金全部で「蠶寶賣」(註一)を買、これで殖財しようと考へました、ところか不幸にも桑の葉がうんと騰貴して、もはや桑を買ふ金がなくなり、はては河にもつて行き流すより外ないしまつとなつたが、これ迄の苦心を思ふと河に捨てることも出來ず、思ひ迷つた末「撲通」(註二)自分が投水して此世におさらばしてしまつたのです。これから後はこの女性の靈魂が一種の小さい鳥になつて養蠶期になるとかなしげに「蠶寶賣、蠶寶賣」となくのです。

浙江省江陽溪流傳

註 (一)、蠶寶賣(ツアマボウボウ)蠶種の意でありまた鳥のなき聲であるが、其名を不知。

(二)、撲通(フチャン)物を水中に投じた音。

中支賞花習俗

日支提携の聲と共にあらゆる角度から中國を認識する必要があると考へるが、以下述ぶる賞花

習俗、それは適題でないかも知れないが、我々から見れば中國人のもつ特異な習俗である。この風雅な心情を日支親密度を増すにつれ、一層理解すべきであらう、古來彼等か單に花の色彩のみならず、其の生香を熱愛することは、甚しく吾人に優れることを認める、勿論日本に於ける蘭菊梅の香を愛し木犀を植栽する習俗はあるが、中國人の如くあらゆる階級があらゆる機會に香花に近づき、旅にも散歩にも携行することは、兩者の愛玩心理に根柢から差異があるのであらう。

本來日本の愛花は野外にあるのに對して、中國は家內的否むしる室内的に立脚してゐる、そこに大衆と楽しむに對し、他は個人的の差がある。日本の名勝舊蹟の梅、櫻に對し、中國に其群芳に比すべき梅櫻樹林のないこと、尙一步を進めて云ふなれば、兩者の栽植感の相違とも論じ得られやう。

五歳中支に在つて春來ることの思出は、春宵のかゞり火や、電燈にゆれる夜櫻風景のなごやかさ、恐らく事變前とても、そんな光景は絶無ではなかつたであらう、もしありとするも夜間高位高官、夫人令嬢の群集中に散策する等、夢想だに難きことである、そこに國情の差があり、花の觀賞の立脚點があるかも知れない。この事を考へることに自分は皇國に生れた幸福を思ふ。中國の大富豪邸を見るに、高塀深く外壁高く、其内に在つて、凡ての娛樂を求め、だから各人の

「個」の「家」の娯樂が生れるかと信ずる、要は暗殺毒殺の危険から遠ざかる爲の凡ては、古玩を愛し盆栽を愛し、花は單なる色彩のみならず、香を求め、然も其花たるや何れも我等にはあまりにも刺戟のきつい、或は催情味ある香花をば賞するに至るか論じたい。他面日本にない生花の香を花そのまゝに保有し、これを飲用に食用に利用する特異な技術の發達を認める。

さてその花の種類に就て、季節順に述べると、水仙、蠟梅、野薔薇、黛々、白蘭、茉莉花、梔子、玫瑰、菊、桂……

この花のうち愛も泥愛さるれものは白蘭、茉莉の二花である。この二種は共に熱帯、亞熱帯の植物である爲に、中國北部には少く、之に反して北京のライラックは中支にあつて何等の愛玩を受けてゐない。

然し一部温室的な設備で富豪が茉莉を愛玩したことが、胡孟向の同花詩に讀まれてゐるし、蠟梅、桂花等が盆栽として愛玩されてゐたことが、光緒順天府志に見えるから、温室栽培技能の發達した現在は變化したことと思ふも、詳しくは見聞しない。

その愛玩方法としては、左の四に區分し得やう。

一 盆栽、庭園樹として

二 插花、小枝を携行す

三 花のみを加工して頭髮又は胸にかざる

四 香を飲食品に利用する

香花の種類を四季に分つなれば、まづ年頭には

一、水仙花

この花は單に香のみでなく、「仙」を呼ぶ意味も多分に在るらしく、江南の正月には切花として多く町で賣られてゐるが、花に添へた葉は全部曼珠沙華である、一般に八重咲で日本にて支那水仙と呼ばれる所謂蟹芽の水仙も好まれる、特に水仙が一度に開花すると富貴の徴と喜ばれるといふ。

花のみを摘み糸或は細い針金でつより頭或は胸につける。水仙を以て年頭のものとする。

二、蠟梅

日本ではあまり多くの栽培を見ないのに對して、中支では相當目に觸れる。

三、茉莉花

去年見た茉莉花にまして此年の茉莉はより美しく見える心地がする、それは環境の變化による

ことだろうが、事實花を利用した細工が去年よりも手が込んで来たことも確かであらう。五月間になるとこの花の香は得もいひ難いものがある。「芬香可愛」と支那の書にあるが、自分はこれ迄に見知つてゐる花のうちこの花の香にすぐるものはないと思ふ。

茶に「茉莉」といふこの花を干したものを入れたのがあつたがあるがやゝ香が強きにすぎる。但それは中國人でない筆者の言葉である。

五月の夕闇せまる頃、茉莉でつくつたいろくの花房を小孩子がよび聲も高く賣りあるく、ゆきちがふと得もいひ難い香がよいよつてくる。姑娘達はそれを買つて、頭髮に或は胸にさげて歩く。おそろく現代日本にない風流味のあるものと考へる。この習俗はすでに楊慎丹鉛録の

晉書都入簪奈花即今茉莉花也

古代にこのことがあつたのであらう。

たが此花は支那の原産でなく植物學大辭典によると

李珍曰茉莉原出波斯移植於南、海今慎廣人栽蒔之、其性畏寒……綠葉團尖初夏開小白花

闇夜たゞよこの清香は何にたとふべくもなく、ゆかしさをもつてゐる。

日本人のもつてゐない趣味に茶に香花を加へること例へは茉莉茶或は蘭の香を茶にうつす等勿

論日本にも蘭花の鹽漬を白湯にのむ風流はあるが、やゝ趣をことにしてゐる。

尙竹或は象牙筒に香花を入れて愛用することはおそらく現在日本にない趣味だと思ふ。ことに竹象牙の加工がすばらしく美術的であることも生花の香を愛する趣味と合致してゐる。其昔日本で花の香をとる「ランビキ」なども多分支那から渡來したものだろう。

香水にましてゆかしい生色の香、そこには原始かも知れないすばらしい面白味が存在する。

茉莉花 *Jasminum sambac Solaus.*

木犀科、古來諸書に散見する一の香る花であり臺灣では「木梨花」佛典には未利或は鬘華と呼ばれ原産地は印度ヘルシヤ方面らしい、古く支那に輸入された一植物で「洛陽名園記」等にも散見するも、廣東、福建地域には各地に自然に等しく存在するとき、福州にあつては事變前薫茶用として年産的二百萬斤に達せりと聞く、たがこの強烈な薫茶は吾々にはあまりにも香がきつく好むに至らなう。

たが夏の暗夜白蘭花或は茉莉花のかそけく香ふのは得もいひ難き風情を感じないでゐられない花は五月末頃より咲き十月終頃迄數回開花しこの花を細い針金で、總狀に或は毛狀につどり姑娘達は胸に頭に飾つてゐる、或は手籠にこの花房の數十を入れて街をよび賣り歩く小孩子達とすれ

ちがつた時、思はず鼻をうつ香に幾度かふり返つてみることに日本にない情景で、夏の夜の楽しみ思出である。

四、白蘭花 *Michelia champaca*, Lina

木蘭科、葉幹ともに「コブシ」其まゝであるが花は至つて小さく花径大は一吋五六分、葉は長さ二三寸、幅一寸餘の程度の楕圓形をなしてゐる、幸として中國南方廣東廣西或は雲南に産すといふ特に江南蘇州、南京等にあつては温室栽培により、嘗て二月に少女が蘇州虎丘で花を二輪日本金十錢で賣つてゐたのを見たが南京中華門外花神廟は此花を栽培するを専業とするよし。

五、玫瑰花 *Rosa rugosa*, Jhumb

薔薇科、木、花ともばらに似てゐる、變種として紅、紫、白重瓣白色のものあるよし中國樹木分類學に示されてゐるが、筆者の見たものは紫色のもので鉢植として販賣されてゐる、高さ二三尺にすぎなかつた。然し六尺位には達し花期は大月乃至八月特に中國人は其香を愛し花を乾し茶に混入して飲料とし生花を胸或は頭髮に姑娘達はつけて愛玩すること他の花々と變りなく尙之が實は六、七分位の徑に達し、藥用とし或は汁をしぼつて加工した玫瑰膏とよぶ一種食料品を製するよし、或之より醸造すともあり、文献として群芳譜、花鏡等に所載されてゐる。食品として試食

したものに玫瑰チャムかあるが、たゞかすかに其香がするに止る程度で美味とも思はなかつた。

前記中國樹木分類學には日本、高麗に産すとあるも日本産の有無は明確でないと聞く且つ一般にこれをハマナスと譯されてゐるが事實と相違するらしい。

六、黛々花

學名に關しては未詳であるが柑橘の後世亞屬の一であるらしく多分結實したものは「香圓」とよばれてゐる橙の一種で果實もほゞ橙と似てゐる。

五月上旬に開花一朵に數十の白色の花を開き其香もほゞ橙の花に等しいが、より一層強烈であり多花である。中國人は之を鉢に栽培して其香を愛するが吾々にはやり強きにすぎる感あり、且この花を乾して黛々花茶として茶に混入して用ひる、その果實は酸味多く生食は不可能であるが、戰場酢のないまゝこれを酢に代用して、湯豆腐とした味と香は忘れ得ない一の思出であつた。

x

南畫をみた眼には支那では至る所に四君子などの花が愛されてゐると考へるであらう。有名な芥子園畫傳の如き實に四君子帳といつてもよい程であり、陶淵明の愛菊の故事等も多分に支那に於ける菊花の普及を考へさせられてゐたが、日本とは別個な状態を以てのぞまなければならぬ

ことを知つた。菊を作るなどは實に有産階級の閑事であつて日本の如く農家の門邊に小菊が亂れ咲くなどいふ風景は絶対といつてよい程あり得ないことである。

其他畑の隅に日本なれば草花が植へられてゐるが何處でも同じであり、塙根にはつる草花がのぼつてゐるが、それもたまにみるのは扁豆（隱元豆）位が關の山で、おそらく支那の何處でも誰もが知つてゐるのは桃花位のものであらう。蘇東坡の名句、「桃花流水鱖魚肥」も實感から來てゐると思ふ、桃と魚のむすばれる所や風流と食感が交叉してゐるらしい。

野邊に咲く花、門邊にたま／＼つくられてゐる花の何れをとつて其花の名を／＼づねてもまづ百人が百人といつてよい程その名を知らないのに驚く、彼等は赤黄紅といふ程度の識別で朝顔もつじも刺叭花でかたづけてしまふ。夏の日に多くみかけた夾竹桃、百日紅（さるすべり）等よほどの村夫子然たる連中にたづねても凡てが不明であつた。

皇軍のゐる地域でやゝ久しく駐留すると、早速罫や壺のかけにも花を植ゑて破れ窓に置いてゐる。よく／＼日本人は花がすきだと思ふ。ことに最も大きな差のあるのは船であつた。長江の岸邊に内地の小形な船が澤山浮んでゐる場合、おそらく日本の船で鉢植を置かない船は絶無といつてよからう。だのに支那のジャンクに鉢植を置いてゐるのは千中一にも當らないことを知つた。

が、そこに民俗の相違のあることは勿論だが、彼等には實に毎日の不安、明日を知らない生活には花でもなく又船に犬猫をよく飼つてゐる日本風に比して、そんな安逸を求めることは出来ないのであらう。よいかた日本としてみ／＼思ふことだ。

○
五年以前の白鷺城下を出發する日父は老體をおして見送つてくれた、三十三年以前長兄が出征の日も丁度其頃で、聯隊の營門附近の蓮花が咲いてゐた雨のそぼふる日だつたことがおほろげに記憶に残つてゐる。父は多くを語らなかつた、私は何となく、自己の戦死かはた父の老衰か何れかによつて再會を期し難いと心ひそかに思つた。奉天會戦に戦死した長兄は今やすらか靖國の神社に護國の神として鎮座し、末弟の自分も今又明日を知らぬ大陸に、長兄のもとに何時かはゆくべきを覺悟しつゝ、三年の間不思議と神佛の加護にや御奉公の日を送つたが、昭和十五年四月二十八日、父は何の不安もなく大往生をとけたと戦地に聞いた自分は、行年八十有二の生涯に對し、子としては長命としも考へず、念頭には今も尙生ける父をしのびつゝ、過去三年の父の尺牘をくり返しくり返し讀んでゐる。

思出のまゝに父が尺牘中に記した雜俳などを書きとめてみる。

昭和十三年十二月十日 戦場を思ひ廻してすべもまた

寝られぬまゝに月落ちにけり

同 同 二十二日 甲斐なしや此非常時に冬籠り

鬼神も哭や枯野のしやりころべ

同 十四年 一月五日 繪もしかじ初日に匂ふ竹生島

同 七月卅日、合歡の葉の睡り靜に日の盛り

同 五月七日 炭五俵また手に入らず冬となる

同 二十八日 時なれや半搗米の餅黒き

同 十五年一月十六日 戦争によせて賀状を廢しきけり

同 二月十八日 祝紀元二千六百年

とろくくと萬世つきぬ清水哉

故郷の夢前川のほとりにくる夏ごとに咲いた可愛い合歡木の花、うす紫に咲く美しさは父にも限りなくなつかしい植物の一つであつたらう、今中支奥地で大陸に來て三度目の合歡木の花をみつゝ五月晴れの野に内地と變りない花をなつかしむと共に追憶の父を胸にあがいてゐる。

昭和十五年五月月明の夜蟲の音を聞きつゝ

爆音をきゝ合歡の葉かけに小休止

鐵兜に音なく合歡の花ちりぬ

中支こども習俗

日支事變の當初以來、皇軍勇士が支那の子供達を愛し、或は救助した話、又は子供等と遊ぶ場面の寫眞を限りなく觸目したが、おそらく中國人の驚くが如く、日本人は眞に子供を愛する國民だと、在支幾年間感じ來つたことである。ある中國人の避難談に、「難路幾日、まづ子供をすて妻をすて、最後迄で手をとつてゆくのは年老いた兩親である」と、中國の孝道未だ地に陥ちずと結ばれてゐた。勿論支那は孝道の國であり、家族、社會、宗教乃至政治的生活にも、古來其根據は「孝道」であつたことは、支那歴代の天子が「以孝治天下」を第一として、各帝の編註書「孝經」が如何に多いか、且僻村に至る迄孝道の旌牌の現存することを、こゝに日本と異なる觀念があり、おそらく日本なれば、最後の場合「子を捨る」よりも、一家が生死をともしにするであらうと信ず

る。「捨兒」といふ文字、或は其事實も、不幸日本にも徳川期にはあつたが、現代幾何の事實ありや、之に反して今も子を捨て子を賣る、この事は今も道傍に「柴結」の頭をみる(註一)、賣るのは己の子かはた買入れの子なりやは多く不明であるが、勿論戦争といふ事實の前には、野に子をすてる餘儀なきに至るかも知れない事は、皇國に生れた吾々の幸に實驗し得ない悲しみであるが實際に硝煙裏に「捨兒」の泣く哀調は、身にしむものが多い。嘗て田家鎮要塞攻略戦當時、路傍に生後半歳もたない子供がすてゝある、朝そこを通過し、夕やみせまる頃あまりのいたまじさが終日去らず、何とか救助の方策もと再び訪ねた時には、あの火のつくやうな泣き聲もすでに消えさつてゐた。しみ／＼支那の子供の不幸を思はないではゐられなかつた。

要は支那の幼兒に對する社會、宗教感の吾々と異なるために、今も尙支那の子供達はあまりにも不幸な社會にゐることを悲しむ、他面經濟問題とも結びつゝの結果とも論じ得よう、彼の映畫「大地」に見る社會・家庭が今に明かに存する支那である、打ち續く洪水・土匪の横行、蝗害等等一瞬にして村鎮を荒蕪たる廢墟と化し、幾十個村草原と變じてゐる有様は、幼兒を捨て幼童を賣る原因を一面つくることも事實である。

さあれ福祿壽とともに「多子」を念願する思想は吾等に優れてゐると考へられる、まづ結婚出

産に關する多くの俗信、或は多神凡てが道教の支配する國である、假に觸目するこれらの神々を舉示すれば、

娘々廟、全支此廟ほど分布の多いのは財神と共に如何なる山村にも存在すること、特に日本に知られてゐるのは滿洲國大石橋の娘々廟であらう、三月三日祭禮の日には遠近の者が集り且つ田舎では當日農具其他日用品の「市」がたつ、ためにより殷盛を極めるが、子女は良縁を求め子を求め、幼兒の成育を念願する、要は此神は女子一切の念願を支配する女神であつて廟宇には多子の人形が祭られてゐて、子を慾求する者は其人形を借りて歸る習俗がある、或は自分の觸目した湖北漢陽の廟では女神の臺座の下に穴があり、手を入れると赤青の布片が納めてある。妊婦は祈願して手を入れ赤布を得れば「男」、青布は「女」と判定する。安徽省の浦鎮東門娘々祭では紅白の布で特に作つた衣服を着て、「リントン」とよぶ鈴をもち神前に祈願するとともに、子供等は足くびに鈴を結んでゐる有様は、日本の埴輪に「脚結」があること、我上代に於ける鈴鏡手鈴などと通するものがあり、神前に鈴の現代吊されてゐる日本に比して各人が鈴をもつて参拜する形式、これが古態でないかとも考へる。其他天后聖母、臨水夫人、觀音、送子觀音等々晋大梁于寶著とよぶ搜神記の如き俗書にはいと神神しげにこれら神々の考證が掲げられてゐる。其他各

種の神が子をさづける神となり、二十四孝で有名なるとともに最近「木蘭從軍」の映畫で知られる木蘭廟の一湖北黃坡にある（其出生地とされる？）堂宇の如きも亦「投兒」を祈願するものゝ多い事實をみたが、昨年の日支提携上の一好事とされた名古屋伊藤氏より南京に寄贈された一木三丈餘尺の大観音は、善男善女ことに妙齡の姑娘達が門前に市をなした有様、手頃の娘が観音を信仰する情勢に驚くべきものがある。そもくかく「多子」を念願する結婚は「血統を継ぎ祖先の祭祀を行ふ」ため、妻は父母のため、祖先の爲めであり、儒教にあつては子無きは最不祥事とされ、凡て四十歳に至つて子なき際は、妻をもつ事を公然許され、これを一に繼配とよんでゐる、一妾三年にして子なき際は二、三妾を設け、此の財力なきものは所謂「典妻」、即ち人妻を一時借用する等、祖先を祭るためには妻を借り子を設くる矛盾も意としない結果を示してゐる。

娘々祭参拜記

信仰は何よりも大きな心の結ばれたと思ふまゝ何時も支那神佛に對する敬意を忘れないでゐるが今日（十六年四月二十八日舊三月二十四日）も有名な○○東門城外の娘々祭にゆくりなくも中

國人に混じ、なごやかな参拜をなし得た。こゝ○○は田舎の小さな町ではあるが農産物の集散地として且つ○○線の一驛として知られてゐる。

中支各地の娘々廟をみるにほとゞ一地區に一字の娘々廟がある南京には南朝四百八十寺の一として知られてゐる鷄鳴寺に大きな娘々廟殿があり、其他の地域では漢陽、歸元寺の廟も大であつて武漢地區の崇敬廟の一つで、尙武漢攻略戰當時、九江下流の右岸地區の斷崖に棧道風な道路を通じて江岸につきでて海圖にも示されてゐる娘々廟は、其頃尙盛に敵が其地區から砲撃し附近に砲臺を設けるなど、名にふさわしからぬ記憶地點である。

滿洲國或は北京地區の有名な娘々祭は三月一日から五日とされ、特に三月三日は中の日で最賑の日と聞くが、中支の一部地區は三月二十八日を以て祭り日とされてゐる。中支の此頃はほとゞ春も終りに近く、楊柳はすつかり若芽となり、江岸一帶の廣漠たる芦原はすでに腰間以上に芦の若芽がのび、やゞ小高い地域には紫雲英或は内地のテツセンによく似た蔓草が美しく咲き、むくつけたあざみも尖頭に花をかざしてゐる。この日自分の参拜した廟は東門外の小山の上にあつて、城内の韓信を祭る臺上の建物と二つはこの田舎町を標識するかの如き存在感をあらしめる。

此日この近郷は娘々参拜のために遠きは一泊がけで集るといふ、街道上には参詣者が往復して

時ならぬ雑踏を來し、路傍には各種の櫛（露店）が店を開いてゐる。まづ街はづれで眼につくのは柳の木蔭に茶を賣つてゐる、土ぼこりのする路傍に大きき茶碗に茶をついで傍らに雜菓子置き、數人が集つて雑談してゐるのはお互に面識のある者が今日祭でゆくりなく會つたのだらう、其隣には日本でみない葶藶とよばれる草根丁度グラヂオラスの根と考へて可なるもの、これの皮を取つて竹串にさしたものの、或は青い大根（色彩が特に一般大根より青色、天津附近産とか）又は赤大根、それを生のまゝかちつてゐる、饅頭焼餅の店もある、何れも繁昌してゐる。

すでに午後二時過といふ時間に澤山な人々が歸つて來る。手に色々な玩具をもつ子供づれの兩親、何を祈願して來たのかにこやかな姑娘、農具を買つてかついで來る百姓、藝人が其内にも混じてゐる、背に太鼓などをせをつてゐてそれと知れる、もし其男に「生意好麼」（景氣はどうですか）とたづねたら、多分「生意好」と答へるだる等、獨り合點して群集にまじつて街に入つてゆくと、所々に支那巡警がこはれた鐵砲など持つて警戒に當り、商家も軒店も日用品を陳列して客をよんでゐる、商品を列挙してみると。

農具、竹製品が多く特に、篇子とよばれる大形のあさい籠を多く見かける。

楸子とよばれる麥秋用の木製スコップの如きものは特に此日に目立つ賣品である、日本の簀と

全く同じ草で作つたもの、山陰地方ののに、草製とほど等しいのもなつかしい。

野菜類、季節もの竹の子（徑一寸に足らぬ）に、いんにくの花徑、赤大根など。

布類、最もほどをきかしてゐるものは人絹で、支那一般の衣服の竹布は之につぐ、（竹布の稱呼は其色に起因するらしい）、漢口地方の田舎に必ずあつた印花布が觸目出來なかつたのはさみし。

食料品、特に此日色彩の變つたものを見ず、路傍の立ぐひの雜品を多く見たのと、やはり麵類が第一位をしめてゐる。

何處の縁日も同じだが、ぞき眼鏡屋が數軒店を出して繁昌してゐるのも面白く、其雑踏をやゝ離れた主要道路上に臙軍の歩哨が支那巡警とならんで勤務してくれてゐたが、土ぼこりで白くなつてゐるのは思はず御苦勞と誰しもいふであらう。然し日本人は自分と同行軍人以外には往復ともに見かけなかつた。

其群集から少し離れて數十段の石磴を登ると赤い壁に大きく「南無阿彌陀佛」と墨書した廟に達する、道傍には何時も變らずセブラの乞食がお定まりの

善人們呀、做々好事罷

娘々祭參拜記

其口謂は實に日本乞食と何等變らない、不愉快ではあるが他面之も縁日の添景かも知れんなど勝手にきめて、群集とともに石階を登ると門前に線香をもやす場所がある、一坪位の小山が線香の灰で出来てゐる、其前に浅い籠を置き賽銭がなげてある。附近に番人もゐないが、乞食も子供も手を出さない、こゝに信仰の力を認める。

門内に一步入ると正面に女形の神様がましまして香煙縷々といふ通り煙が充滿してゐる。日本の何々講ともいふのだろう、特別の服装をした連中が其前に集つてゐる。

賽者は其服装を二別することが出来る、一は白衣に眞紅のスポンをはき頭にサンタークロス
の如き帽子をかむつた者と一般服装者である、聞くところに依ると前者は嘗て一度娘々神にお蔭
げを蒙つた者がお禮に参るよし、尙参拜者は手に鈴鑓とよぶ（長さ二尺餘青赤黄の糸糸でまたも
の上に上中下三個所に小さな鈴をつけたもの）を手にもち、又は馬鞭とよぶ同様鈴のつかないもの
を手にして参拜する。神前では勿論叩頭の禮を行ひ金錢を賽することは日本と變りない。

本尊は神仙とよばれ女體の文餘の坐像で、他の娘々廟では澤山の子供が附近に配されてゐたが、
こゝではそれを見なかつた。

此日念願する所は子供の病氣治癒から子供を望むこと、或は配偶を求めると子安地藏であり

縁結びの神と申すべきであらう、特に子供と姑娘の参拜者が多いまゝ、それを目的とした色々な
玩具の出店がみられる、セルロイド、ブリキ製等現代的なものは勿論、いともプリミチブな泥
人形も此日なれば求められる。又姑娘達のために色々な刺繡材料の出店がある、刺繡のため花樣
子とよばれる紙型の店には姑娘が群衆して求めてゐる、何れをみてもにこやかにお祭りをたのし
んでゐることは内地の村人達と變りなく、夫々晴着をつけてゐるらしいが、自分達の眼にはさし
て美服とも考へ得ない、たゞ新生活運動以來特にめだつことは姑娘達は何れも斷髪であること、
ただ一二人おさげにして赤いひもでくゝつたのを見たが、中年以上の女はやはり昔のまゝ後頭部
にわけをつかねて、ヒスイのかんざしをさして、黒布の日本でやる姉さんかむりの如くしてゐる、
特に耕田の婦女は必ず頭を手拭の如き黒布にまいてゐることは内地と變りない。

尙かねて支那習俗に子供の足くびに悪魔よけに鈴をつけることは、文献などでみかけてゐたが、
此日はじめて一寸餘りの鈴を足くびにつけて歩いてゐる幼童をみかけた、嘗て埴輪の足に鈴をつ
けた寫真とみたと記憶する、また舞妓或は子女のはくコッポリ下駄に鈴をつけてゐるが、こんな
習俗もやはり兩者の間に何等かのつながりがあるのだらう。

此一日ほんとに村人に歸つた氣で楽しむことが出来た。たゞ言葉が充分通じないまゝ詳細に究

明出来なかつたが、娘々祭見聞記と題して一のメモとしたにすぎない。この祭をみて感ずることは陽春來とともに近郷の村人が集つての和樂であるとともに、市がたつことであり、老若男女のつどひであつて、日本の秋祭りに比すべきであらう。何故か支那には秋の祭りがすくなく、春には祭が多い、これは又稿を改めて書くことにする。

横 槩 餘 稿

叩 頭

一般支那の人々が會つた際の禮式は長袖に手を入れて上下に動かす禮の様式、それはすでに古態に屬してゐてあまり見かけない、途上で會つた場合など日本と同様頭をさげることが多くことに軍隊、警察凡て今では舉手の禮であり、又洋式の手をにぎることも多く行はれてゐる、勿論之は都會地域の話であるが、今も昔も變らないのは「叩頭」の禮であらう。

何といつても正月はよほど古式を遺存してゐる、昭和十五年の正月（舊曆）に某知友の中國人の家庭にまねかれた際、來訪客が其家の寶貝（坊ちゃん）に押歲錢（お年玉）をやつてゐるのを見ると子供は床上に土下座して頭を地につけて禮をするのに自分は實に驚いたが、何處の家でも上長が正月に來訪した場合には子供にお年玉を必ずやる習慣があり、其際は叩頭の禮をするのだと聞かされてみると、驚くに足らないわけを今更知るに及んだ。

それから何ヶ月か後に至つて自分の隊で使用してゐた苦力が、夕方作業を終つて船から岸に上陸するに當つて、まだ船が着いてゐないの飛びあがらうとして墜落、揚子江に落ちて其まゝ沈んでしまつた。(死體は幸に三日目にやゝ下流であがつたが) 其際彼自身の過失といへ女房子供母親があり、其日の生活に困難してゐると聞いて、隊から少額ながら香料を贈つたのに對して女房子供が謝禮に来て、二人が地上に座して泣きながら叩頭されたのには何んだかすまない氣がした。あまり可愛いさうなので、十二三歳の女の兒にあり合せの菓子をやると又々叩頭で益々恐縮々々をした。後になつて初めてそれが叩頭と知つた事は漢口に入城した十月二十七日朝雨中某地點を通ると歩哨の前に一人の中國人が泣いてゐるので、其理由をきくと中國人通行禁止區のこゝを通してほしいといふ意だが、如何にたのまれても軍律を破ることは出来ないで、歩哨も困つてゐること、お互に言葉が通じない、そこへ丁度通りあはせたわけである。

泣いてゐた中國人は自分の顔を見ると早口にしきりに其意味を語るらしい、だが當時支那語は凡てが唐人のねことで不明白の頃とて、手まねでだめだといふが彼は聞かない、遂には雨中座して「叩頭々々」全く自分もこれにはよほり切つたが、入城したばかりでそんなことに取合つてゐられない、あとはどうなつたか。

さて、あれが「叩頭」だつたのかと後になつて思ふと誠にすまない氣がする、それとともに叩頭を受けた際の感じは何だかあまりにも相手が氣の毒でむしろ不愉快である。

そこに大きな習俗の開きがあることは否めない事實であらう。

壺

支那家屋の焼あと見た時、實に不思議に感じた事は各種、各態、大小雑多の壺が多くあることで、當初自分はこは壺販賣の店かと考へたが、彼等は實に壺に終始してゐることである、すでに漢唐代から支那の壺は美術的に或は工藝的に其價值は認められてゐるが、上は三彩の壺から、下は雜器の壺迄形態を採録してみるなれば何百何千種にも及ぶだらう、否そんな史的考察を除外して考現學的に見ても亦然りといひ得よう。

その用途によつて、佛具、穀物貯藏、貨幣入、食物入、飼魚用、便器等あらゆるものに使用されてゐる。農家の家根裏などには大きな壺に薪迄貯藏されてゐる、水がめは大きく高さ五六尺にも及ぶものがあり、小は農家の種物入、油入は拳大のものあり、高尚なものに至つて花器としての壺は青磁あり染付あり、雜器に至つては平手であつて破れる全く日本の古代にあつた彌生

式土器に似たものすらある。

日本の備前焼、丹波焼が唐、韓土の影響否其本質を彼にもつてゐることは、今も田舎にそれらと類別し得ない形態と色彩をもつてゐることに驚かされた。

何故にかくも壺が彼等の生活に多くの關係をもつてゐるか、それは一に木材の不足に原因すると思ふ、板などといふものは實に貴重品にも相當する。木材不足の地域では箱をつくることはまづ高價なものを求める結論に達する、これに代るに壺、といふ歸納を肯定し得よう、且つ支那には至る所坭土が存在する、安物の壺を焼く等は土を選ばまでもなく、何處でも求め得られる。

尙今次事變に皇軍が整地の必要上表土を動かした際各地で土中から壺よく發見した話を聞いてゐる、其壺中から銀貨がどん／＼出て來た話、嘗て自分が宿舍としてゐた九江の家で三年後に聞いた話だが、銀貨が何百圓とか後に入つた部隊が掘り出したとか、自分は一ヶ月餘り銀貨の上に乗てゐたらしい、かく壺は土中にうづめて隠すにも至便であらう。

(附記 銀貨發掘の場合皇軍は之を私有としない)

七 夕

七月七日を七夕と呼ぶことはやはりこの地でも通ずるが一般に乞巧、或は開天門と呼ばれる其故事は牽牛、織女の哀話であること、本質が支那であるだけに日本と同様である。

此夜瓜や其他の果物を供へて星を祭る、俗に乞巧會とか七巧とよぶ、此夜婦女子は鳳仙花の花汁で爪を染め月下に針を通して縫織の上達を祈り、或は清水を碗に満して終夜露天に置いて天明をまつて一本の花針を浮べて影の細太によつて自己の性格判斷と縫織の向上を祈る。

中 元

七月十五日を中元或は中元節と呼び、佛家では鬼節、道家では地官赦罪の辰といふ、中元とは實際には七月一日から十五日で、朔日には閻王は陰間(又は鬼間)の鬼門を解放する、亡者の自由外出を許すとされ、死後三年に満たない新鬼は朔日より十日迄、三年以上は十五日迄と限られる、各家では祭壇を設け香をたき佛を迎へ、爆竹をならし紙錢や元寶を燃やし跪拜する。

中元に佛家、寺院では盂蘭盆會を行ふこと日本に同じ其意も亦變らない、又中元の行事に「放路燈」といふ行事がある、郊外に出て草原や路傍で紙錢を燃やしたり紅紙の清油燈を焼く、尙「放蓮燈」といふのは碼頭の船乗りが蓮燈や紙で作つた佛像を焼いたりする、これは日本同様、

川施餓鬼に外ならない。

手ばな

何も珍らしくこれを一題目とすべきでないかも知れない、日本にも其事實がある。兵庫縣下の民謡にも「藁で〇〇ふく、手ばなかむ」など甚だ原始態の民謡が記録にも残つてゐる。

だが日本のそれはおそらく上流階級者にはなかつたことと思ふが、支那では一般的な風習である。勿論最近都市に住む文化人達にはすでに此風習はなくなつてゐるといつてもよからう、だが私は此習風をある一部の人々の如く嫌悪してゐないことをこゝに述べたいのである。うすよこれたハンカチをポケットから出して用を辨ずるのと比較して百尺竿頭一步を進めてゐるとは考へられない、たゞ歐米をまねるといふのみでうすよこれたハンカチから來る感とはあまり差がない。

他面、此習風をもつ人々は本來の中國人で素朴をもつ人々とも考へ得られる、歐米化した中國人には本來の其よさを失つてたゞ單に形而上のみの弊風のみ學んでゐるとも斷言したい、勿論私は此弊風を讚美はしないが、たゞこの一事をもつて凡てを批判しようとする誤りを是正したい。

一言堂

これを何と解釋するか、おそらく日本では多分一言居士と關連するかに思はれるだらう、支那の商店の正面に大は一坪位から、小は三四角の金文字の「一言堂」と筆ぶとに彫刻された扁額を多く見かける、其意は日本の「まからんや」といふ意味で、或は「不二價」とも書かれることがある。

中支で一番多く觸目したのは湖北省武穴鎮の町で、各戸といつてよい程ではじめは何のための額か、兵隊さん達はこの町は皆同じ屋號らしいと一人はいひ、他はそんな馬鹿なことがあるものかこれはまじないだとも話してゐたが、要は一言にして賣買するかけねなしといふのはあるが、さてものを買ふ段になると何處にも一言堂でなく十言堂であり百言堂であることに驚く、謂はゞ一種の店頭のコレクションであり世間並の文句にすぎない。

家と塀

支那の家と塀、むしろ塀と家と語つた方がよいかも知れない、高い塀をめぐらした家は外觀は

屋根と塀の上部の裝飾美である、天空に高く色瓦でデコレートされた有様は日本には見られない美感で、遠望した支那の町が如何に美しく一步足を踏み入れる狭い道路にみなぎる悪臭にウンザリする、ほんとに支那の建築家は天空に對する美の特異感念をもつてゐるのだらう。

ことに土豪の家など三四丈もの高塀でぐるりとかこまれて、屋内に入るといくつとも知れない門戸があり、多くの番人がゐて、迷ひこんだ最後中々もとの場所に歸つて來られないものすらある。何れも家も入口は曲折してゐて直接道路から内部を窺ふことが出來ない組織になつてゐる、但商店は別個の問題であるが、住宅は奥まつた位置にある、都内では日本なれば露路といふやうな場所が里とか村と呼ばれて、最も富有階級が居住して露路の入口には大きな門戸があり、夜は早く閉してしまふ、そして必ず門番がそこにかんばつてゐて、一々通行人をジロ／＼と點檢してゐる、そんな場所の中をあたり「泰山石當」と石に刻した碑がはめこまれてゐた、門戸に入つた反対側に蝙蝠五つでかこまれた「福」の字が塀に大きくかゝれてゐる、何れも慮よけのためで蝙蝠は吉祥とされる唯一のものである。

家の入つた所は客員で所謂大廣間に相當するもので、かべには吉祥文字の聯がかゝつてゐて、正面には家祖がまつられ、此室から左右、二階の各人の部屋に通ずる。

最も日本と異なるのは押入、戸棚、吊棚のないことである、支那家庭の各室をみると女性の室には一隅に「皮箱」が數個つまかさねてある、所謂日本でいふ支那カバンであるが、これに衣裳類がつめられてゐる、古來戦亂々々におのゝかされてる彼等は、平素實にまとまりよく物を取りまとめ一朝事ある時はこの皮箱に物を收めて運搬する、押入、棚のないことはやはり物を箱に收めておくために陳列的な物の置き方をしない爲だらう、又他面木材の不足は自然的に家の造作を制限するに至つたとも考へる、且つ階段の如きも幅のせまい奥行のない踏込板が使用され、急傾斜のため内地から來たなれない兵隊は採光の悪い階段からよく墜落の危険がある。

工學博士關野貞氏は其著「支那の建築と藝術」に瓦や磚の發達は木材の不足と之に反して至る所に良質の窯業用土のあることに依ると説かれてゐるが、中支では瓦としては北方にみるごとき黄、碧琉璃のものは少なく、極薄手の小形のものや野地板もなく土もあげずに葺かれてゐるが、磚は今もあり煉瓦同様の形となつて家屋の壁、塀に使用され、地震のないこの國では基礎も薄弱に高く四、五丈も積みあげられてゐる。ことに各戸は實に塀を以て圍まれ一の城郭の感を示してゐる、塀と犬は彼等自警の唯一のものであり、ほこりである。

薪 炭 鹽

ゆくところ山と水になれた吾々日本人に見渡す限りの平原に山と水のない大陸は實にも足りなさを感ずる、揚子江を遡江して湖北の地に至る間樹木のある山はたゞ九江より廬山をはるかに望んだにすぎない、其他の山々は凡て樹木のない草山をみるのみ、すでに内地の海岸よりの村落の人々が苦しむ如く、支那の人々は薪炭の貴重さは何千年來味つてゐよう。諺にも

買仔便宜柴、燒仔隔底鍋

それは薪は安く買つたが鍋底は厚い。即ち矛盾を語るものであるらしい。尙甚だしい例は

薪 桂、米 珠

薪が檀木の如く高價、即物價の騰貴を語るものだといふ、薪炭の不足に對する之が補充には各種のものが用ひられてゐる、例へば芦の立枯も綿、胡麻がら、凡ての農作物の收穫後これと藁とをよつて使用してゐるし、女子子供等は草をとり、冬は芝草の根までを掘つてゐる、田舎の農家にゆくと壁に牛糞がぬりつけてある。

どんな木片でも子供等は捜しまはり燃料にしてゐる有様は實にみじめさを感じる。

燃料の不足は都市では最もはげしく、中支では冬期よほどの有産階級でないと火鉢を用ひない、老人などは「烘爐」或は「銅爐」にかぼそい火を入れて暖をとつてゐる、烘爐は陶製で銅爐は文字の示す通り銅製である。

尙細民の多い町では路傍で湯をわかつて一錢二錢と賣つてゐるし、各戸に少くも一、二の魔法瓶が用意されてゐて、何時でも湯茶が饗應される組織になつてゐる。

燃料と最も關係深いものに鍋がある、支那では鑄物の鍋は少なく、ありとするも極く薄手のもので、多くは鍋は薄い打物から出來てゐる、この打出の作製は日本に比類のない進歩を示してゐる。某寺各種の工藝品中鐵、眞鍮は實に高度の技能を示してゐるのを見る、但し奈良の博物館での國寶千體佛をみた際に其技能の偉大に驚いたが、たしか推古朝のものだつたと考へる、すでに其昔日本にこんな技術が支那から輸入されてゐたのだらう。勿論日本にも金澤にのみ今も残る鐵槌起の工藝はあるにはあるが、要するに鍋は薄くなれば燃料に影響するため打出しの鍋が自然に發達したのだらう。薪炭の不足から間接の事象に飲食物の冷いものは安價であり、あついで料理はこゝに好菜として人にも饗應し且つ自己もこれを欲求する結果ともなるだらう、日本の如く薪

炭に不足しない人々はあたゝかいものも、冷いものもさして大差なく感じてゐるが、支那では實にあたゝかいものこそ好菜即御馳走となる結果を來すのであらう。

薪桂に對して米珠といふ言葉があるが、豐作と收穫皆無の一定しない支那で一朝不作となると當然米は騰貴する、日本に比して米價の一定しないことは支那では甚だしい、湖南湖北地方で實際見た有様は年二回豐作だと米價は下落する、七八圓の米が五六倍になることは何等の不思議でもなし。

偽物

清朝の大學者阮文達の弟子が嘗て焼餅（日本のやきもちの様なもの）の凹凸面が古代文字に依つてゐるのを手拓して阮先生をだましたといふ笑話があるが、支那の偽物は天下晴れてのことで、これにかたられるのは自己の注意不充分を表現するわけで、紙幣、銀錢もウツカリすると偽物をつかむ、だが他面信用ある錢莊での兩替等は絶対に信用して可なりである。

一番多いのは古物の偽物で、陶磁器、古銅器等は一萬中に一品も眞物があればよい方であらう。尙これらは日本製品が可なり多く輸入されてゐるにも驚く。こんな諺がある。

不開張三年、開張吃三年

これは骨董屋に對する言葉で、「三年店を開かずとも一度店を開いたら三年喰へる」といふ意で骨董屋には東坡、岳飛、石田、板橋何んでもごろ／＼する程ある、又宋代青磁なども至る所にころがつてゐる、ところが慾深連中がこれを掘り出さうとして飛んでもないものをつかんで歸る。

嘗て龍泉青磁の壺が外國で二百五十萬圓で取引されたこと等、掘出不可能を示す一例である、古來支那では帝室黨が景德鎮に置かれたが、そんなものは破片がすでに貴重品で二錢銅貨大の破片が加工して阿片具に利用されて高價に取引されてゐる事實をみてもわかる。

播州二見出身の横川工學博士が數百點の支那陶磁を數年前獻納されて東京帝室博物館に展覧されたことがあるが、支那に來てはじめて横川工博の眼識と努力をしみ／＼感ずることが出來た。然し如何に偽物が多くても孔・蓋・老子等の筆蹟は一葉も眼にふれなかつた、やはり聖人として尊敬するこれらの偉人に對する偽物はしないらしい、それと典籍の偽物は見かけなかつた、宋代版の仿製などは可能事であらうが行はれないらしい、勿論それは需給關係もあらうが、やはり學究の徒は古來清貧にあまんにしてゐることに原因しよう。

布

大體支那の布は絹・麻・綿と羊毛の四種に大別し得られるだらう、最も高價なのは「どんす」で蘇州から出るもの所謂南京どんすとして日本にも多く舶載された、古く室町時代には絹絲が日本に輸入され絲割符制度が成立し、今も其梱包に使用された「絲印」が遺存して豊太閣もその古雅な絲印を自己の印として使用してゐる。

だが日本の養蠶の急速な進歩は支那の製絲を遂に衰退せしめて今や日本製人絹が全面的な勢力をもち、麻と綿のみが唯一の支那産と化してゐる、麻は其多くが「からむし」を原料とするもので各種の種があるが揚子江流域の湖北、湖南、河南、江南、江西、四川が主要産地で大別して白麻、毛把、青麻の三種とされ、夏布といふ名稱で麻布は多く夏期に用ひられてゐる。

綿は支那主要産品であるが至る所に生産されてゐるが、紡績に原綿として使用されるものも、綿繰は凡て手工業で各戸で手動具により脱種されてゐる、尙農村では今も手つむぎによる手織が行はれて手織布は大體二種に分類出来る、一は古來の手織と他は手動の機械織の二種で古來の手織は日本幅よりやゝ廣い程度一反、一正等にまかれてゐるが、各地によつて其長さは一定しない

三十尺乃至四十八尺或は五十三尺が一疋であつたり不可解な慣習である。

支那は平素藍色の衣を最も多く使用し、尙僧侶、軍人等は薄墨色の綿布を常用する、一般に衣服地を竹布とよび、女は九尺、男は十一尺あれば一着の衣服が製作される、幅は日本の大幅のものと同様に似てゐる。

印花布

すでに租界のある都市から次第に其かけをひそめてゐる支那工藝の粹と見るべきものに印花布がある、併し一步農村に足をふみいれると掛子、臥單、圍裙等多くの利用價値をもつてゐる木綿置形藍染布を限りなくよいものと考へてゐる、都市の電盪髮姑娘達には一顧の價もない土産とされてゐるが、其模様の雅典味、忍冬唐草、寶相華、或は蘭、梅、竹に喜鳥を配し藍色にクツキリと白く螺鈿からうける感じは之もゆかしい。勿論日本にも半世紀の昔「置形染」とよばれた、これに似た藍染があつた、田舎の娘達が田植の晴の「おこし」はこれによくも似通つてゐた、だが圖案に於て印花布は數等増まさつてゐよう。

この布のおき型は紙を自由に切抜き、藍房で豆と石灰の粉を混じて型を置き染める簡單なもの

ではあるが、市井の無名の工人には幾千年來流れてゐる古藝術を今も充分生かしてゐる。だがやがて此優秀な工藝品も遠からず支那の地からかけをひそめるだらう。

備

今次事變は支那全土に亘つて澤山の「軍人支那語」をつくつてゐるか、特に「備」或は「備公」といふ言葉が中國人を意味する言葉である、そもこの言葉の眞意は

對等の人又は以下の人を呼ぶに用ゆる人稱代名詞、汝、君の意

と辭書に註記されてゐることは今更申す迄もないが、その言葉に八公、熊公の公がつき「備公」といふ新語をつくつてゐる、其餘響はお互に用ゆべからざる不愉快味である、日支親善或は善隣友好のために使用停止を熱望する一人である。

もし中國人から備と呼びかけられた場合、如上の觀念から實に不愉快を感じる。

すでに過去清國事變、日清戦に寒心すべき言葉が生れてゐるが、今又可なり多くの不愉快な新語が登場してゐることは、日本國民の體面上から且つ日支親善のためにも悲しむ次第である。

姓

日本姓に比して支那の姓は實にまとまつてゐると思ふ、勿論日本も明治維新迄は整然としてゐたのが、明治になつて混亂の極みをつくしたのであるが、大體支那の姓は極珍らしいもの迄採録しても千種位にしかならず、普通は四姓張、王、李、趙で一般には百家姓とよばれる程度でまづ百種と考へてよいと思ふ。

普通は姓は一字からなつてゐるが、誰もが知つてゐる二字姓の有名なものを擧げると

歐陽、司馬、諸葛などがあるが、今ではあまり耳にしない。たゞ上官といふ二字姓は急就篇を讀んだものは今でもこんな姓があるのかと合點するであらう。

珍らしい姓には、牛、馬、羊、水、火、米、麥、雪、貝、雷などがあるが「馬」といふ姓は現に日本にもあるからさして珍らしくなからうが、支那では馬姓はまづ回々教徒である、往年滿洲で其名を知られた馬占山も回々教であるとか、尙「牛」は最近の名著とされてゐる林語堂原著の譯本「北京好日」に「牛」といふ大官が出て來るが、先生「牛」とよばれることをきくと面白い笑話記されてゐることは先刻御承知と思ふ。

自分の交際した人々の變に感じた姓は艾アイといふ姓で「よもぎ」といふ意で、勿論農村出身であつた。まづ、張、王、李といつておけば十中二三割迄はある、ちよつと中華人名辭書をくつてみるなれば「王」姓が最高位を占めてゐる、尙日本と共通な一字姓では林、宋、吳、多、星、納、原、城長、秦等は昔は唐土と不淺の宿縁があつた人々であらう。

とにかく支那姓は官位とか地名から來たものは極すくなく、多くは意味を特にもたない文字が使用されてゐることが多いのも日本と變つてゐる。

筆者は幸か不幸か姓名四字兵に支那姓に或は支那名に何れも多くあることゝすぐ記憶してくれた太、田、陸、郎、何れも姓にあり、ことに田と陸とは中支では可なり自分が知つてゐる人々中にもあつた、それで戲談によく姓名をとられる田陸生とかくと「明白」でちが早かつた。

支那料理

御馳走といふ日本文字が支那で通用せぬ如く料理に對する觀念も支那と日本ではよほど異つてゐる、最も相違した點は日本の各個本位に料理が盛られるのに對してこゝでは一皿にもつて各々が手を出してとる、尙極端な例かも知れないが茶席の會席の如きはものを喰つたあときれいに始

末する、大體日本では食事したあとをなすだけ美しくしようといふ觀念のあるのに對して支那料理の席では所謂喰ひちらし、西瓜の種はプウ〜と吐きちらすし、魚や肉の骨はあたりかまはずちらかす、一回ごとに臺布はよごれてしまふ、そしてはしもスプーンもじかに置いて最も親密な表現は自分の喰つてゐる箸でものをはさんでくれるそのことである。

古來毒殺の多い支那では皿に各個料理を盛つたりしようものならどれだけ疑を受けるか知れない、それがために箸も象牙や銀が多く使用されてゐる、毒氣に會ふとこれらのものが變色するとされて、珍客には必ずそれが用ひられる、支那料理をその料理方法によつて分類すると大體次の十七種に分類される。

炸 油で揚げたもの

炒 油でいためたもの

煎 油でいためて煮たもの溜りあんかけ料理

燴 油でいためてからたつぷり汁を加へていたもの

烤 火であぶつたもの

燒 油でいためるか又は焼くかあぶるかして煮たもの

煮 強火で煮て取出したもの

湯菜汁物

湯 スープの中に身が澤山いつたもの

燗 弱火で蓋をして永く煮たもの

燗 蓋をして汁をたつぷり時に蓋をあけてみながらにたもの

蒸 文字の通りむしたもの

燻 いぶしたもの

蜜 蜂蜜を使用したもの

替 味噌を使用したもの

拌 和へもの

熬 汁物で湯菜と湯との中間汁が多くも少なくもないもの

煙塵漠漠

酒

中支に来て約一年の間、自分は酒といふものについて可なり悩まされた、それは酒を飲むためではなく、飲まないための悩みである、隊員も知人も誰もが酒を飲まない隊長などあるものではない。酒を飲まない者は話がわからないといふことを時々耳にする、隊員は酒を飲むことが出来ない場合、如何にして酒を手に入れるか、一つの大きな問題である。酒酔を如何に遇するか、これも亦問題である、自分に取つて酒酔ほど不愉快な者はない、恐らく戦地のコレラ患者以上に不愉快な者である、それだけ酒については「涙であり溜息」であつた、だが心のうさの捨て所は遂に発見することが出来ず、悲しみの酒でしかなかつた、自分には何時も文字通り酒を飲むことは痛飲に外ならないのである、だが酒を飲む時間、酔ひしれてゐる時間、そんな時間は一回も自分にはなく、その間に古雑誌を漁り、手紙を書き、雑文を書く時間が與へられた、だから今ではむ

しろ酒飲みのあることも、自分には一種の空間を生活の上に與へてくれる。とになつたことを喜びとしてゐる、それと共に二つの悟りが出来てきた、結局どうしても酒と離れて生活の出来ない諦めがついたことである、丁度磁石の兩極にプラス、マイナスがあつて一つの軸上に静止する様に相反してゐるが、不可分な關係にあることを認めないではゐられない。むしろ相反するが故に一つの動きをもつものであることを。

漢口に來て早くも七ヶ月、支那人も次第に増加した。だが苦力にも通行人にも酔ひしれてゐる人間は今日まで見ないことである、私はこの不可思議を戦争によるものかと解してゐた、併しある日漢口銀行の支店長寶妻氏を訪問して、この問題を質問してみた、事變前は如何と、だがやはり事變前も酔ひつぶれた支那人は街路上に見ないとのことであつた、何に原因するのか、その理由には不可解であるが、支那人は酒酔を最も醜惡なものとしてゐることは事實である、相當酒を飲んでも街路上に前後も知らず横臥するが如きことはないらしい、お互に酔ひたほれることは苦力にすり恥かしいことだと隊員にも語つてゐる。

支那人は一般に酒に對して慎み深く、且つ強い、他面「在理」といふ一種の戒律教を奉ずる者が可なり多い。他人の前で醉態を演ずるのは非常に忌避する、もし酔つた場合には寝ることが通

例である。

洋酒はあまり好まない、ブランデーは白蘭地酒と稱して非常に珍重する、ビールをのむは現代的な人間で料理屋に酒を持参してゆくことも一寸日本と變つてゐる。

日の丸

國旗のもつ意義、それは内地でみる場合と全く異なる感激をもつ事である、占領の旗がひらめく時、中空に如何に偉大さを示すことか、進軍の自動車に、戦車に翻翻とひらめく國旗、船上に國旗をひらめかして溯江する大小船、うれしくも涙の流るゝとおぼゆる風景である、占領地に入る時、支那人の家屋の軒並みにかゝげらるゝ日の丸、白に赤のまんまるを示すことによつて、彼等は日本國旗を表現するものと考へてゐるが、全幅の白紙布を赤丸の比率を考慮に置いてゐないために、何れも赤の日の丸は小さく實に滑稽なる矛盾した旗である、一目にして吾等は支那人の作製した旗なりや否やを認識することが出来る、そこに模倣の困難がある、やはり日本人の心の底に流れる國旗に對する觀念は確固たるものが存在する。

樂書

武昌に入城して第一に目についたのは誰もが黄鶴樓下の城壁の蔣を中心とする壁畫であつた、だがよく壁畫を見る時、畫面から感ずることは守勢そのものゝ消極的な觀念である、日本の戦争畫に見るやうな攻勢的な精神は寸分も盛れてゐないことである、最も興味ある繪は瑞昌の町の入口にあつた、この繪畫はたほれた支那軍人を日軍人が銃劍をもつて突きさゝんとするに對して、支那軍は下から日軍人をさそうとする構圖で、題して「最後の勝利」に至つては、實に噴き出しなくなるものであつた、だが至る所、注意するに壁面に子供の樂書のないことである、佛閣に樂書の多い内地、共同便所も注意してみても支那には樂書を認めない、有りとするも、極く稀れな事象であつた、この點のみは同胞は羞しい事ながら彼に一步を譲らなければならぬ。

面子

面子とは顔といふ事、ところが面子云々といふ場合は日本の體面といふ意味であるが、これが案外甚深な意味をもつてゐる、例へば罪惡を責める場合にでも、第三者がゐる前で之を叱責する

と「我的面子沒有」で反抗心を起す、一般に功利的な支那人が場合によると大金もなげ出す、料理屋で數人集つて會食した時に誰が金を拂ふか、面子の問題となると中々厄介で、此際には全然功利主義でない彼等を見る、葬式を盛大にやる事も面子である。人の見てゐる所で飯を食ふこれも一つの面子であらう、又支那人は買物を包んで持ち歩かない、はだかのまゝ携行する、これも俺はこんなものが買ひ得るのだといふ面子であるとされてゐる。

看熱鬧

凡てに無關心だと思ふ支那人が案外物見高い、時々支那店で物を買ふ場合、それが日本の將校だとなると數人はすぐ集る、そしてニコ／＼と笑ひながら見てゐる、何をみてゐるのか多分日本將校は何を買つてゐるのか、又なんぼで買ふかそれが大きな興味らしい。

看熱鬧とは「にぎやかさ」を見るといふことで、嘗て事變前、共產黨員を大道で首をきつてゐた頃を知つてゐる人の話にそれを平氣でニコ／＼しながらみてゐる群集には驚いたと語つてゐた。

矛盾

この文字が支那で出来たゆかり話があるだけに此國は矛盾の本家である、安居樂業、要和平それを求める反面、彼等には惨忍酷惡を極める思想がある、功利主義と思ふと乞食に金をやる。

乞食

支那に来て乞食の多いのに驚く、一つの町に入城した場合、きつと不具者の乞食と野良犬のみが眼につく、市街地では人ごみの中を足や手のないもの、甚だしいのは漢口に入城以來三年間毎度見る乞食に、背で動く乞食がある。盲目もかなり多い、然し盲人は多く音曲を流しとして、小族等が手をひいてゐる、入城三ヶ月もするとすぐ横笛で、日軍の誰かが教へたのか軍歌などを吹いて歩く、子供をもつた女などはやはり多くゐる、その廣告の文に
善心的老爺奶々 可憐可憐我
などと書いてゐる、モヒ患者なども多く見る。

蓮根

支那では可なり紅蓮が多い、漢口の郊外では田に白蓮を作つてゐるのを見かけたが、多くは沼

地に作り中々深くて、とても掘る事は困難である。文字を知る者には蓮根といふ文字は通ずるが一般には「藕」でなければ通じない、おそらく支那の野菜で蓮根ほどうまいものはないと思ふ、これを食べふには日本の様に煮ない、多くは輪切りにして生で食ひ、又は藕粉と稱し片栗の如く粉末として食用とする、これに杏仁を入れたものを杏仁茶と稱する。
尙蓮根の實は蓮珠と稱して、砂糖又は蜂蜜だきとして菓子とし、月餅に入れたり色々な料理に用ひる。

祖師

魯班。大工、左官、石工の祖師、太平記に「魯班が雲梯」とあり。

老君。老子。床屋の神、理由は不明、舊六月十五日は誕生日で床屋は休業。

吳道子。畫家の祖師。

藥王。藥屋、一般には唐の章善俊。

滿洲では吉林の藥王廟、四月二十八日は其の祭禮。

唐玄宗、即明皇。帝は梨園を組織して斯道を奨勵せり、白樂天の長恨歌に

「梨園弟子白髮新」 廟はなく普通劇場の樂屋裏に祭る。

龍王。船夫。

財神 趙匡胤、一般利財希願

茶

支那の街で一番眼をひくのは藥屋と茶屋だと思ふ、支那人と日本人は共に茶のすきな點に於て一様であらう、訪問した際何よりも茶を出す、又は煙草を差出す。

如何なる職場にある者も瓶をもつてゐる、又苦力等の集る場所には茶を賣りに來る、街の所々には茶房とて喫茶の場所があり、ノンビリと茶をのんでゐる、劇場にはお茶賣りがゐてシポリ手拭と共に賣つて歩く、誰もが急須の口から氣樂げにのんでゐる、嘗て相當な上流に屬する支那人の家庭を訪問した時、主人は丁度阿片をのんでゐた。やがて急須に茶をついで口のみをしてゐたが、次には美しい若い奥さんが口のみにする、之が當然なのだらうが、自分がはづかしい氣がしてならなかつた。

薪炭の少い支那では茶のため湯の溫度を保つことは色々考慮されてゐる、例へば葉、布、綿、

各種の材料をもつて器物をつゝみ保温に努める、最近魔法瓶が使用される事は驚くべき數である、これによつて何時でも茶が供され又自分も喫茶の便がある。こゝろみに支那の龍井（杭州）をのんでみたが、昭和十五年春、一斤六圓五十錢事變前迄は二圓迄のものなりと）やはり吾々の趣味とは合致しない、これは綠茶で尙紅茶、ウーロン（の如きものがある。これに色々な香花を入れたものがあり、茉莉花を入れたものは可なりきつい香がする。

茶は安徽、湖南に多く産する、特に湖南省舊州は山嶽地帯で其生産多し。

China as a tea Producer BY

Borio P. Torgaheeb 1928 によると可なり山土地域に迄栽培されてゐることが知られる全支の耕作反別を掲げてゐる。

反別 5353.355 mow = 7.260sq

生産 5.519.574 Picul = 60.45Kilag

麻 雀

起原、寧波の漁夫船暈をまぬかれるために麻雀牌をもてあそび、氣をまぎらせりといふ一説

煙塵漢漢